9618

海外協力の現場から

青年海外協力隊員の記録

テュニジア編

昭和55年3月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

RY

JICA LIBRARY
1063729[6]

国際協力事業団
受入 昭59. 5. 24 | 417
登録No. 07399 | 36 JVP

序にかえて

昭和55年3月　　青年海外協力隊事務局長　黒河内　康

ここに，青年海外協力隊員の活動に関する報告書集をとりまとめ，協力隊事業に直接かかわりのある各位はもちろんのこと，日ごろから協力隊事業に深い関心を示され，ご支援を賜わっている多くの方がたの利用に供することができることは，私のまことに欣快とするところである。

協力隊員の活動は，開発途上国において国づくりにいそしむ人びとの"お手伝い"が目的である。時には，お手伝いでなく，自ら手を下してしまいたい誘惑にかられることがあって不思議はないし，事情が許せば，それを排除するまでもない。しかし，多くの場合，「代位」ではなく「介助」であり，もどかしさはもちろんのことだが，いろいろ屈折した感情が累積することもあろう。

その中で，より一層，途上国の人びとの中に融けこもうとし，協力手法を改善充実しようと悩み，工夫している過程から生まれた報告書は，貴いものである。報告書に書かれていることはもちろん，書かれなかったことについても。

この報告書集に収録したものは，そうした数多い隊員の報告書の，ほんの一部分にしかすぎない。協力活動の側面も限られているところがある。続編にその補充を期待したいと思うが，読者各位におかれては，この報告書集を手がかりに，協力隊員の活動の間口と奥行きが大きく，かつ多様なることを推察していただきたいと念じている。

協力隊員の技術・技能は，水準が高いだけでも充分でないし，日本式の技術移転で成功するとも限らない。技術・技能をもった協力ボランティアにしてはじめて，途上国の技術・技能の中堅層の育成につながる手法や径路が生まれると信じている。teacher of teachers として，あるいは trainer of trainers として活躍できるよりは，1対1のカウンターパート養成に終わることもあることに，南北問題のむずかしさがある，と感じとっていただければ，幸甚である。

この報告書集では，関係職種の協力隊技術専門委員の方がたのアドバイスをいただいて，隊員（OB）の追記と合わせて掲載した。現在活躍中の隊員はもちろん，これから協力隊に参加しようとされる青年諸君にとって裨益するところ多いと確信する。ご協力いただいた各位に感謝の意を表したい。

テュニジア編

目　　次

序にかえて……黒河内　康…(1)

I 首都テュニスとオアシスの町トズールでの4年間 ….飯野美恵子…(5)
日本に帰って考えること……飯野美恵子…(22)
飯野隊員の報告書を読んで……森　まさ子…(24)

II 職業訓練所における業務と諸問題……多田　潔…(27)
日本に帰って考えること……多田　潔…(44)
多田隊員の報告書を読んで……堀江　博…(46)

III テュニジアをめぐる内外情勢と医療援助…本田　徹…(47)
日本に帰って考えること……本田　徹…(81)
本田隊員の報告書を読んで……小原　博…(83)

IV ジェルバ地方病院の産科業務と分娩統計…西村勝美…(85)
帰国して思うこと……西村勝美…(104)
西村隊員の報告書を読んで……山崎トヨ…(107)

V テュニジアでのバレーボール普及活動……大島　晃…(109)
報告書への補記……大島　晃…(115)
大島隊員の報告書を読んで……吉村恒男…(124)

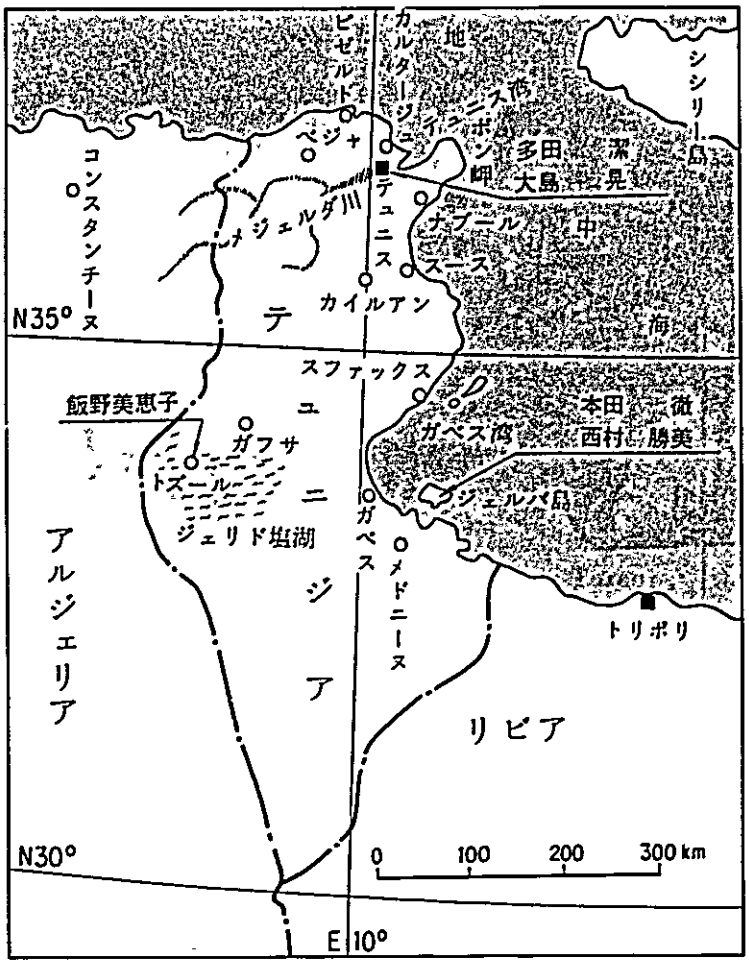
あとがき……高橋成雄…(126)

〔付〕テュニジアと協力隊 ……(2)
テュニジアの略図と概要 ……(3)

テュニジアと協力隊（昭和55年3月1日現在）

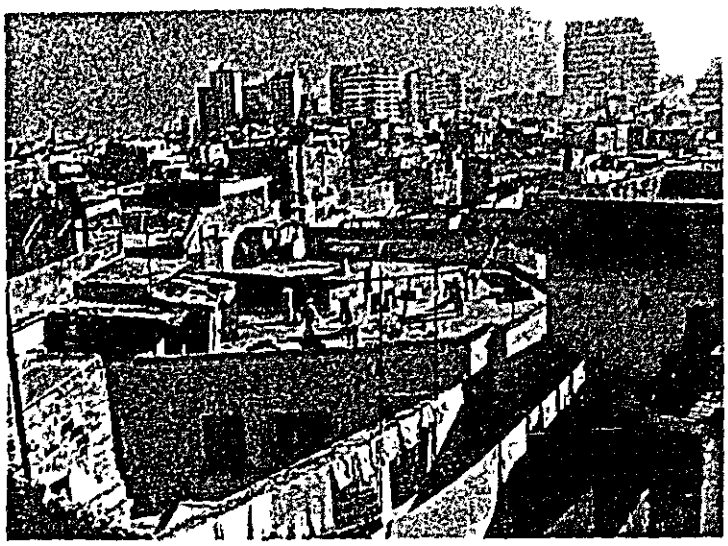
最初の隊員派遣：昭和50年4月								
職種部門	農林水産	製造	保守操作	土木建築	保健福祉	事務文化	教育訓練	合計
派遣中	1		9	1	5 (5)	1 (1)	6 (2)	23 (8)
実績 (累計)	4	2	14	1	18 (17)	2 (2)	16 (4)	57 (23)

（注）カッコ内は女性隊員。



テュニジア共和国概要

面積：163,610平方キロメートル(日本の0.4倍)
人口：607万人(アラビア人93%、ベルベル人5%、77年央国連推計、
　　人口密度：36.9人／km²)
宗教：イスラム教
公用語：アラビア語、フランス語
1人当たりの国民所得：712ドル(日本4,937ドル、76年)
通貨：ディナール、1米ドル＝0.4165ディナール(78年7月)、1ディナール＝約600円
首都：テュニス(55万人、75年)
元首：ハビブ・ベン・アリ・ブルギバ終身大統領
主な産業：小麦、オリーブ油、ブドウ酒、果実、石油、リン鉱石



首都テュニスと
オアシスの町トズールでの4年間

総合報告書（50年10月～54月10月）
54年10月31日記
派遣国　テュニジア　50年1次後期組
職　種　看護婦
氏　名　飯野　美恵子
配属先　①Hôpital Habib Thameur, Tunis
②Hôpital Régional de Tozeur, Tozeur

飯野隊員の略歴
氏　名：飯野美恵子
生年月日：昭和22年11月23日
出身県：福岡県
職　種：看護婦
派遣期間：50年10月～54年10月

1　テュニス

こぶしほど大きく赤いざくろや，堅くてあくが強くジャムにする特大の西洋梨，夏の日射しを秋風の中で抱きこんでしまったような，季節はずれの長西瓜が店頭に並ぶ１０月もなかばのテュニスに，テュニジア協力隊看護婦隊員第2陣としてやって来たのは１９７５年，今から4年前である。

建物ばかりが真新しくて，余り飛行便数もなく，いかにも閑散としたテュニスのカルタゴ空港に降り立った私達一行4人を迎えたのは，調整員一家，先輩女子隊員，柔道家の家族であった。テュニジアは１９７４年7月２３日にボランティアに関する協定が調印され，ＪＯＣＶの協力活動が１９７５年の4月から始まったばかりで，第1陣の看護婦隊員2名がやっと半年を経過したにすぎない，まだ協力隊活動史の新しい国であった。

店頭包装したままのラジオなどが税関の目に止まるところとなり，3時間余り空港に足止めされた後，時折小雨のおちる夜の闇の中を車に分乗して走り，ねっとりとしたオリーブ油独特の臭いが漂う小さなホテルにやっと落ち着く事ができた。

東京の羽田を午後に出発する予定であった私達の飛行機が，整備の為，夕刻まで飛ばず，飛んだかと思えば3時間ほどで再び羽田にもどり，別の飛行機に乗りかえたりしたため，パリでも昼食をとるほどの時間しかなく，羽田からテュニスまで延々と運ばれた私達は，たっぷりとオリーブ油を使いボリュームのあるテュニジア料理を前に，調整員のねぎらいや先輩隊員の話も快い子守歌となり，ナイフ，フォークを動かしながらいつの間にか舟を漕ぐ有り様。

"自由通り"と呼ばれ，アメリカ大使館をはじめ各国の大使館が並ぶ大通りから少し奥まった所にあるこのホテル・サンジョルジュには，それとわかる外国人の泊り客は我々4人のみで，右を向いても左を向いても，ボーイも客も同じような顔のテュニジア人ばかり。聞きなれないアラビア語で言葉をかけ合うように話を交わしていた。率直すぎるほどの好奇の目が注がれる中で，1週間ほどホテルに滞在した後，先輩隊員の家，調整員の家と仮住居を始めると同時に，私達はいよいよテュニスの各国立病院で仕事を開始した。

当時，看護婦隊員６名に秘書隊員１名を加えた女子隊員７名がチュニジアの協力隊員の総数であった。

チュニスの中心街にはフランス統治時代からの装飾の多い石造りの建物があちらこちらに見られ，それらは大抵，公共の施設であった。中には数十階という高層の近代的ホテルもあったが，街角には裸足の子供ややせた乳児を抱いた母親が道行く人々にもの乞いの手をさし出していたり，壊れた窓が木枠とガラスで修理してある，もう中古車とも言えないような車も走っていた。

モダンな改装，新築の建物が見られ，商店のウインドウをのぞく人々の身なりもこざっぱりとした今日のチュニスから見れば，まだまだどこか泥臭く，くすんだ色が街に感じられた。それでも一国の首都らしくデパート，スーパー，映画館，劇場と並び，ほとんどの物が安価，高価，質を問わなければ容易に手に入り，生活は想像以上に便利であったが，その便利さ故に，ある種の私の期待は裏切られた。

日本の小都市のような新市街よりも，家と家の間を迷路のように道が縦横に走るアラブ風の旧市街メジナの方が，より大きな関心を誘い，いつになったら，この迷路の中をしつっこい呼びこみの声をかわし，平気で一人歩きできるようになる日がくるだろうかと想像したりした。チュニジア人は髪の毛がちぢれているものの，ほとんどが日本人とかわらない目の色と肌の色で，時には日本人かと思われるようなチュニジア人にも出会うのだが，やはり顔のつくり，身体のつくりともアジア人の私達は独特で，ホテルと同様，街に出れば「シノワ（中国人）」と呼ばれ，見られる事に慣れなければならなかった。１ケ月程で同期の隊員と二人でアパートへ移ったが，何度訂正しても前に住んでいた先輩隊員の名前で私達を呼んだり，お祭りの日には隣のオバさん，上の階のオバァちゃんからお菓子のおすそわけがあったり，不必要にベランダへサッカーのボールを放り上げたり，通勤途中を見ていたというだけで夕食に招待されたり，何とか私達と話をしてみようとする人達がこの下町のアパートの周囲には驚くほどいた。

病院でも，わざわざ日本人の私を目で確かめにやって来た他の病棟の看護夫もいたりして，突然，ふってわいた珍種に対するような好奇心のほどにも驚かされた。それらの一つ一つに応えていく事は，心身の緊張と疲労を伴うものであったが，ゆっくりとした時間がないと言っても，同期隊員と二人という気楽さもあり，あちらこちらの家庭に出かけては不自由なフランス語を操り，チュニジアの家庭料理を満喫した。時には，ありあわせの日本料理を

作り，招待した彼らのはしの使い方や初めての料理に戸惑う顔を話の種に楽しい一時を過ごしたりした。

人も環境も未知で，見る彼らにそうであったように，見られている私達もまたヤジ馬根性を刺激されずにはいられないのと，一日も早く生活に慣れたいという気持ちもあった。人に対しても環境に対しても，今だに知らない事の方が多いけれど，当時のエネルギーを今に求められても，おそらく現在の私には出し得ないと思う。時間の経過は未知の部分を既知にする以上に関心を行動に移すエネルギーを削ぐもののようである。

テュニスの郊外には，白い壁と緑や青の丸瓦，精巧なすかし模様の入った地中海ブルーの窓枠，あおあおとした緑の芝生に真紅のハイビスカスや淡い紫のブーゲンビリアが色鮮やかによく映えて，そこには騒音もなく，時折，定期バスや乗用車が通り過ぎる程度の，静かでしょうしゃな邸宅が並ぶ，エルマンザと呼ばれる高級住宅地がテュニスの北の一角にあり，同じ郊外でもテュニスの西，湖のほとりには，地方から着のみ着のままで流れて来たり，無職の浮浪者などが破れたテントや板切れ，トタンを打ちたててバザールを開いていた。中古品，半壊品，古着など様々のものが所狭しと置かれ，すぐ傍を通過する高速道路の騒音にかき消されながら，値をかけ合っていた。

旧市街の南端にも同じような所があり，古着，雑貨の他に野菜，果物などを路上に並べては商っていた。野菜，果物などは中心街の1割から2割は安く売っていたので，日中はほとんど買物をする女や子供で混雑していた。トズールの市場では男や子供ばかりが目についたが，都市テュニスでは買物はやはり女，子供の仕事のようである。

テュニスでもトズールでもかわらないのが子供達の買物で，日本で言う"子供のおつかい"ではなく，彼らは商いをする者と値をかけ合って買物をしていくし，また店の留守番をしている子供達も，相手が大人であろうが，対等に値をかけ合って商う。

アパートへ移った頃から，バス通勤を止め，徒歩通勤にかえたのは，時刻のあやふやなバスを待ち遅刻するよりも，確実に定刻に病院に着く為であったが，このメジナ南端のバザールを朝夕に往復するのは，意外な楽しみもあった。そこには朝の早い労働者の為に各所に雑炊屋といったものがあり，四季を通じて胡椒，にんにく，オリーブ油の混り合った湯気を路地にただよわせており，吐く息も白む冬の朝などは，ちょっと寄ってひと椀すすってゆきたい誘惑を何度も感じた。

オリーブ油，トマト，にんにく，胡椒を基本にしたテュニジア料理にも様々なものがある。なかでも私の大好物になってしまったものにムロフィヤがある。テュニジア人でも好き嫌いがあって，回転が悪い為にレストランでは余り作っておらず，家庭でないとなかなか食べられない。ムロフィヤという7，8月頃に咲く植物の葉を乾燥させ，粉にしたものをたっぷりのオリーブ油と混ぜ合わせ，それを火にかけて煮たったら肉を入れ，塩，胡椒，にんにく，トマト，玉ネギ，月桂樹の葉を入れ，それらが浮くほどに多めの水を加えて，2，3時間。水が減り，スープにとろみがつくまで，くつくつと煮こんで出来あがりである。この料理に初めて出会った時には，独特のくさ味といい，肉が黒いポタージュの中に居座ったような姿といい，お世辞にも美味しいと言えるものではなかったが，何度かおつき合いするうちに，この独特の味が病みつきとなり，知人の家に招かれ，何が食べたいかと問われれば，まず決まってムロフィヤと言うほどになってしまった。この他にもムトンの脳，頭の姿煮，腸をよく洗って胡椒，米，香菜，肉などを詰め込み，麻紐でボール状にして煮込んだものや，薄く大きくのした小麦粉の皮の間に，肉や玉子，玉ネギ，にんにく，胡椒をピリピリ利かせてペースト状にしたものをはさみながら，たたみこんでオリーブ油で焼いたものなどは，やはり家庭でないと食べられない。

それらの会食は，時には，一つの皿からパン，あるいは数少ないフォーク，スプーンをまわしながら，文字どおりの"会食"となり，3，4人一つのコップから水を飲むという事もあった。家にもどれば生水を飲まないという風に気を付けていても，こうして食事に招かれれば，その家の主人の手前，拒むわけにいかない事も多い。その事によって赤痢，肝炎など，ある種の伝染病にかかる事があるかもしれないが，一堂に会して食事を取る事は，何といっても，見知らぬ他人同士を一挙に打ち溶けさせる効果がある。文化，習慣の違い，時には言葉の障害さえ越えて，見知らぬ異国人同士を友人にする。今日のテュニスであれば，こういう事もほとんど問題にならないくらい，一般の家庭が清潔にこぎれいになっているし，我々外国人にはそれなりの配慮もしてくれるが，トズールのような地方にいけば，まだ水を冷す為に素焼のツボに入れた溜め水や，つるされた皮袋に入った生臭い溜水をすすめられる事もある。

自分の健康と，これら心情的な問題を，どのように処理するかは，外国人一人一人のそこでの生活姿勢によって決まるが，親切感を誇張するようにむ

やみと手を出す事は，やはり避けた方がよいし，また断わるにしても，断わり方があろうし，相手の気持ちをくむ事だけは決して忘れてはならないと言える。それ故にこそ，任期中の定期的な健康診断は，隊員自身が日頃注意してゆくべき事と思う。それでもなお病気にかかったとなれば，政情不安の任国で突然クーデターに出会って，それにまきこまれるのと同じで，途上国で生活する上でのあるべき可能性としての事故とも言える。

テュニスでは，生活の便利さに一度は落胆したものの，都市部の利点も多く，テュニスにいながらにしてヨーロッパの文化に接する事ができたり，その文化を楽しむ事を知り，日本の事，テュニジアの事などを客観的に話す事のできるテュニジアの友人達を知る事ができ，仕事上では問題は問題として，心臓外科看護という新しい未経験の分野を実務経験する事ができ，私にとってテュニスでの2年間の生活は得る事の方が多かった。

Ⅱ　鉗子だこ

右手の中指と薬指にたこが二つ，皮がむけてはまた新しい皮に被われて，いつか見た目にもこんもりと堅くなった。バカンスや中垂の手術で入院し，仕事から遠ざかると，柔かく，平らかになるのだが，再び仕事にもどると，しまって堅くなる。後半2年，トズールの仕事が作り上げたものである。

前半の2年，私はテュニス市南の国立病院，ハビブタムールの心臓一般外科病棟の手術後回復室（Post Opératoire）で，夜勤1年，日勤1年と働いた。トズールと異なり，国立病院でもあり，またテュニス大学医学生の実習病院でもある為，設備，人員，器材と格段に豊富であった。術後回復室には心臓外科と一般外科の二つの部屋があり，それらが一つの部門として手術室，外科病棟と区別されていた。初め私は心臓外科のPostへまわされた。私には日本での心臓外科看護の経験が全くなく，技術協力に来たとは言うものの，現場においては10月に卒業したばかりの新卒看護夫とたいしてかわりはなかった

まず様々の電子機器を駆使する心臓外科看護の実際と，フランス語の医学用語を覚える事から始めなければならず，研修に来ているのかと言われても，打ち消す言葉が小さくなるのは仕方がなかった。こういう状態では，私の看護婦免許も信頼の置かれようがなく，ただ与えられる仕事をテュニジア人の同僚よりも正確にきちんとこなす事によって，私が免許のある看護婦である事を医師や同僚達に認識してもらう事が何にもまして第一の問題であった。

だが，実際のテュニジア人看護夫（婦）はと言えば，心電図が読め，気管内チューブ挿管ができ，静脈カテーテル挿入ができ，心電図の異常波形に対する緊急処置が取れ，中には国際免許を持つ者もいたが，ハートモニターの常時監視を怠ったり，計測もしない血圧を"およそ"などと言って記録したり，同型血液だからと交差テストもしないで輸血したり，心臓停止がくるような重症患者がいても，終業時間がくれば，引きつぎの看護夫がこなくても，さっさと帰るというような事を平気でする。

テュニス2年目の夏，心臓手術をした一人の子供が明らかな看護夫のミスで死んだ。それは様々の要因が重った結果，起るべくして起った事故とも言えるが，後日，関係者誰一人，法に問われたとは聞かない。

日本と異なり，夏は長期のバカンスを取る医師，看護夫（婦），職員が多く，普通だと緊急を要しない心臓手術は人員の充足している秋，冬，春に行なう。その為，バカンス期の間は心臓外科のPostは閉鎖になるのだが，その夏，一人の教授が予定されていなかった心臓手術を急きょ行なう事になり，閉鎖になっていたPostを特別に開いた。日頃だと夜勤13時間の為，心臓外科Postは二人夜勤なのだが，人員が確保できず，加えて患者も一人という事で，卒業後1年目の看護夫一人がその患児の看護につく事になった。彼は1時間間隔で計測してゆかなければならない血圧や脈，呼吸，体温，尿量，出血量，また呼吸器，点滴，ハートモニターの監視と続けていたが，長時間の緊張の為か，朝方，ついうとうととしている間に，麻酔の醒めかけた患者がベッドの上で動き出した為に，手足を抑制してあったものの，血管に接続されていたカテーテルの接続部がはずれ，血液がカテーテルを通じて流れ出し，看護夫が気付いた時には，呼吸器で呼吸はしているものの，心臓は止まり，ベッドの下はおびただしい血液で真赤になっていた。すぐに当直の医師が呼ばれ，心臓マッサージを行ない輸血が始められ，2時間後には意識はなくても痛覚反応が出るまでになった。しかし考えられない事に，その看護夫はそれから3時間後に，またうとうとして，同じ事故が起ったのである。今度は反応ももどらず，第一血管の中には血液がなかったというほどであるから，翌日の午後にそのまま患児は永眠した。まだ8歳になったばかりの少年であった。

何故，その看護夫は2度も同じ事故を起こすような事をしたのか。何故，教授は全てが不足している夏に急きょ心臓手術を行なったのか。一人夜勤である事に何の危惧も抱かなかったのか。何故，不慮に消えた少年の生命に対す

る責任が問われないのか。

事故の翌日，夜勤から日勤にかわっていた私に，看護婦を通じて教授が，もし緊急に夜勤の要請をしたら，私が勤務に出て来たかとたずねたが，私の看護力を認め得なかったから，その看護夫を呼び出したのであり，“今さら”と私は心の中で思った。

日頃，頻繁に接触するレジデントの医師，インターンなどは別にして，教授，助教授は雲上人然としていて，相互に接触する機会は週1回の総回診の大名行列の時ぐらいのものであるから無理もない事ではあったが，日本人看護婦の私がどの程度仕事をしているのか，知ってもいないふうであった。後日，教授が涙をにじませて残念がっていた事とか，事故を起した看護夫が，もう夜勤は嫌だと言って泣いたとかいう事を聞くと，彼らの患者に対する道義はどうなっているのだろうと考えないではいられなかったが，病棟医長，病院長，看護婦（夫）長など組織として，その後に事故を繰り返さない為の事故検討の話し合いがもたれたのを聞かない事の方が，より重大に思われた。

不自由な外国語，未経験な分野，信頼し得ない同僚の仕事，熱意のない，ずさんな管理，加えて高度な器械を使用する心臓外科，それ故にこそ厳重な管理が必要とされるにもかかわらず，それがなされない。例えば，手術それ自体は成功しても，先の事故や手術後の2次感染によって亡くなる患者が後を断たない。

その中で仕事を続けたチュニスの2年間，時には責任を負い切れないような医療事故に連座しなければならなかった。北アフリカで珍しい心臓外科病棟は病院の自慢でもあったが，日本と同様，高度な設備や器械が必ずしもよりよい医療を提供できるのではなく，要は，それを使う医療従事者の患者に対する姿勢によって決まり，むしろそれら高度な設備や器械を使っていれば，より大きな医療事故の可能性を傍に置いていると言わなければならない。

いずれにしろ，チュニジアの医療制度は整備されており，病院にも，日本とかわらない管理機構があり，私などは朝タイムカードを押さなければならなかった。保健省の末端組織である，病院運営の2本の柱の1本の事務部門を通じて，病院に配属された外国人の一人のスタッフである私には，もう1本の柱である診療部門の問題をどうする事もできず，ただ見ているより他なかった。病院長は病院を代表するものの事務部門の最高責任者にすぎず，診療部門の責任者でもあり，チュニス大学医学部の教授をかね，自費診療のクリニックを持ってもいる病院の医師団の上層に対して，彼もタッチする事はで

きないようであった。

ハビブタムール病院の仕事を終えるのを機会に，一人のスタッフにすぎない外国人看護婦の私が，２年間，何を見，何を考えてきたかを知ってもらう為に，レポートを提出した折，病院長自身が，病棟の事情はよくわからないと言っていた。病棟医長はレポートを見て，また何を，と言った顔つきであったが，後日，友人を通して，あの看護婦は今，どこにいるのだ，とたずねていたという事を聞いた。

だが，病棟内の小さな問題から，医療全般の問題と限りないが，テュニジアの保健省もまた，様々に問題解決を模索しているように思える。例えば「ナーシング」という短期医療教育コースがあるが，その卒業生の追跡調査アンケートや現場看護夫（婦）の上級試験へのアッピール，医学生の地方病院での研修，毎年テュニジアのどこかの地方病院へ夏期研修にやってくるベルギーの医学生なども，現場の質の向上，地方医療の充実をはかっての事と思われる。

独立後２０数年，１９３４年に設立されたテュニジア社会党とブルギバ大統領のもと，多数の死傷者を出した１９７８年１月２６日のゼネストなどを経過しながらも，シビリアンコントロールによって政治的には安定し，予算の$\frac{1}{4}$が教育に投資され，その人的資源によって，中東，アフリカに対して開発協力を行ない，テュニジア自身は現実的な開発計画を立てる事によって経済的に着実に歩き，１９６６年から１９７５年の国内物価上昇を年平均４％におさえ，１９７６年のＧＮＰ７８２ドルと途上国中で比較的恵まれているテュニジアのような国へ，個人の技術協力としてくる時，予算のついたプロジェクトを持ってくるのではない限り，すでにあるプロジェクト推進の為の１スタッフとして組み込まれたり，また医療隊員のように，その国の公務員として組織の中へすっぽりと組み込まれる事になり，自分自身の業務計画といったものは立てようがなく，あるいは完全な労働力不足の穴埋めと見られる事になる。

もともと外国のボランティアが要請される事の中には，その国の中間層が不足している事により，中間層の上層となれば高度の行政能力と管理能力が求められ，我々看護婦のような中間層の下層となれば，使い捨ての歯車ともなりかねない。発足以来，協力隊がかかげてきた"人間と人間の協力"であると同時に，ある種の指導性を今日のテュニジアで発揮する為には，フランス語，あるいは英語が不可欠であると共に，一級の技術がなければならない

いのではないかと思える。

この国の中心であるテュニスに焦点をあてる限り，今も各期を通じて，日本を発ってくる隊員が，今後，要請に応え切れず，2年を無為のままに過ごさねばならないという事が起ってくるかもしれない。「テュニジアの何ケ年計画というものは，他のアフリカ諸国に比べれば，足が地に着いていますよ」と言った日本人商社マンの言葉をあげるまでもなく，その堅実性と治安の良さはアラブの中でも筆頭ではないか，と言われている。過去にパリに留学していた日本人画家にテュニスで会った折，アラブの国に行きたいのだが，とパリの旅行代理店に相談したところ，即テュニジアを勧められたと聞いた事もある。

この国の経済が小麦，西洋すもも，オリーブ，デイツなどの農業と牧畜，そしてリン鉱石の採掘だけでなく，その発展を観光産業によっても期待されているだけに，治安の良さは外国人観光客誘致に欠かせないものであり，また各地のHotelの建築，改装，観光地の整備は常時見られる。特に地中海に海岸を持つ北部や東部の町にはTunisieならぬHotelsieと言いたくなるほど，ホテルが立ち並んでいる。紺碧の地中海と真白の海岸，フェニキア，ローマ，アラブと混在する名遺跡，太陽と砂漠とオアシス，それらが観光の目玉商品であろうか。

任期延長後2年の任地は，北アフリカ最大の塩湖ジェリドのほとり，アルジェリア国境まで60km余りというオアシスの町トズールであった。

20万本余りのなつめ椰子をもつオアシスには，湧水の他に積極的なボーリングで揚水した水で，様々のものが栽培されている。エンドウ豆，ホウレン草，大根，バナナ，杏，オリーブ，ざくろ，そして椰子の実とともに椰子の枝葉を利用してかご，帽子からテーブル，いす，飾りだなども作る。そして毛糸を鮮やかに染め，絵柄を織り込んだタピーなどが，この町の特産品と言える。

薄く白っぽい黄土色のレンガで凹凸の幾何学模様を作り，壁と梁に椰子材の太い幹を使った旧形式の家と，漆喰とコンクリート石造りの新形式の家がオアシスの傍に混在している。4階建ての，リセとモスクの塔が，ひときわ目立つ平らかな町である。

人口約3万のトズールに公立病院が一つだけあり，私はここの外科病棟で後半の2年間，働いた。病床100床，職員130人余りのこの病院にも，テュニジアの地方病院の大方がそうであるように，外国人医師が多く，エジ

プト人，ソ連人二人，その麓下の診療所にはパレスチナ人，そして地方研修に来ている医学生。テュニジア人の内科医は一人である。テュニスの国立病院に比べれば，トズールの病院は人員，設備ともに貧弱きわまりないが，それでも住民の健康を可能最大限に支えている。６０km四方に，たった一人しかいないエジプト人の外科医は年中無休，昼夜間断なく緊急患者に呼び出されている。この夏，東洋系ソ連人の産科医がくる前は帝王切開や中絶手術なども彼が行なっていた。その外科医と働く看護夫が本来医師のなす処置まで補佐するのは自然のなりゆきで，法的な事を言っていては患者を手当てし切れないのである。右手の二つのたこも，これら毎日の処置の為に出来たものである。血圧測定やベッドのシーツ交換の他に，切開もし，縫合もし，抜糸もし，ギプスを巻くといった処置が，患者の身のまわりの世話よりも，仕事の大半を占める事になった。同じ組織の歯車には違いなかったが，首都チュニスにおける比重と，小さな町トズールにおける比重は，おのずと異なり，治療処置を補佐する事になれば，もちろん最終責任は彼（医師）が持つとして，自分の知識判断が常に試される事になるが，技術的な可能性は広がると言える。フランス語を話す患者の少ない地方で患者とかかわる時，媒介としての処置の多い少ないは，私には切実な問題で，日本では，患者に対する看護が技術処置だけに片寄る事は，看護の本質からそれるとして，厳に戒められているが，それは患者の訴えを日本語で聞く事ができる故に言える事で，フランス語，ましてアラビア語で折々に患者に精神的慰安を与えるなどという事は無理な事であり，片言のわけのわからない事を言われるより，１本の注射や処置を余り痛くなく安全にやってくれる外国人看護婦の方が，彼らには必要なのである。

技術は何と言っても目で見る事ができる。そういう事では内科系で働くよりも外科系で働く方が，一スタッフとして配属された場合，処置を通じて患者に接する頻度は高くなり，患者にとっても注意するところとなる。テュニジアでは歴代の看護婦隊員がほとんど外科，手術室，未熟児室，内科でもハートモニターで監視するＣＣＵ，心臓カテーテル検査室と処置の多い部門に配属されてきた事は幸運であったと言え，実際の技術を通じて日本人の看護婦を知ってもらう事ができた。

トズールでも同僚の仕事ぶりには無責任，粗雑，管理不足，浪費と，テュニスと変わらない面もあったが，人員が少なく，なけなしの設備や器材でやっている為に，どこか中央に対する腹立たしさと諦観じみた共感があって，

お互いに気を合わせて仕事をしてこれた。加えて外科病棟17床の小世帯であれば，把握も容易で，抜け落ちた仕事をある程度カバーしていく事も可能である。小世帯の良さであろう。エジプト人の外科医の前はベルギー人の外科医であったが，彼は胃切除や胆のう手術などの大きな手術などを行なっていたが，病床から言えば同規模のテュニスのPostに比べ，手術後感染の少なかった事を考えても，小世帯の把握管理の容易さをいくらか示すものと言えそうである。もちろん手術症例数に対する感染率を調べたわけではないから，あくまでも感覚的なものではあるが。

トズール病院には小児科病棟はあっても，内科系疾患の患児を収容しており，手術をしたり，交通事故などの患児は外科病棟へ収容する。それらの小児には大抵母親が付き添って入院してくる。小児科病棟でもそうだが，幼児だけを入院させるという事をせず，必ず付き添いをつける。一つには四六時中患児を看る事ができるほど人員がいない事と母親や家族が患児一人を病院に放って置けないという事でもある。それは，もし患者に家族があるとすれば，毎日毎日あふれるほどの面会人がある事でも知れる。この一族こぞってと言えるほど訪れる面会人が，いつも頭痛の種で，手術後安静にしていなければならない患者でも，この面会人の為に，とてもじっと寝ていられない。医師に頼んで面会謝絶にでもしようものなら，病棟の前に看護夫が頑張っていて，訪れる面会人に必死で説明しなければならない。

面会時間は一応決まっているのだが，病院職員などの伝手を通じて，結局，常時誰か面会人が病棟にいるという状態になる。何によらず伝手の力は素晴らしく効果があるらしい。処置の順番を無視して，我先にと言う職員の知人，家族にも，それは言える事で，何度，苦々しく思ったかしれない。看護婦や職員が彼らの家族や知り合いの為になかば当然のごとく，様々の薬品，物品，はては病院のシーツ類まで持ち出すのを見ても，一人を咎めれば全体を咎めなければならず，おかげで処置をする私が直接，消毒薬や包帯，ガーゼを請求する時に，もっと節約しろ，いや節約している，と毎回すったもんだする事になる。

手術用のゴム手袋がなくなり，尿カテーテルがなくなり，メスのかえ刃がなくなり，包帯，ガーゼがなくなり，薬品が底をつく事もあり，その都度，何故もう少し節約して使い，大事にとりあつかえないものかと思いながらも，それらが純然たる消耗品であるだけに，高価なハートモニターを壊しても次々と買いかえられるテュニスpostとの格差が思われてならなかった。

Ⅲ　ラマダン

テュニジアの歴史はざっと見わたしても非常に古く，ＢＣ９世紀のフェニキアまでもさかのぼる。国内各地にフェニキア，ローマ，アラブの遺跡が混在し，変形しつつもベルベル族の土俗的習慣も今日に伝えられていると言われているが，何といっても，今日のテュニジア人の精神を支え，生活を規定しているのはイスラムであり，ＢＣ２１８年からＢＣ２０１年，第2次ポエニ戦争，ザマの戦いの勝者ハンニバルを有しながらも，国家的にはともかく，一般的なテュニジア人にとって，フェニキア，ローマは観光財産にすぎないように見られる。イスラム教は国教でもあり，テレビでも番組終了時にコーランを流す。

ＢＣ９世紀	―	ＢＣ２世紀	カルタゴ
ＢＣ２世紀	―	ＡＤ５世紀	ローマ
４４０年	―	５３４年	バンダル（古代ゲルマン）
５３４年末	―	７世紀	ビザンチン（東ローマ帝国）
７世紀末	―	１６世紀	アラブ
１５３５年	―	１５７４年	スペイン
１５７４年	―	１８８１年	トルコ
１８８１年	―	１９５６年	フランス
１９５６年3月２０日独立			
１９５７年7月２５日共和国設立			

ひときわ高いモスクの塔から，朗々と誦されるコーランが流れ，椰子の葉をすり抜け，地平線をわたりゆく風に乗る時，一瞬天と地を融合させるような，一種，荘重な空気をつくる。イスラム教の教えには，信と行の2本の柱があり，信仰と同時に実践を伴ってこそ，真のイスラム教徒とされ，信は神，天使，経典（コーラン），予言者，来世，天命の6信から成り，行は信仰の告白，礼拝，断食，喜捨，巡礼の5行から成っている（蒲生礼一著『イスラーム』より）。

ラマダンはイスラム暦第9月の事で，陰暦のイスラム暦は太陽暦に比べ毎年１０日余り短くずれてゆくので，断食月が盛夏になる事も酷寒にあたる事もある。イスラム暦１３９９年の今年は，７月２５日から８月２４日までで，トズールでは気温５０度にも達する酷暑の最中にあたり，同僚達の疲労も濃く，中には低血糖症状で病院に運び込まれた者もいた。昨年は百聞は一見に如かずとばかり断食に挑戦したものの，今年はちょうど虫垂を手術する

というハプニングがあり，仕事中断食に付き合っただけで，ライード（大祭礼）を迎えた。この断食月明けの第10月1日の大祭礼は，第12月10日に行なわれる（今年は10月31日）ムトン祭（犠牲祭）と並んで，イスラム教の2大祭礼の一つで，この日の為に服を新調したり，家庭では祝用の菓子を作る。当日は早朝から，一日中コーランが町中に流れ，いつもと違った新しい服に身を包んだ子供達が，日本の夜店のように並んだ屋台をはしごしてゆく。また娘達や若者も着飾って知人の家を訪問したり，町を散歩し，祝いのあいさつを交してゆく。

信仰における苦行が意味するものは，仏教における苦行と同じように，より深い信仰という事ではあろうが，信仰それ自体が変化しつつある今日，イスラム教がまぎれもなく彼らの生活を規定し，文化を規定しているとはいえ，若い世代にとって断食は彼らの両親の世代ほどには説得力を持ち得ないようであるし，テュニスとトズールというように都市部と農村部では，実践する姿勢にも差がある。

病人や年少者が断食をする事は，もちろん求められておらず，また妊婦，兵士，旅行中の者も，他日に同じ日数だけ断食をすればよく，断食をせずに貧者に食物を施す事で償いをする事もできる。

ラマダン最中のある日，準看護婦のSabahがかくれるようにして水を飲んでいるので，今年は断食をしないのかと聞けば，一昨日より生理が始まったので，一時中止だという返事。Jamelは今年ラマダンになる1ケ月も前から，今日は断食だと言い，こうしてゆけばその日数分だけ酷暑の最中の断食を免がれると言っていた。逆にある老人患者は今は断食中だからと，頑として服薬を拒否したりした。

早朝，日の出直前の4時過ぎ，モスクの塔からコーランが流れ始め，この時からいっさいの飲食を断つ。物を入れない口の中や舌はねっとりとして，唇は乾燥して白くカサカサになってくる。こうして乾燥した唇をしていれば，断食をしている事がだいたいわかる。夏期の事でもあり，しばらくするうちに空腹感は峠を越えて，むしろ渇きが激しくなる。空腹感よりも口渇の方が辛いと言う。こうしてノロノロ過ぎる日没までの時間を，家中の窓を閉めきり，うす暗くした中で横になったり，女は夕食の用意や断食をしない子供達の為に食事を作ったりして過ごす。外に仕事を持つ者は，倦怠感を伴う身体でユラリユラリと仕事をする。驚いた事に，断食をしながらトズールの炎天下でも道路工事が行なわれる。イスラム教徒にとって，このラマダン期が最も

アッラーを身近に感じる時ではないだろうか。日没を知らせる夕刻のコーランが流れる頃ともなれば，店はしまい仕度を急ぎ，道ゆく人の歩調も気ぜわしくなる。自動車などはスピードをあげて家路を急ぐ。日没直後断食の修業が解け，人々が1日の空腹をいやす頃は，町中の喧噪はかき消え，人も車も全くなくなる。夕食後の礼拝はことのほか心をこめて捧げられる。食事も礼拝も終えた人々は涼を求めて街の角々で井戸端会議と相成る。中には店先にテレビとタビーを持ち出して大勢で見ていたりする。そして真夜中近くから2時頃までひと寝入りした後に，もう一度日の出前に腹もちのよい食事をすませ，翌日の断食となる。ラマダンの断食修業で睡眠不足，食欲不振でやせる者も多いが，中には，何故か，かえって太る者もいる。

Ⅳ 言　葉

ベルベルの民族衣装を着た母親に，持っている限りのアラビア語を吐き出して，患児に注意して欲しい事を伝えた後で，わかったかと聞けば，わからない，と答える。休日の一人勤務の悲しさ，こちらの指示がうまく伝わらない。とにかく誰か説明できる者をつかまえるまで待てと言うより他ない。数少ない単語を並べただけのアラビア語を度胸と厚顔で話し仕事をするようになったのは，フランス語のわかる患者が少ないという状況では当然のなりゆきで，アラビア語で言ってくる患者の訴えは職業上の経験から見当をつけ，私は指示する為の命令語ばかりを話す事になった。

全くの耳学問で文法も何もないアラビア語に比べれば，フランス語は日本でも研修を受け，テュニスでも学校へ通ったのであるから，少しはまともなものと思うのは私の錯覚で，久しぶりに会ったテュニス時代のフランス語の先生をひどく落胆させたり，他日は同僚の麻酔師から，またフランス語の文章の中にアラビア語を平気で入れると言って注意される有り様。トズールのような小さな町の，小さな病院の，小さな外科病棟という小集団，同種の仕事，生活状況も大して変わらない人間関係の中で仕事を続けてくると，相互理解を容易にする共有条件が，例え外国人でも，ある程度満たされる事になり，フランス語が完全な文章でなくても簡単な単語，時にはウンといった単音でも十分目的を達する事になる。

よく言われる事だが，単なる旅行者とは決定的に異なる生活状況の長期共有が，コミュニケーションにおける言葉の比重を軽くする。アラブ形式の家が外部に対して大きく開放される窓らしいものを持たず，通用口から中庭に

入り，その中庭に各室の入口や窓が開かれるという外部に対して閉鎖的形式であるにもかかわらず，「どうして日本人は心の戸びらを閉しておくのか，テュニジア人はまず心の戸びらを開けておく」とテュニスの知人が言ったように，トズールでも人々は極東から来た日本人の私に対して，余り違和感を抱くふうでもなく，柔軟に接してくる。そういう中では他人に対する誠実さも，その人の所属する文化によって規定され，同じ誠実でありながら，同質面もあれば，全くかけ離れている面もあると，あっさり認めてしまえば，いわゆるカルチャーショックも半分ほどは減る。

日本でもテュニジアでも，うわさ話は余り好ましく見られないものの，1年，2年と生活を共にしてくると，話題も身近な日常茶飯の事が多くなって，始終，何があったの，どうしたの，と聞く私の事を，ひどいヤジ馬だと言った同僚もいた。一人暮しをしていると，ほとんど仕事の時だけが話をする時間で，それも仕事が混んでくると「ア」とか「ウン」といった単音になり，話す，言葉を吐く，という事におっくうになる他方で，自由に自己表現できる言葉で話のやりとりをしたいという欲求が強くなり，その欲求不満の為か，知らず知らず日本語で独り言を言ったりしていた。

それでも，仕事以外の時間を一人気ままに過す楽しみは大きく，トズールで生活し始めた当初はともかく，街にも人にも生活にも慣れた後は，今晩夕食を食べにこないかと誘われても，3度に1度出かければよいほうになった。個人差はあるものの，一人のくつろぎに対する切実な欲求は日本人に普通に見られるものだが，例え気が合わなくても，一人でいるよりは複数でいる方がよいと言うテュニジアの友人達のように，いつも戸びらを開け放っておけるほど私達の文化としての個は余り強くなく，特に異なった文化的環境に対しては，時に自閉する事でかろうじて文化的な個を維持し得るのかも知れない。個に自信のない私達が，異文化を理解する時，じっくりと総合的な情報を集積するという持久力に欠ける傾向にあり，ついつい早急に結論を出したくなるが，たかだか2年や4年の限られた見聞で結論し得る事は数少ない。個の自信のなさが対象を過小評価したり，過大評価したりという事になりがちである。まして着任そうそうの任国に対する印象や，日本から知識として持って来た印象によって結論する事は，それ以後の新鮮な情報をみすみす捨てる事になりはしないか。やはり，未知に対してはあくまで謙虚でなければならないということは，文化や人間を理解する上でも言えるもののようである。

南北問題など様々の国際協力理念が掲げられる中で，協力活動は，あるいは思っても思っても相手にうまく伝わらない，切ない片思いのようでもある。誠意から始まった協力援助が相手をスポイルする事になり，または協力援助の名のもとに自分の価値観を押しつける事になったりする。水が高い方から低い方へ流れるように，発展途上国は先進国に対して，文化的にも，政治的にも，経済的にも，受け身にならざるを得ない。流れ下る水の水質，水量によっては思わぬ結果を生じる。だが，地球，人類，２１世紀という視点に立てば，国際協力は不可避の課題と言える。

私達が途上国の人々，あるいは地方，あるいは農村部の人々など，文化的後進地の人々に対して抱く印象には，素朴，親切といったものの割合が非常に大きい。反転すれば，私達自身がそれを求めているのでもあるのだが，それが一方的な印象である事に気付く事は少ない。それが証拠には素朴で親切でない，むしろ狡猾とも言える後進地の人々に出会った時の私達の落胆を，何と説明できるだろう。

しかし，そこでは親切は親切として，狡猾さは狡猾さとして，いわゆる文化的生活の中で変に矯正されていない人間の「地」として，より表出されるものではないだろうか。そういう場での人間関係は，人間と人間がニアミスをするのではなく，ダイナミックに真正面からぶつかり，生の情緒が交差する。私達がその場に入ると，よほど自分自身を把握できる人間でも，ある種のたが，かせといったものがはずれてくるようで，日本にいては思いもよらない行動や思考が生じる。それは時には気持のよい覇気ともなれば，時には子供じみた独り善がりの甘えともなる。豊かさの質が貧しさの質で問い質されるように，異なった文化的，人種的環境というものは，そこに入る人間の文化的，人種的，性格的アイデンティティを明確にする機会を与えるもののように思う。

今，テュニジアについて語ろうとする時，そしてテュニスという都市に暮し，トズールというォアシスの町に暮した４年を語ろうとする時，自分の言葉のどれもが適切でない事に，私はもどかしくなる。

その私に技術協力としての４年間を決算する事は容易ではなく，ただ，極く普通に，よりよく生きる，という事を誰にとっても可能にするという事が，最も未来的な事ではないかと思われる。

日本に帰って考えること

飯　野　美恵子

テュニジアでの任期を終え，帰国して3ヶ月余りが過ぎようとしている。曇天の成田空港へ降り立ち，その閑散とした港内に驚き，また港外のバリケードに驚き，都心へ向う電車に疲れ，自動車やテレビの雑音，人混みと頭の中心を圧控機でしめられるような感覚もしだいに遠のいてみると，さて私は何の為4年余り前羽田空港を飛び立ったのであろうかと思う。

かの地の生活が，そしてそれをとりまく自然環境や人々が新鮮で刺激的であった事は否定し得ない。自分が持っているひとつの言葉，ひとつの行動，ひとつの生活姿勢が，それは一体何かと問い質される。異文化の中で照合されたものが，否応なく私自身が無意識に血とし肉としてきた日本的なものであった事を認める。そういう意味では私の中の日本を確認する為に私は羽田を飛び立ったのかもしれない。4年余り前にも，そのような事を実際に話した事があるように思う。

「祖国」という言葉がある。この言葉には国際協力と同じように今もって片想いのような感覚がつきまとう。昨年のソ連のアフガニスタン侵攻から大きく揺れているオリンピックの，あの表彰台に見られる日の丸に象徴される"祖国"とは無縁の，まして侵略戦争のために叫ばれた"祖国"などではない民族のふるさととして祖国を認識する事ができない私は日本人である事に自信が持てなかった。自我を確立する時期に自分自身を見出せない青少年が心を病んでいくように，現在の日本人には日本人自身が認識されていないように思われる。

帰国して思った事，日本はどこへ向って進もうとしているのだろうか。テュニジアのヌイラ首相は早くも地中海の汚染を指摘していた。テュニジアは少くともイスラム世界を通じて彼自身を未来に実現しようとしている。彼らには強烈な自己がある。エジプトの故ナセル大統領の言葉に「アラブの砂は強く握りしめていないと指の間からこぼれてゆく」とある。それ程の個性がうらやましくもある。

日本人の持っている可能性が最も21世紀的であると私は信じているが，冷

暖房のきいた部屋，美味しい食事，過剰サービス，過剰包装を当り前として疑わない感覚がある限り，私達は世界の中で進む方向すら見出せないのではないかと思う。メッキした金塊をただおスミつきというだけで漁って買い，炊飯器がなければ米が炊けないという狭い思考や，個性的という流行の没個性に気付かない限り，私達は独自性をはぐくむ事は不可能ではないか。

両手を広げてじっと見ているとつくづく黄色いと思う。白色でも黒色でもなく，この独得の黄色，これが世界４０余億の３分の２を占める人間の色である。日本はその中で最先進国である。それ故にこそ私達は経済的に自立すると同時に民族的にも哲学を持ち自立しなければならないのではないかと思う。

その上で，私達日本人が潜在的に持っている２１世紀での可能性を実際に発揮できるような気がする。生存するもののうちで，永久と言えるものは何ひとつなく，いつか人間も滅びてゆくのであろうが，戦争や自然を破壊する事で自滅していく程無能な事はない。

飯野隊員の報告書を読んで

森　　まさ子

テュニジアでの4年間の協力活動を無事終了してまとめられた重厚な報告書を読み，テュニスとトズールのそれぞれ2ヶ年間の生活や活動を通して体験された内容から語られる問いかけにふれ，何度も考えさせられていました。テュニスの国立病院での心臓外科の手術後病棟，飯野隊員にとってはこれまで未経験の分野を託され，フランス語の医学用語を覚えることから始まり，適応する迄の戸惑いと努力は並大低でない事が伺われます。

あせらずに着実に日本の看護婦資格の信頼に応えるべく正確に誠意ある態度で責任を果そうとされた緊張感が伝わってきました。

日本でCCU，ICUの経験を持っていれば，言葉のハンディキャップだけで対処出来たと思い，選考の責任を痛感しています。

CCUに対処する高度な判断力を持っているテュニジアの看護夫（時には国際免許を持つ者もいる程の看護夫なのに）が，報告されたような場面を提示する行動になれるのかと不思議でなりません。測定の値や，状況の意味を把握しているならば，そして生命の大切さを自覚しているならば，看護者の使命（責任）は明瞭に示される筈なのです。ましてや人員不足で緊急という事態が予測される手術後の管理に於て注意をおこたる等，たった一人であればそれだけの責任ある行動を取るべきところ……その責任を問われる事も無かったという点については，解釈に悩みます。

まして一度ならず二度までも……その事故対策の話し合いも持たれた事を聞かないなど……責任のなさ，この事実をICN（国際看護協会）等で報告したら，どの様に判断するかは考えるまでもなく明瞭な答があります。見逃されるべき性質の事ではありません。

飯野隊員の言葉通り不自由な外国語，未経験な分野，信頼出来ない同僚の仕事，熱意のない，ずさんな管理のもとで，高度な器械を使用する心臓外科，二次感染によって術後の死亡例が後を絶たない状況に於て，自分ではどうしようもない危機に直面して緊張の毎日を過された事でしょう。せめて新しい技術面

での貢献ができなくとも，医療人として，責任を果す基本的態度を自ら実践された，その飯野隊員の取り組みを同僚の立場で実感したことと思います。せめて医療過誤の件に於てはどう対処すべきか，また今後の予防策として看護管理のあり方を問いつつ話し合いによってよりよい看護を患者中心に向ける努力をしていただきたいと思います。どの様に高度な器械を使用しても，それを操作する人間の心が無ければ大変な事になります。患者の健康の増進と疾病の予防と健康回復を目ざして，かけがえのない生命を守る使命は各国共通の規律であり，最優先されるよう頑張りましょう。看護の立場で技術協力をすすめる場合，高度に発展している医療の場に於ては，殆ど日本と変らない迄に発達している国もあるのですが，多くの場合，それもその国全体の水準ではなく最高水準に於ていえるのです。手術後の無菌的操作にしても徹底した技術管理がおこなわれていれば，前述の様な事態はおこらない筈です。御指摘の様な側面が改善されるところに看護婦隊員の協力の意義は大きいと思います。

トメール病院での事情は，比較的詳しく説明があり，どの様な業務に取り組まれたかが想像できます。治療的処置が比較的多い様ですが，医療人の構成員や分担により何を優先しなければならないかが決まる訳ですから"鉗子だこ"が出来る程だと伺ってびっくりしています。然し傷の処置等を通して治癒過程を観察し注意深く交換することも大切な外科患者さんへの処置ですし，二次感染が少かった（テュニスに比べて）という結果は，人数が少なかっただけでなく飯野隊員の処置が徹底していたためではないかと考えます。

トメールの病院でも目にあまる管理の不備や，資材の浪費（不足にもかかわらず），同僚の無責任など改善したい事が山積しているようです。

小児の病棟で母親が付添うのは，子供の精神的安定のためにも，母親にとっても良い面と見ることが出来ます。然し病気の回復に貢献出来る，かかわりのために必要な指導を看護婦は入院の機会に母親に対して出来るよう計画出来ればよいのですが，実際は如何ですか。医療消耗品が無くなる事も困った事です。鍵をかけて責任者が保管する方法は無理でしょうか。

その他テュニジアの風景，文化，産業，民族性などについて興味深く拝見しました。また未知に対してはあくまでも謙虚でなければならないと言う言葉が強くひびきます。民族の交流においても，人間理解に於ても国際協力の理念と受けとめたいと思います。特に看護活動においては，その人の宗教や価値観，習慣等を重んじつつ柔軟な対処で自己の成長に役立てられたら幸甚らしいと思います。（青年海外協力隊技術専門委員＝看護婦）

職業訓練所における業務と諸問題

総合報告書

53年10月記

派遣国　テュニジア　51年1次後期組
職　種　電気機器
氏　名　多田　潔
配属先　Centre d'Instruction et de Perfectionnment d'Electro-technique, Tunis

多田隊員の略歴

氏　名：多田　潔
生年月日：昭和22年7月19日
出身県：東京都
職　種：電気機器
派遣期間：51年10月～53年9月

１９７８年9月１５日をもって２年間の任期を無事終了した。これから総合報告をする前に，この間体調も良く，実に楽しく青春の２年間を送る事が出来た事を，協力隊の関係者に心から感謝の言葉を送りたいと思う。ありがとうございました。

この総合報告書は，仕事の内容についての事はすでに定期報告書及び機材理由書等に細く記した為，省略し，主に隊員ハンドブックのカード化項目に従って記したいと思う。

Ⅰ　受入れ体制

1. 現地調査

この項目については私個人よりも，むしろ協力隊事務局側から見た場合と思われるが，一応私として感じた事を記したいと思う。私が現地に行く前，それは受験段階から，訓練中の４ケ月間においてもテュニジアという国についてはほとんど知る事が出来ず，自分で調査したものの当時テュニジアの在日大使館もなく，資料もアフリカとアラブの一般的なものであり，また，それらの資料も古い物が多く，結果的にはあまり役には立たなかった。帰国隊員も当時はいず，レポートも少なく，非常に少ない資料であった。もっとも現在では，それらの多くは解決していると思う。ただ残念なのは，総合的に現地を知らせる資料が無いという点で，出来れば今ある協力隊の全ての資料をまとめて1冊のハンドブックにすればよいと思う。

私も現地でそれを始めたのだが，時間が無く，一部を現地事務所に提出する事で終わってしまい，残念に思っている。もしチャンスがあれば，それを作りたいと考えているが……。しかし現地の具体的な数字を入れた資料は今後とも必要と思われる。

2. 現地訓練

私の場合，全く現地訓練というものはなく，即現場という感であり，言葉の点も語学学校（夜間）の授業料を１年分のみ事務局側が持つというだけのものであった。しかし現場が現地語を使って教えるという仕事であったので，現地での語学訓練は非常に重要で絶対に必要だと痛感した。

特に４ケ月間の派遣前訓練のうち前半の２ケ月の日本での言葉についての，つまり語学訓練は少し足りないと思う。確かに任国事情等も必要かも知れないが，私の場合，教授された内容は中近東全般のイメージ，つまり"ハダシ"の感があり，テュニジアのように，一部では日本以上に近代的

なシステムを持っている国では，かなりのギャップを感じた。また午後の授業は，朝が早い為，あまり能率が上がらず眠かったという思い出が多い。それよりもっと自習時間を増やし，自分自身でやらせる時間を作った方が能率的と思う。要は語学が非常に重要だという事で，むしろ語学で４ケ月を終わってもよいくらいだと思う。これは別項で再び記したい。

3. 配　　属

配属については現地に到着してもまだ未定という事で，アチコチ回ったり，なかなか落ち着かず，数週間が過ぎた。もちろん日本にいる時は全くわからず，何を準備してよいやら少々困惑した。この辺，もう少し現地の担当省の上部と強い個人的なコンタクトを持っていたならば，事前に仕事の内容も掌握出来，相手側も本人に合わせた配属が出来ると思う。

4. 相手側の協力認識

私の場合，それは非常にあり，仕事上，実にスムースであった。もっとも，これは当初，つまり着任時から約半年間，現地人になじむ事を第一に考え，彼らと友人になる事に努力し，それらがうまくゆき，協力という認識が生まれたのだと思う。

それは日本でも言える事であるが，突然外国人がやって来て，あなたの仕事は間違っていると言い，その上協力して下さいと言っても，無理である。私の場合，最初の半年間は何も出来なかったが，その間に得た友人（多くは同僚，校長等）の協力で，残りの１年半，自分の思うとおり仕事が出来，自己満足している。

Ⅱ　職場事情

1. 職場の組織

職場についての具体的なものは，すでに細かく機材要請書に書いたので，また仏文の職場案内書もすでに提出ずみなので簡単に記す。

私の勤めたＣ．Ｉ．Ｐ．Ｅ.は日本で言う職業訓練所にあたり，日本の労働省，現地では社会省と呼ばれ，内容，目的もほぼ日本のそれにあたる。であるから校長をはじめ全ての職員は公務員で，約１０名の事務，雑用を含め総員約３５名ほどである。

１７歳～２２歳程度の学生に，電気，電子，機械の基礎を教え，ラジオ，テレビを含む家電の修理が出来る者を養成するのが目的である。

2. 職場事情

職場の一般的な雰囲気は，ヨーロッパ全般に言われる個人主義的な感が強く，そのため各先生，校長等，非常にプライドが高く，自分の守るべき職場を決めて行なっている。これは他国でも一般的だと思われる。したがって，一歩学校から出てしまえば，彼らの連帯感は薄い。

3. カウンターパート

この点は，意味が（協力隊側の）はっきりとつかめないので，正確には当たらないが，同僚という意味を含めれば，仕事上，どうしても12〜15人の生徒を教えるため，2名の教師が必要で，その意味ではカウンターパートは出来た。もっとも最初から彼がおり，そこに私が入ったような感じである。ただ私の場合，私とほぼ同年代で，考え方もしっかりしている同僚がおり，2年間，仕事以外でもいろいろと教えてもらった。その友人のおかげで，この2年間が実に有効，有意義に使われ，仕事上の問題点も，彼によってずいぶん解決する事が出来た。彼をカウンターパートと呼べるかも知れない。前記したように当初の半年間を主に，友人づくりという方向に決めたため，それは一人ではなく複数であったと言えるかも知れない。

▌業　務

1. 技　術

技術上の問題は私の場合全くなく，それらは一度以上，自分の手で実際に行なったことのあるものがほとんどあり，それ以外でも基礎的なものは今までの経験から十分にこなせたため非常に楽であった。特に私の場合，海外において，以前，仕事上同様な立場，つまり現地人に物事を教えるという事を経験ずみで，またヨーロッパにおいても仕事柄，工場等をすでに見ていたため，技術上の問題は無かった。

2. 機　材

機材においては，出発まで何一つ買えず，そのため最低必要な物は自費で購入せざるを得なかった。これは事務局側の説明が，現地に到着したい請求せよ，との説明であったので。

任期の2年間では，現場のレベルアップのため機材が必要でも，任国の予算が少なく（特に電気関係は非常に高価な機材が多く，どうしても，百万単位になりやすい），それらの機材を事務局を通すと，予算があっても到着するのが任期終了直前となり，それを利用出来ずに終わってしまうとい

うのが現状である。

特に私の場合，前任者が当学校における初めての受け入れ隊員であり，彼が最初に超高額の機材導入という前例を作ってしまい，後任の私に多大な影響をもたらした。事務局の意図している事が物品援助ではなく，人間の技術援助だという事を説明しても，前任者の例があるため，なかなか理解されず，この問題は時間をかけて，少しずつ解決しなければならないと思う。私の場合も現地職場の上司の意向もあり，やむなく高額の機材を導入する事になり，後任の隊員にゲタをあずける形となった。

私の具体的な機材については，その理由書に記しておいたが，その到着は帰国直前のバカンス前であったため，約半分の機材についての使用，及び効果が記せないのは残念である。取り扱いについては，仏語に訳し，使用方法も同僚に説明しておいたため，後日，その効果についてレポートがあると思う。機材については，やはり任期との関連が問題で，任期の項で記すつもりである。また機材の扱い方も含めて，ある程度の基準を作り，事務的かもしれないが，それに基づいて扱う方法が，いろいろな不満を抑えるためにも，有効ではないかと思う。

3. 支援経費

これも機材と同様，ある程度基準を作り，その枠内で事務的に処理すべきだと考える。私の場合，これは機材に入るかもしれないが，オートバイ（単車）について，それを申請する時期によって，また現地職員によって，その取り扱い方が異なるというのは，よくないと思う。任国によって事情が違うので，各任国ごとに実情に合ったルールなり基準なりを設けるべきだと思う。それがあれば，余計な神経をつかわず，仕事もスムースにいくのではないだろうか。他に支援経費の仮払い方法も，あまり金銭的にゆとりの無い我々隊員には便利だと思われる。

Ⅳ　人間関係

1. 現地人

これも前記したように，私の場合，以前勤めていた会社で，外国人一般に接するチャンスが多かったため，現地人の間に入りやすかった。また住んでいた場所も，日本人が住んでいた所から少し離れ，現地人ばかりの住宅地であった事，良き友人に恵まれた事などで，現地人とのトラブルもなく，楽に生活に慣れた。と同時に2年間の任期中，テュニジアにいる外国人に

も積極的に接し，特に現地がイタリアに近いため，イタリア人と多く接し，さらに余暇を利用してイタリア語を1年間学んだため，多くの現地イタリア人を含む外国人と友人になり，実に楽しい2年間を過ごせた。

2. 隊員間関係

ある程度，外国における日本人社会の狭さは知っていたので，なるべく隊員同士もドライに付き合うよう考え，それを実行した。そのため問題は少なかったが，私の考え方として，隊員は先輩後輩という関係ではなく，全て同じ資格であるという事を常に頭において接したが，それでも個人差により，私とはどうしても考え方を異にする隊員も少数ではあったがいた。基本的に理解できなかった考え方としては，現地人を見下した見方をするという事である。それは個人主義の世界であるから，別に生活行動には全く問題にはならなかったが，残念な事である。せっかくの2年間，やはり現地人第一に考えたいと思い，また実行してきたつもりである。隊員間の付き合いではスポーツ，特にテニスを通じ，ドライに割り切り，2年間を楽しんだ。

3. 駐在員，調整員

駐在員は私の帰国前約3ヶ月に着任したため，少ない接触であった。やはりもう少し早い時期に駐在員を必要としていた。

調整員については，任国が新しく，隊員の活動が始まったばかりで，いろいろと知らない事が多いと思われ，大変苦労したと思われる。ことに隊員の人数が急に増え，その上，新調整員が来て大変多忙になったと思われる。特に事務局側で新たに調整員を派遣する際には，言葉は隊員以上に必要と思われるので，さらに人材についても隊員とは違った要素が要求されるので，慎重に対処していただきたいと思う。

4. J O C V 本部

私の場合，直接タッチしなかったため，はっきりとはわからないが，一般的にスピードが無いように思われる。隊員からの意向が反映されるまでの時間が，一般の民間会社に比べ遅いような気がする。さらに報告書に記した問題点の反響や，どうしても直接的に書きずらい点を日本的な言い回しをする場合があるが，それを読み取ってもらえない等，若干歯痒い感があった。本部は非常に多忙との事。この辺，かなり時間や人間的，予算的な事情もあり，大変だと思う。

5. 専門家

当任国の場合，機材，その他業務内容についてもかなり進んでおり，場合によっては日本以上に技術が要求されるので，ボランティア的な事よりも，むしろ専門家的な要求が強いと思われる。また任国での生活も，俗に言う裸足のイメージではなく，都市においては日本との差がほとんど無く，機材の項で記したように，任期が2年で，単身赴任が原則である今の隊員の契約では，任期延長はむずかしいと思われる。せっかく言葉にも慣れた頃には帰国というのが現状で，隊員OBから専門家への道づけが非常に有効と思われる。

さらに当国が要求しているのは，例えば私の勤め先でも，実践で使える学生を育てるという事なので，今の現代社会に合わせた，単なる人間の感情以上に一つのプロジェクトとして，その国の国家建設の基礎づくりに役立つ人間を養成するような技術援助が必要と思われる。

6. 他の技術協力関係者

任国にはヨーロッパ，特にフランスをはじめ，多くの国から民間，政府を問わず，多くの技術協力関係者が入っている。政府の場合，一つはフランスから送られてくる大量のコオペランと呼ばれる若い人達がいる。彼らの多くは徴兵逃れの目的と，金儲けの目的が含まれているので，現地人からの受けが非常に悪く，また現地人の間では技術援助イコール，コオペランというイメージが強く，我々隊員も一般に同様であると思われてしまう。当地ではボランティアという認識が無いため，技術のある人間イコール，金のある人間となっているので，その中では意義があるかもしれないが苦労も多い。

さてもう一つの技術援助であるが，ベルギー政府の総合的なもので，当地のレベルアップには非常に有効と思われる。それは建物の設計から入り，１０年以上も先を見て行なうもので，教師達も初年度は１００％ベルギー人，それを次年度はチュニジア人にも少しずつ引き継ぎ，６～７年でほぼ完全に引き継ぐもので，学生達も卒業後，政府によって，さらにレベルアップ出来る可能性を持っている。これらの効果は絶大で，日本の人材的な技術援助の手本と思われる。

7. 旧宗主国

当国の場合はフランスであり，２３年前に独立したばかりのため，やはりフランスの影響はあまりにも大きい。生活全てが大きく影響を受けてい

るが，任国政府としてはそれを少しでも減らそうと考えている。しかし，１００年もの間の植民地であり，外貨を得るのが観光であり，他に資源も少ないうえ，アルジェリアとリビアという石油大国にはさまれた地理的な事情から，フランスは今以上に当国に影響を与え続けると思われる。政府も，外見的には，独立と言っても，内面ではそれが出来ないようである。

8. 大使館

日本人が少ないため，映画会をはじめ多くの夕食会に招待していただき，日本食を御馳走になったが，公邸が不便な所にあり，帰りの交通機関が全く無いので，少々行きずらい感があった。大使館とは仕事上は直接関係が無かったので，何とも言えないが，個人的には大使をはじめ大使館関係の方々にお世話になった

9. 在留邦人

前記の隊員間関係でも記したが，日本人社会は非常に狭いので，主にスポーツによる付き合い程度で気が楽であった。やはりスポーツをしながらドライに付き合う方法がベストだと思う。ただ，あまり聞きたくない話が耳に入るのが残念ではあったが。また困った時の助け合いもあり，気持ちの良い付き合いであった。

V　生活環境

1. 衣

衣類は質の割に非常に高いので，日本から持参した物で2年間過ごしたが，金があれば全くその必要はないと思う。都市では日本と全くかわらない衣類である。

2. 食

食事の方は日本食はまず入手出来ない。一般にアラビア料理で，主食はパン。　かなりイタリア，フランスの影響を受けてはいるが，一つの器で家中の者が食べる方法である。食で一番困ったのは，私の場合，語学学習のため毎晩夜学に通ったので，食事をする時間があまりにも少なかったという事。他は買物も楽しく，料理も日本風テュニジア料理で自炊した。材料費は日本の$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{5}$であり，安くておいしい。特に主食のパンは日本に比べて格段のうまさである。ただ水は悪く，生野菜のサラダ等も悪いので，下痢は実に多くした。

協力隊の医療関係のお知らせを読むと，絶対になま水を飲むなとの由。

しかし現地人に溶け込むためには，それは反対である。つまり，なま水を飲まなければ，現地人に溶け込めない。

3. 住

住宅はどうしても家具付きを必要とするため，家賃は実に高いが，当地では現在の住宅手当であれば（もちろん物価にスライドしてゆけば）一応一人で生活するのには問題はない。一般のチュニジア人は一人で住む習慣が無いので，また外国人として間借りしていてチュニジア人を泊まらせると，まず１００％大家から締め出される。つまり，外国人との同居の習慣が全く無いという事で，これは住まいを見つける上で困難な問題であった。

4. 交通手段

私のいた都市には都市交通が一応あるが，タクシーは絶対数が不足で，つかまえる事が難かしく，バスなども不足している。そのため一番早く確実に行くには，自分の足が一番である。私の場合，自転車があったので，町中は十分であったし，健康的であったが，やはり遠出や大量の買物の時など，また機器類を移動する時は車が必要。私の場合，３名で共同車を購入し，使用した。タクシー以外は運賃は安く，時間さえあれば，バスその他を使って国中へ行ける。

5. 情報交換

なんといっても現地人同士はロコミである。電話代が高いのと，公衆電話が非常に少ない。私の場合も電話が無かったが，とても不便で，隊員が一人で住んでいる場合は非常用として電話は必要である。ラジオはアラビア語とフランス語の２局があり，１日各２０時間放送している。またテレビはチュニジア局，イタリア局があり，カラーも含めて１日各６～１０時間放映している。他にヨーロッパからの放送の受信が可能である。

6. 現地事情

アラブの一部というより，南ヨーロッパの一部といえるほど都市は進んでいる。日本に対する一般的な認識は，遠い国，そして中国，というイメージがどうしても入る。しかし，日本の技術力の高さは，国中に浸透しており，日本人に対しては全般的に良い感情を持っていると思う。

7. 余　暇

私の場合，勤務は月曜日から金曜日までで，土，日は休日となっていたため，その休日をスポーツに積極的に使った。スポーツ施設は安く，気軽に利用出来るため，私の好きなスポーツのうちテニスを週１～２回，２～

4時間行なった。これは夏の3ケ月を除くオールシーズン出来，健康を保つのに非常に役立った。さらに通勤にはスポーツ自転車を使い，1日平均約15kmは走り，脚力をつける上で役立った。夏の約5ケ月間は出来るだけ水泳に当て，1977年の夏は隊員10名でそれぞれ月に約5,000円ほど出し合い，海岸に海の家を3ケ月借り，美しい地中海の海水浴を楽しむ事が出来た。この方法は大変経済的である。そして今年の夏，つまり1978年の正月から余暇の利用として自作の2艘目のヨット作りに取りかかった。毎週末，テュニジア人の仲間と，テュニスから約70km南の海岸にあるテュニジア人の友人宅に行き，作り始めてから約8ケ月で完成。日本人は私一人，他はテュニジア人の友人達であった。

水線長4m，マストの高さ6mの完全自作のスパロー級を作り上げた。部品材料も少なく，さらに交通や費用なども大幅に制限され，苦しかった8ケ月間であったが，テュニジア人の友人の積極的な協力を得て8月1日に進水式を迎える事が出来た。このヨット作りは，私にとってあまりにも得る事が多く，さらに一つの物を彼らと作り上げた結果，そこには限りなく強い絆で結ばれた現地人との友情があった。帰国後も多くの便りを彼らから受けている。

他にテニスの方面でも積極的に日本人以外と付き合った結果，ヨーロッパ全てを含む，多くの国籍の人々と知り合い，現在でも多くの人々と接触している。やはりスポーツは最高である。

Ⅵ 言　語

1. 言 語

私の場合，主に電気関係の言葉が仕事で必要であったが，これらの言葉は，一般に国際語と呼ばれるものが多く，また図面その他は万国共通であり，さらに英語において，すでに教えることは経験ずみだったので，専門語についてはそれほど問題はなかった。しかし，それ以外で使う言葉については，かなり苦労した。特にフランス語は書き言葉であり，話し言葉は，フランス語とアラビア語とテュニジア語がゴチャゴチャに使われ，帰国するまでそれはすっきり出来なかった。

言葉に関して私の考え方は，まず現地人に使われている言葉を覚える事から出発した。そのため時間があれば出来る限り多くの人々と行動を共にし，職業，地位の異なる全ての現地人の中に入っていき，耳から直接学ぶ

事に努力した。そのせいか，変なフランス語とアラビア語が一緒になったテュニジア語を話すようになった。おかげで彼らと何らこだわりなく意志が通じる事が出来るようになり，大成功であった。もちろん2年間，週2回，夜学に通い，フランス語を学んだが，そちらの方はあまり成果が無かった。家で辞書を調べるより，現地人と話すのが私の生き方であったからかも知れない。

さらに後半1年間，週3回，イタリア語の夜学に通い，イタリア人の多くの友人達と意志を通わせる事が出来たのも，成果の一つであったと思う。英，仏，伊語は帰国した現在も少しずつであるが勉強し続けている。以上のようにヨット，テニス，イタリア語，フランス語と，午後6時15分までの仕事を考えると，あまりにも忙しい2年間であった。ただ残念なのは着任直後の語学訓練が無く，当時多くのテュニジア人に不信感を持たれた事であった。

Ⅶ 疾病，災害，非常事態

1. 健康管理

特に食事には気を配り，多少金はかかっても栄養をつける事に努力した。幸い，テュニスの場合，日本とほぼ同じくらい肉，野菜，果物が入手出来たので，それを実行出来た。さらに3食規則正しい時間の食事と，スポーツ，十分な睡眠を心がけ，生活の基本とした。特になまものは出来るだけ避けたが，現地人に溶け込むほど，なま水，なまもの（サラダ類）は取らざるを得ず，ＪＯＣＶのなま水を飲むな，といったような非現実的な事は，現地人と接触するためには不可である。

2. 疾　病

大きな病気もせず，風邪で仕事を休んだのが二日あるだけであった。しかし，なま水その他で現地人の持っている寄生虫をおみやげにもらってしまった。これは現地人に溶け込む以上，絶対に避ける事は出来ないと思う。

3. 精神衛生

自己の不満を発散する事が出来るよう，スポーツを大いにやった他，現地人となるべく付き合った。それは狭い日本人社会からくる非衛生な部分から身を避けるためであったが，そのため2年間実に壮快であった。

4. 事　故

着任後1年目で，自転車通勤途中，トラックと衝突，頭部に5針のキズ

を負った。この事故で特にテュニスでは救急医療システムが遅れているのを，身をもって実感した。一歩遅れれば命取りである。さらに残念な事には，現地事務所員も救急医療対策をまだ立てていない事であった。特にケガをした後，移動するにしても，タクシーもこない不便な所に住んだ私には病院へ行くのもつらかった。これからも交通事故は当然多く発生する環境にあり，早く対策を立ててはしいと熱望するしだいである。

5. 災　害

私の住んでいた所では，これと言うほどの事も無かったが，テュニス郊外でダイナマイト工場が爆発し，大きな犠牲者を出す事になってしまった。これも一つの災害かも知れない。ともかく住む場所は，少々家賃が高くても，安全な所を選ぶべきである。

6. 盗　難

私の場合，任期中，列車の中とバスの中で財布をスリ取られてしまったが，一般的には多くの隊員が自転車を盗まれているのを見ると，幸運であったと言えるかもしれない。また住宅も2階にテュニジア人の大家一家が住んでいたためか，盗難が少なかったと思われる。

7. 非常事態

任期2年目に入った時，テュニジア全体のゼネラルストライキがあり，その時，権力側からのかなりの圧力で混乱が発生し，約1ケ月間にわたり夜間外出禁止令が出され，同時に数百人の人々が殺された。これに関しての詳しいレポートはすでに報告済みであるので省略するが，権力の恐ろしさを身をもって感じた。特に当初の時に約８００㎞も外出禁止令中移動し，多くのきつい場面にもあった。

Ⅶ 手　当

1. 海外手当

海外手当の額であるが，本質的なボランティアという点に立って見れば，無くするべきだと考えるが，その辺は今まで多くの人達が発言しているので，今回は現実的な点について記す。私の場合，現地政府から約2万円の住宅手当と，ＪＯＣＶより同額，つまり住宅用として計約４万が他の手当として支給されていたが，住宅の場合，考え方の一つかもしれないが，着任してすぐ言葉もよくわからないのに，自分で探すのは，この額ではかなり難しい。もちろん1年以上たてば，ある程度見つけるのはやさしいが。

そして，例え探し出しても，そのアパート等には，日本と同様，入居時に一時金１ケ月分～３ケ月分を支払う必要があるから，８～２４万円の金が必要となり，さらにその月の分の家賃を支払わなければならない。という事は現実的に苦しく，自前か，他の隊員から借金をして，やっと支払っている状態で，私も同様であった。この分をなんとかＪＯＣＶで負担してもらえないかと思う。

私の場合，一時金は２年後，アパートから出る時返却してもらえず，結局，自分持ちとなってしまった。この件については，もちろん法に照らせば明らかに不正なのであるが，これを取り返すにはかなりの時間が必要になり，現実には任期を延長しない限り不可能と思われる。であるから，この一時金をＪＯＣＶなり現地政府なりが負担するのは当然だと思う。月々の家賃は，客観的に見て，まあまあの線と思われる。もっとも物価も上がり，家賃も当然上がるので，それに見合った値上げは必要だと思う。

さて他の手当約４万円は，私の場合，せっかくの機会を生かして，多く任国外旅行に出かけたので少なかったが，この額でも全く任国外に行かなければ，なんとかやってゆけると思う。やはり６万円程度が妥当だと思う。これは現地人の同僚の給与と比べても決して高くはなく，特に現地人と同居する習慣が無いため，場合によっては同僚よりも少ないぐらいと思われる。この同僚の給与生活水準についてもすでにレポートで提出しているので省略するが私の学校の場合生徒すら車で通学している。

2. 国内積立金

国内積立金については，休職の場合と退職の場合との差があまりにも大きい点を解決しない限り，いちがいには言えないと思う。つまり国内でかなり高額な給与を取っていた国家公務員ほか、１００％の民間会社の休職が出来た人と，０％の人の休職，及び退職して国内積立金を受ける人との差があまりにも大きい点である。やはり休職処置をもっと推し進めつつ，休職の場合も退職の場合も，それほど差が無いよう国内積立金を上げられないだろうか。つまり，休職の場合で，国内積立金よりも少ない場合は補充する方法を取るというような事で……。また退職の場合，帰国後，職が決まるまでに時間を必要とするので，一般の公務員程度にすべきだと思う。さらに失業保険，年金も強制的に加入すべきだと強く思う次第である。

3. 家族問題

私の場合，大学卒業後勤めていた会社が事実上無くなってしまい，ちょ

うどブラブラしていた時期に協力隊を知り，全く家族的な問題は無かった。さらに両親ともに元気であったうえ，親が外国好きで，私よりもむしろ積極的に参加する事を勧めた。また私の勤め先も外資系の会社であったため，外国に対する違和感がなく，そのうえ私自身，何回となく，仕事上でも，個人的な一人旅としても，外国を歩いており，外国人の友人も多く，そういう意味では全く支障は無かった。

母は，私の任期中，一度，友人とともにヨーロッパ，テュニジアに遊びに来て，とても楽しかったとの感想であり，全くホームシックの問題は発生せず，むしろ一つの話題となったくらいである。

Ⅸ 任　期

1. 任期「2年」について

任期については，2年という期間は，私にとって仕事をスムースに行なうためには少し短かったような気がするが，年齢的なものや，結婚という時期的な問題点があったため，やむをえず2年間で終えた。しかし，この隊員の結婚という問題は，以前から話題になっているが，「単身赴任」という事は全く理解出来ない。これは世界中，少なくともテュニジアを含め民主国家の行なうべき方向ではないと思う。結婚とか愛とかという問題は，本来，人間としての問題であり，それを他人や権力がとやかく言うべき筋合いではないと思う。過去の暗いイメージが，この単身赴任という一言で表現されているように思う。

この考え方はテュニジアでの2年間に話した多くの現地人や外国人の話から決定的なものになった。話を元に戻すと，任期についての私の提案だが，着任後1～2年経過した後に男女の生活は隊員の判断にまかせ（隊員全員分別を持った大人なのだから），それぞれ好きな者は一緒に住み，逆に現地手当をあげ，その地で任期2年といわず，いくらでも活動したらよいのではないか。そして，2年に1度は一時帰国費用を負担するという方法はとれないものだろうか。技術援助はとても短期間で行なうべきではないし，また出来ないのが現状だと思う。私の場合，もし上記の条件が満たされさえすれば，二人でじっくりと取り組みたいと思っている。私以外にもボランティアの気持は十分あるのに現実に結婚問題で参加出来ない人が多くいると思う。現在のシステムでは，残念ながらシニア隊員として行くしかないため，私としては，やりたい仕事のため，シニア試験を何回でも

受験するつもりだし，そう努力したいと思っている。もっと１０年，２０年，５０年先を考えた技術援助を考えられないのだろうか。日本の援助の根本が内外から問われている今こそ，任期の改革が必要だと思う。

2. 一時帰国

現在のように２年に１回程度でよいと思う。ただ私は経験が無いためハッキリ言えないが，帰国して日本に滞在した多くの仲間は，実に忙しかった，との由。さらに，一時帰国は次年の各種の資料収集も含め，ある程度，一時帰国金が必要と思われる。それでなくとも，かなり苦しい生活であるから。もっとも現実に隊員仲間を見ると，ものすごい格差があるのに驚かされるが……。

3. 業務引継

私の場合，自分の行ないたい方向が2年間では未完成の感があったため，あえて引き継ぎをしなかった。それは前任者が行なって来たルール（現代の日本の民間企業のようにルールが出来ていたら別だが）が出来ていない仕事を，それを全く知らない者に引き継ぐのは不可能であると思うからだ。例えば１０年という単位で行ない，そのルールを作り，現地人に完全に受け継がれるようになれば良いと思う。ただスポーツのような職種であれば可能かも知れないが。私としては自分の行なってきた業務を，ぜひとも，もう一度最後までやりたいと思っている。

4. 帰国手当

帰国までの期間は少々短いと思われる。せっかく貯蓄も自由になり，外国人の友人の家を回ったりしたら，１ケ月程度では短いと思う。手続き自体は，現在でもパスポートを一般に変えられるので問題はない。

5. 就　職

大きな問題としてＪＯＣＶでは取り上げられているが，私の場合も当然探さなければならなかったが，世界中どこでも技術者は絶対数が足りないのである。よくＪＯＣＶで就職問題を取りあげているが，なぜ就職のめんどうを見ているのか，わからない。

私の場合，新聞で探し，シニアで派遣される事を考慮し，年間契約の出来る外資系の会社を選び，現在に至っている。内容は電気の誘電材料のコンサルタントであるが，年間契約でも十分な知識さえあれば，十二分に企業は使ってくれるのである。もちろん，そのまま続けて働く事も出来るのである。現在の会社でも技術者が不足し，多額の金をかけて人を集めてい

るが，なかなか集められないのが現状である。私の場合，民間企業のスピードのあるシビアな利益第一，無駄の無い仕事ぶりには過去に経験があったため，スムースに入れたが，これが役人のような親方日の丸出身であったら困難であったかも知れない。それにしても，日本中を駆け巡り，多くの技術者にアドバイスをしていると，実にＪＯＣＶ，いや外務省も含めて，役所のスピードの無さを痛感する。誰から自分達の生活する金を貰っているか忘れているのでは，と思う。

Ｘ　ＪＯＣＶの政策・理念

1. 派遣前の訓練

隊員は大人であり，自主的に参加するとの由であるから，もう少し，通常の生活をすべきだと思う。確かに，朝のマラソン，スポーツは体を作るのに良いと思うが，それも各自の自発的な申し出によるべきだと思う。

規則を作らないとやらない，規則を作ると，それに対する罰を作らなければならない。しかし，もっと大切な事は，現地で出来るだけ現地人に溶け込み，現地人の方向を，自分も含めて，より豊かにもってゆく事ではないだろうか。それにしても訓練期間４ヶ月はあまりにも短期間である。その中で，言葉という，生活するうえにおいて一番必要なものを身に付けなければならないのだから。

私の頭の中には，坐禅の事も農家に行った事も，あまり心に残っていない。そんな事よりも，現地人の同僚が今何をしているかという事で一杯である。彼らから多くの手紙を受け取り，いろいろな相談を受ければ受けるほど，訓練の事など忘れてしまうのである。ただ一つ，私に対する二人の語学教師の努力には心から感謝している。

2. ＪＯＣＶの政策

これについては，これまでにも到るところで書いてきたが，あえて書くとすれば，私にとって，自分の知識が少しでも，たとえそれが米粒ほどであっても，現地人の一人にでも役立ってくれたならば，それで一つの成果である。そのチャンスを与えてくれたＪＯＣＶの政策は良いと思う。

これからも，日本の豊かになり過ぎた若い世代に，世界の現実を知らせるにはとても良いチャンスだと思われる。

ただ，現地スタッフの私生活上の問題を隊員間にもちこむようなことのないよう，ＪＯＣＶ側の慎重な対処が望まれる。現地スタッフは，

我々日本側の窓口の責任者である。したがって，公私混同は厳に慎しむべきである。

3. 理　念

ＪＯＣＶの基本的な考え方には大賛成であるが，それと現実との間には大きな差があると思う。ＪＯＣＶも発足して１０年以上を経過し，隊員は常に新しくなっているが，組織そのものは，そのままである（人事面においても）。一度，一定の期間を定めて解散し，再び初期の理想に向かって組織を作り直すべきだと思う。

さらに帰国後，一現地隊員からのレポートに，私の機材が生かされていないということが書いてあったとの由の電話があったが，すぐ私は，現地人の教師に手紙を書いて確めたところ，事実と異なっていたのである。何か問題が起きた時，一隊員のレポートのみを鵜呑みにせず，現地の校長なり，現地人にも聞くべきではないだろうか。こんな事も民間企業ではありえない。

4. 隊員気質

多くの隊員，つまり今私の友人でもある隊員ＯＢは，実に爽やかな人々が多い。これからも長く友人として付き合いたいと思っている。

しかし，逆に現地大使館に自分の生活を豊かにするため時間を売ったり，現地人を蔑視しながら報告書には正反対の事を書くような人がいた事は実に残念であった。しかし，それはそれとして私は，多くの人間と付き合い，現地での日本人に対して文化ショックを感じながらも，多くの現地人，外国人，そして隊員達の友人が出来たことをＪＯＣＶに感謝するのである。「また再び必ず戻る」と現地人にした約束を守るべく努力をしたいと思っている。

日本に帰って考えること

多田　潔

帰国してから早，1年半が過ぎ去ってしまった。全く時の流れは早いものだと思い，それだけに時間を大切に使いたいと思いながらも平々凡々と暮している毎日である。体調の方は帰国後快調だが唯一の変化は体重が大巾に増加した点である。多分，有り余る物資の中に埋もれ，運動不足も手伝って一見して平和な日本にどっぷりと浸ってしまった結果が数字となって表われているのではないかと思い反省させられる次第である。それにしても，一見平和そうな日本。エネルギーも食料もほとんど輸入に頼り，経済大国といいながら，北を見れば逃り，南を見れば体がる国。何か最近，虚しく感ずる事が多く，日本はこれから先，世界の中に自信を持って進んでゆく方法をとらねば，いつか土台から急激に崩れるのではないかという危惧を感じているのは，私一人だけではないと思う。

さてこの時点で総合報告書を読み返して見ると，私の貴重な2年間の想い出が，次から次へと浮かび，我ながら楽しかったなぁ～という一言で表現出来ると思う。ただこの報告書も含めて，全ての報告書について事務局側からほとんど何の意見も感想も聞けなかった。これは民間会社と異なる点で，やはり反応のある報告書でなければならないと思う。数百人からの数々の貴重なレポートは事務的にコピーして何と無く職員その他の人に回され，机の片隅に眠っているのではなかろうか。また事務局の担当者が，たびたび代わるというのも問題である。突然現地の状況も知らない職員が現地事務所の責任者になったり，何か人事面でも民間会社と比較すると理解しがたい点がある。これらの件は私の邪推でしょうか。しかし，帰国してから訓練所も新設され，OBも増え，現地の状況も割合い正確に把握されるようになったと聞かされ，段々と変って行くなぁ～と感じると共に，あまりにも立派になった訓練所での生活に慣れすぎて，厳しい現地の生活に溶けこめず，日常の雑事を現地人のお手伝いさんにやらせ，日本人だけでかたまり，偏狭な日本人社会を作らなければよいと思う。隊員のOB，OG達が，それぞれの道を進む中で，地球の片隅で

一生懸命働いている人，ボランティア活動を続けている人等，有意義に時間を使っている人達の事を最近耳にする事が多く，実に清々しく感じると共に，何かチャンスがあれば，世界に飛び出て行きたいと思う次第である。さて，この平凡なサラリーマン，どうなりますか。

それにしても一つの疑問が残るのはせっかくの貴重な経験と技術を持ち，もう一歩進んだボランティア活動を続けたいと思っているＯＢ，ＯＧに対して，それを生かす間口が狭すぎるのではないだろうか。確かに言葉は絶対に必要であるが，それが総てではないと思う。外国に行って自分の持っている技術を生かし，現地人と一緒になって働きたいという意志は何よりも優先すべきだし，２年以上の現地経験は重視しなければならないと思う。

日本的な常識（例えば，年齢，家族等），あるいは役所的な形式主義で，ボランティア活動をしたいという芽を摘んでしまうのは，大変な損失である。資源の乏しい日本で，世界に誇れるのは人材のみである。世界が日本人を必要としている折，地道に，コツコツと現地に根を下ろして生活し，いつか数世代後に，彼らと同化し，また国際人としての市広い感覚を持つ事が出来た時こそ，日本が世界の中で，自信を持って歩ける国になるのではないだろうか。以上，取り止めもなく書いてしまったが，私の帰国後の所感である。

多田隊員の報告書を読んで

堀　江　　博

今までチュニジアやモロッコ等のフランス語圏に派遣された隊員は，他の派遣国に比べて，より多くの問題をかかえて大変苦労しているようである。

隊員にとっては英語でさえ大変なのに，フランス語しか通用しないことや，日本の規格とは大変違った欧州規格の機器等，初めてのことばかりであることなど，自分ではどうしても解決できないため，手紙で私のところへ問い合わせてきたり，一時帰国の際に尋ねて来た隊員もいた。

本報告書でもチュニジアは，機材，その他の内容についてもかなり進んでおり，場合によっては，日本以上に技術が要求されるので，ボランティア的な事よりも，むしろ専門家的な要求が強いと思われるとあるが，この点，本隊員の場合は，技術上の問題は全くなかったとのことで，それらは一度以上自分の手で行なったものがほとんであり，それ以外でも基礎的なものは，今までの経験から十分となせたと書いてある。また，カウンターパートや上司とも非常にうまくいったとのことで，本人の人柄のせいもあり，大変結構なことである。

しかし，他の隊員の報告内容に比べ，非常に大きな差があることも見逃せない。本隊員の年齢や，経歴等からしても，すべてが本人の思い通りにいったとは考えられない。

この国に対する今後の隊員派遣のことを考えると，もっと，問題点または苦労話をはっきり書いてほしかったと思う。（青年海外協力隊技術専門委員＝電気機器）

テュニジアをめぐる内外情勢と医療援助

最終報告書（54年3月～54年4月）

54年4月8日記

派遣国　テュニジア　51年2次前期組

職　種　医　師

氏　名　本　田　徹

配属先　Hôpital Régional de Jerba

本田隊員の略歴

氏　名：本田　徹

生年月日：昭和22年5月24日

出身県：東京都

職　種：医　師

派遣期間：52年2月～54年4月

Ⅰ　まえがき

いよいよ2年間のテュニジアでの生活をしめくくる時期がきた。イスラムという，地上でもっとも豊富，かつ魅力に満ちた文明社会の一つに身を置いて，私はほとんど駆け足のうちに時を過ごした感に打たれる。カルチャーショックにつぶされる暇がないほど，まず私は知ろうとする欲望に突き動かされた。それだけ経験は，あれもこれもと上すべりのうちに終わったともいえるだろう。

ジェルバ，私が小児科医として働いたこの土地は，テュニジア南部に位置する人口約8万の小さくて（514 Km^2）平和な島だ。伝統的にはささやかな農，漁業と出稼ぎによって，島の経済は支えられてきた。それが約15年ぐらい前，テュニジアに観光立国の施策が敷かれて以来，ジェルバの様相もまた大きく変わりつつある。北から東にかけてのなだらかな海岸に20を越えるホテルが急造され，夏季の間常時1万人にのぼる観光客をヨーロッパから受け入れる。

さしたる産業をもたない，この島にとって開発とは，観光の振興ということと，おおよそ同義である。観光によってジェルバの人々が物質的に享受したものは大きいだろうが，同時に島が長く保ってきた social fabricといったものが，少しずつ侵蝕，崩壊させられつつあることも否定できないだろう。ほんの一つの例をとると，若い人たちの信仰，アルコール，性などに対する考え方は，イスラムの伝統的な価値観からはだんだん乖離しつつある。そのことには，後でまた触れるであろう。

本報告書で私が試みたいと思っているのは，テュニジア社会と，そこに生棲する人々に関する包括的な観察，第三世界の医療についての検討といったことどもである。

Ⅱ　テュニジアと国際社会

この2年間，世界は実に多事多端だった。犯罪一つ起きないような，のどかな島に暮していても，現代史の大きなうねりがテュニジアにも非常な力で押し寄せていることを感知せずにはおれなかった。それは一つにはマグレブ（Maghreb。「太陽の沈む地方」を意味するアラビア語）という，中東・ヨーロッパ・アフリカの交会する場所に置かれている，この国の地政学的（geopolitic）特殊性と関係しているだろう。

眼をまずヨーロッパに向けてみよう。フランスをはじめとするヨーロッパ

共同体（ＥＣ）９カ国は，テュニジアにとっても最も重要な経済上のパートナーだが，両者の関係では常にテュニジア側が割を食っている。

1977年の対ＥＣ貿易収支は，2.74億ディナール(1ディナールは約500円）の赤字となっている。この国の貿易収支が全体で3.48億ディナールの赤字なのだから，その８割近くがＥＣによるものといえる。さらに旧宗主国フランス１国で貿易収支のマイナス分の半分を占める（1.7億ディナール)。

この１，２年来，ＥＣはテュニジアからの農産物（とくにオリーブ油，ブドウ酒，柑橘類），繊維製品（絹織）などの輸入を制限しはじめた。80年代のはじめに予定されているスペイン，ポルトガル，ギリシアのＥＣ加盟は，テュニジアからの農産物の西ヨーロッパ向け輸出を一層困難にする見通しである。また国内の失業問題の深刻化に苦しむフランスが，去年から外国人移民労働者の新規受入れ停止，既に在仏している者たちの帰国奨励といった方針を打ち出したため，海外出稼ぎ労働者からの送金が外貨獲得の一大源泉（77年で7.234万ディナール）となっているこの国には痛手である。移民打ち切りがテュニジア国内の失業問題（勤労人口の15％以上といわれる）に落す影も深刻だろう。

今，国際的な論争となっている南北の貿易の不均等・格差の問題は，このようにテュニジア対ＥＣの関係でも端的に現われていることになる。

中東問題および他のアラブ諸国に対するテュニジアの政策についても，少し触れてみよう。

パレスチナの地を，1947年の国連総会決議第181号にそって，二つに分かち，パレスチナ人の独立国家とイスラエルとを共存させるという和平プランをアラブ諸国の元首の中ではじめて唱えたのは，テュニジアのブルギバ(Bourguiba) 大統領であった。1965年，この発言がなされた当時は，ナセルのエジプトを盟主とするアラビア世界は主戦論で占められていた。「イスラエル人を地中海へ叩き出せ」（Chassez les Israéliens dans la mer !）という有名なスローガンである。ナセルはブルギバの現実主義・妥協路線を憤って，一時テュニジアとの国交を断絶する。けれども67年の六日戦争でエジプトは完敗し，全パレスチナの奪還というナセルの夢は打ちくだかれる。

ＰＬＯ内多数派を含め，現在のアラブ側の中東問題解決案を最大公約数的にいうと，イスラエルが67年の戦争前の国境線まで完全撤退し，その後ヨルダン河西岸地域（Cisjordanie）とガザ（Gaza）にパレスチナ人の

独立国家を建設する，これを条件にイスラエルを国家として承認する，というものだ。従って，65年のブルギバの提案は，その後の二つの戦争を経てアラブの大勢の意見となったわけだ。これを一般のチュニジア人は，わが大統領の先見の明として誇りにしている。

サダト氏のエルサレム訪問に対する評価というものも，チュニジアはアラブ諸国中最も屈折している。サダト氏ないし彼の政府を直接攻撃することは慎重に避けつつ，エジプト＝イスラエル和平合意の方向・内容に対しては，中東問題の包括的解決につながらないとして消極的に反対する。

独立以来，この国の外交路線は，二つの主張のせめぎあいのうちに形成されてきた。一つは旧植民地主義勢力，すなわち西欧と協調しながら，その経済援助で国の開発を図っていこうとするもの。他の一つはリビア，アルジェリアなどのアラブ急進共和派と結んで，西欧への従属をはっきり断わっていこうとするグループ。これまでのところ，戦いは前者の勝利のうちに進められてきた。首相のヌイラ（Nouira）氏が最初の考えに立つ人であり，大統領も幾度か逡巡しながらも，大筋において首相の親欧米路線を是認してきた。

1974年リビアの出資で建設されたこの国最大のホテル Dar Djerba において，ブルギバ氏とカダフィ議長は，チュニジア＝リビア合併の協定書に調印する。この「結婚」の仲人は時のチュニジア外務大臣モハメッド・マスムーディ（Mohamed Masmoudi）氏であった。彼は，今述べた二つの流れのうち，後者を代表する人である。当時ヌイラ氏は外遊中で，このニュースを聞いて慌てて帰国し，大統領を説得，翻意させる。合併劇は流産に終わり，マスムーディ氏は外務大臣を辞任する。その後のリビア＝チュニジアの関係は，現在に至るまで緊張が絶えない。ガベス湾沖の大陸棚油田をめぐる領有権問題は，ハーグの国際司法裁判所まで持ち込まれ，現在係争中である。今年の1月には，合併調印5周年の当日，チュニジア航空のジェット機が乗っとられ（協力隊員も二人，その機上にあった），二転，三転，トリポリにて事件は血を見ることなく解決している。しかしリビア側はチュニジア政府から出された，犯人3人の引き渡し要求を蹴っている。この事件をリビアの工作と推測する向きはチュニジアに多い。

アルジェリアとの合併の話も，故ブーメディエン大統領とブルギバ氏との間にあったが，陽の目を見ることなく終わっている。

二つの石油大国アルジェリア，リビアにはさまれるようにして，アフリカの最北端から地中海に突き出ている小国チュニジア。さしたる自然資源をも

たないこの国にとって，政治的独立というものは，経済上の自立をいかに図るかという問題と切り離して考えることが出来ない。ただ，政治的独立といい，経済的自立といい，その線引き，定義をどこでするかは，先ほど触れた2派の間で大きな違いがある。les pays frères arabes（アラビアの兄弟諸国）という表現は，当地の新聞・テレビでは一つのきまり文句になっている。しかし，この「兄弟」がなかなかのくせものなのだ。兄弟・身内が殺しあったり，ペテンにかけあったりすることは，この，もと遊牧民出身の民族には茶飯事だ。リビア，アルジェリアなどの資源強国と，政治的一体化を進めすぎると，テュニジアとしての国家の同一性（identité）もしくは独立がおびやかされるという懸念が，親西欧のプラグマティストの心理に強く働いていることは疑えない。

一方彼らの反対者たち，現体制下の少数派は，西欧や米国からの無制限・無原則な資本の導入が，テュニジアを新しい植民地主義の支配下に置いてしまったと批判する。欧米の援助に寄生する特権階級が形成された代わりに，アラブ国家としての政治的独立・連帯性は奪われたというのである。

結局，この両者の主張というものは，ナシ＝ナリズムというものの及ぶ範囲を，文化母体を共有する汎アラブ世界に置くのか，あるいは75年間にわたるフランスの植民地主義支配が人為的に作り出してしまったテュニジアの狭い国境線の中に置くのか，をめぐる論争というふうにも考えられよう。とまれ，この二つのグループの角逐は最終的な結着をみたわけではない。これからの勝負の展開は，恐らくブルギバ「以後」にもちこされるだろう。

Ⅲ　国内問題

テュニジアのように純粋な国内問題というものが少ない国も，まれかもしれない。程度の差はあれ内政上の問題というのは，国際環境の厳しさがこの国に反映したものという側面を，必ずといってよいほど帯びている。ただ一つの例外といえるのは，ブルギバ大統領の後継問題だろう。大統領は約10年前から脳卒中，心臓発作など繰り返し，現在では「君臨すれど統治せず」の状態を余儀なくされている。国政の重要な施策決定は首相のヌイラ氏に任されている。去年も不眠症，全身衰弱が原因でブルギバ氏は2度ヨーロッパに長期の療養旅行を試みている。いろいろ陰口を叩く人はあっても，やはりこの政治家は建国のヒーローなのだ。若い層も含め，彼は国民の大多数の尊敬と親愛を集めている。個々の政務にはタッチしなくなったとはいっても，

ブルギバ氏が生きているという事だけで，テュニジア共和国に与える安定感は大変なものなのである。だからこそ余計に，一体ブルギバが死んだら，この国はどうなるのだろうという危惧は人々の念頭を去らない。第二のイランだよとうそぶく人さえいるのである。首相のヌイラ氏は有能な行政官という評判だが，カリスマ的魅力に欠けること，その私財が莫大であること，などが災いとなって，国民の間での人気はぱっとしない。若い人たちの中には大びらに彼を罵る者も少なくない。大統領は再三にわたってヌイラ氏に対する彼の100%の信頼を表明しているが，ブルギバ以後への白紙委任状として国民が受けとっているわけではない。

国内問題の第二は労働組合運動である。官庁，公社の労働者を中心に50万人の組合員を結集するテュニジア労働者総同盟（UGTT）は，日本の総評，同盟を合わせたか，それ以上の比重をテュニジアの労働運動の中でもっている。一党独裁が敷かれ，公然とした反体制運動が事実上禁止されているこの国では，経済要求はもちろん，政治的変革の声も，組合活動を通じて出されてくる傾向が強い。若者たちは，テュニス大学を中心とする学生運動によるか，UGTTの組合員としてしか，政治的異議申し立ての道を与えられていない（イラン革命に触発されて，ここでも最近，イスラム教寺院 Mosquée を温床にした第三の反政府運動が芽ばえつつあるという）。

一昨年の秋以来テュニジアの国内では鉱山，鉄道，農業など基幹部門の労働者のストライキが相継いだ。UGTTの委員長ハビブ・アショー（Habib・Achour）氏 ― 彼は独立闘争時代を通じてのブルギバの盟友だったのだが ― は，ヌイラ氏の率いる政府を公然と批判しはじめる。アショー氏のデストリアン社会党からの脱退，政府，党のUGTT地方組織に対する度重なる弾圧などがあって，年末から78年はじめにかけて，政治的・社会的緊張は一挙に頂点へ登りつめる。UGTTのゼネストが引き金となって起きた1月26日の悲劇的な暴動事件（公式発表でも50人余りの死者を数えている）は，尖鋭化する組合運動に対する政府・軍隊からの「血」の回答であった。

アショー氏の逮捕，投獄，裁判（去年，懲役10年の判決が下っている）があり，組合の上部組織は政府の手で完全にすげかえられた。こうしてUGTTを黙り込ませることに成功したとしても，対外的にはテュニジア政府はかなりの傷を負った。アショー氏は国際労働運動内部でよく知られた人であり，彼の投獄はヨーロッパを中心に大きな反発を呼んだ。また，サダト訪イ

スラエルに対する評価などで，彼はアラブ急進国に近い考えをもっていたとされており，リビア，アルジェリアはその失脚を喜ばない。今年1月のチュニス航空機乗っ取り事件でも，犯人側の要求が，アシュー氏とマスムーディ元外務大臣の釈放であったということは意味深い。いずれにせよ労働組合運動は，無理矢理，噴火口を封じられた火山のようなもので，いつどんな形で再爆発するか楽観できないと思われる。

国内問題の三番目は多党制（multipartisme）をめぐるそれである。先にも述べたように，チュニジアでは，ブルギバ氏の創設になり，独立を導いたデストリアン社会党（デストリアンとは，法・原理などを総称するアラビア語のデストールに出た言葉という）が，政府，国民議会（1院制）など行政，立法のすべての権力を握っている。被選挙権もデストリアン党員であることが前提条件となる。独立運動および，その後の新国家建設の過程で，この党が果たした役割は偉大なのだろう。ただチュニジアが，産油国と南アフリカを除けば，今やアフリカで最も豊かな国の一つとなり，「経済的離陸（décollage économique）を目ざす第五次計画の遂行にかかっている現在，1党独裁の政治形態は大きな矛盾にぶつからざるをえない。

親欧米路線を取りながら，自国民の民主的権利，政治的な選択の多様化などを求める声に耳を貸さないでいることは，対内的にも国際的にもマイナスだろう。"Democratie"という新聞を発行している社会民主党系のグループは，去年，正式に党としての承認を求めたが，拒まれている。ヌイラ首相は新聞のインタビューなどでは，「政府は多党化に反対しているわけでは全くない」と表明しているが，いざ実行となると，二の足を踏んでしまうようだ。経済的な発展，教育の浸透，観光やテレビ，出版物などを通じての欧米文化との頻繁な接触 ── これらは国民の精神を否応なしに自由化の方向へ引っぱっていく。他方では反対勢力に市民権を与えることで，国内の政治的安定，一枚岩構造（monolithisme）にひびを入れられることを恐れる気持ちは党・政府に根強くある。このジレンマをどう調整するかという問題は，ヌイラ氏の政府が直面する一つの重大な試練だろう。

四つ目に掲げる国内問題は，教育，雇用に関わる。

教育に対するこの国の熱の入れ方は，それなりの矛盾は抱えているにせよ，ひとまず賞讃に値するだろう。資料が手許に見つからないため，具体的な数字はあげられないが，初等・中等・高等教育を通じて，一人の子供のために国家が注ぎ込む金額は第三世界の国々の中ではチュニジアはずば抜けて高い。

年間の国の歳出のうち，文教予算が占める割合は3分の1に達するとも聞いている。面積でも資源でも小国としかいいようのないチュニジア。そこにアラビア諸国の中では比較的多い600万の人間が住み，その半数以上が20歳未満の若い世代で構成される。国民教育の成否は国の将来の命運に直接関わってくる。為政者も真剣にならざるをえないだろう。

しかし教育の問題は，雇用と切り離して考えることができない。第三世界では，この現実は一層深刻だ。せっかく子供を教育しても，彼らにその後適当な働き場所を与えてやれないならば，大きな社会不安を生み出すだろう。5カ年なら5カ年の経済計画の達成によって，いくつの新しい産業と新しい職場，即ち雇用を作り出せるかという見通しをもたずに，中・高等教育の場をやみくもに広げていくことは不可能だ。

たとえば，去年(78年)，小学校から中・高等学校（enseignement secondaire）への進学試験に合格した生徒は54,000人であった。受験者は全部で189,000人だから，合格率は28.6％に達するのみである。小学校に入学し，6年間きちんと通い続けられる子供の割合は，この国では恐らくまだ80％がやっとだろう。無事初等教育を終えた子供のうち，一体，どれだけの者が上級の学校を目ざせるのか？　さらに志望した生徒のうち3割弱しか中学校へ上がれないとしたら，中等教育を受けられるということだけでも，まだチュニジアでは選ばれた少数の子供にのみ与えられた権利と言わざるをえない。

これ以上の数の中学生を受け入れるための施設，スタッフが足りないこともあるだろうが，教育が国の経済政策全体と連動させられているということの方が，より本質的な理由なのだ。ちなみに第五次計画（78～82年）では，78年度には51,000人に中等教育の機会を提供するということが，はじめから決まっている。

これだけ計画性をもった教育，雇用の政策を推しすすめているとしても，次々に生まれ育ってくる膨大な数の若い世代を社会の中にきちんと位置づけてやることは，困難をきわめるのだろう。失業率は農村などに吸収されている潜在失業者，観光の季節だけの労働者も加えれば20％を越えると思われる。家の経済的な事情で希望の教育を受けられず，不満をかこっている若者，バカロレア（大学入学資格試験）まで通りながら，大学へ進むでもなく，ちゃんとした職にありつけるのでもなく1日中カフェでぶらぶらしている若者。この国では，そう珍しい光景ではない。

一昨年の10月，テュニジアの中を旅行した折，ケビイリイ（Kébili）というオアシスの町で10人余りの子供たちと知りあいになった。年恰好は7，8歳から14，5歳くらいまでいろいろだったが，学校へ行っている子と，そうでない子で，ものごし，喋り方に大きな隔たりのあるのを見て，おどろいた。

「学校で勉強しているのか？」

「うん」

「アラビア語だけじゃなくて，西洋のこともか？」

「ああ，去年からね　」

「どれ，ボンジュールって言ってみろ！」

学校へ行っている子供は，まず例外なく屈託がない。私の片言のアラビア語で話していても，彼らがいかにのびのびしているかは，よく伝わってくる。通学していない子は，引けめとか，劣等感というと言葉が強くなってしまうが，何か私のような外来者に対して気おくれしているところがある。しかし，彼らは，同輩に比べての自分のハンディを自然なあきらめのうちに受け入れてしまっているようだ。子供たちは，教育というものが各人の運命を全く別別のものにふりわけつつあることに気がついていないほど，無心に仲良く遊んでいる。そのことが，かえって私を不思議な感動で満たした。

教育の問題に触れたついでに，もう一つの興味深い現象を考えてみよう。それは学校教育，行政機構を通じて慎重に進められている「アラビア語化」（Arabisation）のことだ。独立以来，たとえばフランス語の修得開始の時期が小学校1年生から3年生へと引き上げられ，他方，中・高校（lycée）の場では，ここ1，2年のうちに地理，哲学，歴史などの課目が，これまでのフランス語からアラビア語で講義するよう方針が改められた。自然科学の方面では，いぜんフランス語が幅をきかしているが，これも長期的には見直しの方向にあるという。アラビア諸国は互いに政争，軍事衝突に明け暮れてはいても，文化的な一体化政策を推し進めていこうとする点では一致している。テュニジアのように，アラビア世界の中での日本 ── 知識集約型の産業国家 ── の地位をめざす国では・アラビア語化は必然の要請だろう。けれども，この国が発展するために必要な科学，技術の教育の振興は，逆にフランス語，英語の重要性，依存度をいよいよ大きなものとする。だからこそテュニジアの教育政策の責任者たちは，Arabisationを推進していく一方で，l'acquis（既得のもの）としてのフランス語をこれまでの水準以下に落と

してはならないという事も強調してやまないのだ。アラビア語化と科学・技術教育の振興 ── この二つの，一見，相反・矛盾するかにみえる価値観をうまく統一させていくことができれば，テュニジアの子供たちは20世紀の終わりまでに，精神的にも物質的にも，非常に豊かな実りをわがものにするだろうという予感が私にはする。

Ⅳ　若者たち

今までスケッチしてきたような，テュニジア国のうち，そとをめぐる状況が若い人々に与える影響，また，それに対する彼らの主体的な反応 ── 彼らが考え，希望し，人生を選択していく様子 ── は，どうなのか？

私が暮したのはジェルバという，この国の一つの小さな地方であるにすぎない。首都のテュニスに住む若者たちの尖鋭な問題意識といったものには，結局触れずじまいだった。仲良くつきあった友だちというのも，2，3の例外を除けば，病院の看護夫や技師などに限られる。テュニジアの普通的な若者像といったものは，従って，私には描けない。それでも私の友人たちが抱えている問題や，この国で与えられている生活の条件は，他の土地に住む若者についてもあてはまる場合が多いだろう。私はそこで，自分のよく知っている青年たちの暮しぶりを以下に写しとってみたい。

結婚や性は，若者にとって万国共通の問題だが，テュニジアではそれは，西欧化とアラビア＝イスラム的価値観との相剋，混淆という形で現われる。結婚についていうと，嫁さんを何百ディナールといった大金で「買い求める」風習，息子の嫁を母親が選びとる権利，いとこ結婚を尊ぶ心理といった，多かれ少なかれイスラム的な伝統は，ジェルバのような田舎ではまだ根強く残っている。普通の青年男子は5～10年間せっせと働いてお金をため，まず自分の家を建てる。家が建つと，ようやく嫁をとる資格が手に入るわけだ。ただ，いいなずけの関係は，家など出来る前から決まっていることが多いらしく，大抵の独身男子は自分のフィアンセと称する娘の写真を大切に持ち歩いている。結婚前の男と女の自由な往き来をタブー視する考えは，テュニスのような都会を除くと，いまだに支配的だ。ジェルバでも，婚前の男女が手をつないで町を大びらに歩くことなど，まず滅多に見かけない光景だろう。ただ，こうした御法度を若者たちは喜んで受け入れているわけではない。窮屈さや反発を感じながら，社会の表向きのルールに従っているのである。

冒頭の文章でも触れたが，10～15年来のテュニジアの観光化政策，西洋

人旅行客の大量受け入れは，結婚や異性関係を律するイスラムのモラルに今や大きな打撃を加えようとしている。夏の間，この島を訪れる何十万人という観光客にサービスする仕方は，宿を与え，テュニジア料理を賞味させてやることからはじまって，みやげ物，ガイド，交通の便，医療などを提供すること，と多岐にわたる。

バカンスの季節の間，私の友だちも含め，ジェルバの若者たちの少なからずが，熱心に励むサービス(?)が一つある。彼らはこれをユーモアまじりに，"business"という隠語で呼んでいる。要するに，巧みな手練手管でドイツやフランスから遊びに来ている娘や御婦人たちを「引っかける」（draguer）仕事だ。ホテルで，海岸で，カフェで，ディスコテックで，あるいは並木道で，彼らは本当に舌を巻くほど上手に白い肌の女たちとお近づきになる。フランス語には全く不自由しない彼らだし，ドイツ語もビジネスとあれば真剣に覚えるから障害とはならない。こうして知り合いになった女の子を連れて，勇ましくも逞しいこの若者たちは，あちこち案内してまわり，座談やダンスの相手になる。

アラビア絨毯の斡旋というのも，彼らのビジネスには欠かせない要素だ。1枚が，ものによっては500から1,000ディナールもしようという tapis（絨毯）を，ドイツやスイスの観光客は平気で手に入れたがる。自分は織工場（artisanat）と店を両方もっている主人をよく知っているから紹介してやる，値段はうんと負けさせる……，こんなふうに彼らはヨーロッパ人にもちかけ，店に連れていく。

主人と彼らの間には暗黙の協定が出来ている。うまく品物が売れれば，斡旋者は10％程度のコミッションを貰える。さり気なく，ある絨毯を客に気に入らせるための彼らの口上は，聞き惚れるほどのものらしい。

1枚の絨毯を織り上げるまでの労力（12～17歳ぐらいの未婚の娘が使われる）と時間（2～4カ月），それに出来映えの美しさを考えあわせれば，1,000ディナールでも暴利をむさぼっているとはいえないだろう。ただ，こうした商品には常に二重価格が存在する。裕福なヨーロッパ人に売る場合の値段と，テュニジア人や私のようにヘンに地元に同化してしまって，誤魔化しのきかない外国人に売る値段とである。この両者の隔たりは2倍，3倍にもなることがある。原材料費，労賃，最低限の利潤など加えた価格下限はあるとしても，天井を設ける必要はない。客にとって納得のいく値段で買ってもらうというのがテュニジアのみやげ物屋たちの考え方だ。これは詐欺の心

理とは違ったものだ。商品の使用価値が人によって異なるということを，彼らはよく知っているというだけである。

ヨーロッパの観光客は3，4週間滞在することがザラだから，ビジネスマンと彼の美しい顧客とは，そのうちすっかり親密になる。お小遣もちゃんとくれる。夜は砂浜なり，ホテルなりで「千夜一夜物語」を地でいくような快楽に耽る。この類の武勇譚（saga）は，実際，耳が腐るほどテュニジア人の仲間たちから聞かされたものだ。有能な「技術者」だと，春から秋までの観光シーズンのうちに，こうして5人を越える女をカモにする。

カモとはいうものの，女性たちの方もテュニジア青年とのアバンチュールを求めてやってくるのだから，お互い様だ。割り切ったものである。西鶴の「好色一代男」も顔負けな，これらの若者たちの行動は，テュニジアの夏の青い空と同様，あまりにあっけらかんとして，嫌味というものが全然感じられない。いままでつきあった何十人という外国人女性からの手紙の箱 ── 百通以上も入っている ── などを開けて，朗らかに笑ってみせる彼らは，天真爛漫であるといってもいい。

そういう私自身は，まごまごしているうちに，「戦果」一つ挙げずに，この島を去らなければならなくなったが，それでいて特別ねたましい気持ちも抱かずにすんだのは，わが仲間たちのまれにみる陽気さ，開放的な性格のお蔭だろう。

この「遊び焼け」した若者たちも，しかるべき時がくれば，何とか家を建て，親のあてがってくれた娘と，おとなしく結婚するのだから笑わせる。

全体，アラーは，信徒の現世的欲望にも実によく気を配ってくれる神である。そのことはコーランを読むとすぐわかる。たとえば次のような意味の一節があったのを記憶している。「ラマダン（断食月）中の夫婦の交わりは，はじめは禁じておったが，お前たち（イスラム教徒）が余りに不自由そうなので，不憫におもい，「きまり」を改めてやることにしたのだ。げに妻は夫の衣，夫は妻の衣。アラーはなんと慈悲深いことか……」。ざっと，こんな調子である。

現代のテュニジア青年は，アラビアの砂漠でアラーに見出されたベドウィンの末裔であるというだけなのかもしれない。とはいえ，この観光を通じての西洋との「ランデヴー」は，長い間神聖なものとみなされてきたイスラムの結婚を，パロディ化してしまう恐れが充分にある。性や結婚についての価値観がくつがえされつつあることは，若者たち自身が一番よく知っている。

けれども，テュニジア人の娘との公然としたつき合いを禁じられる一方で，西欧からの性的に「解放された」女性たちを日々見せつけられて，彼らがビジネスに走ったからといって，それを，とやかくいうのは意味のないことだろう。

女性たちはといえば，その置かれている条件は，男に比べ，まだずっと不自由なものだ。処女性を重んじるイスラム社会では，一人の娘が男との良からぬ間を噂されるようになったら，「商品価値」を失ってしまう。両親の監視も厳しければ，本人たちも慎重にならざるをえない。仮に男と付き合うにしても，行動は隠密のものとなる。無料診療所に病気を装って訪れ，好きな看護夫にそっと付け文するといった類の手口である。

そうはいっても，観光化と家族計画の推進は，女の性的自意識を着実に変えつつはある。これも10年ぐらいの歴史をもつだけらしいが，テュニジアはアラブ，アフリカ諸国でほとんど唯一，家族計画・出産調節の問題に本格的に取りくんでいる。どんな町村の母子保健センター（Centre de PMI）にも，家族計画の事務所が置かれ，避妊法の普及，啓蒙活動が盛んに行われている。ピル，コンドーム，リング，卵管結紮術など，すべて無料である。中絶に関しても，未成年者を除けば，本人の意志だけで手術を受けられる。夫婦に子供二人という目標達成には，まだほど遠いが，家族計画は demo-graphic な面でも，性的なモラルの面でも，テュニジアの社会に大きな影響を与えようとしている。

未婚の娘が子供を生んでしまうケースは，ジェルバでも年々増える一方だ。産院に来て出産すると，母親だけはこっそり帰ってしまう。残された赤ん坊は「ブルギバの子」と冗談まじりに呼ばれ，適当な養い親が見つかるまでは国の施設で育てられる。

この地で働き出して2，3カ月にしかならない頃，新生児の検屍をさせられたことがある。砂浜に埋めてあったのを，通りがかりの人が見つけ，警察に通報したのだ。ほどなく母親は逮捕された。ホテルに働く女で，従業員か客と出来て妊娠・出産。困り果てたあげくに，わが子を殺して捨てたのだそうだ。こんな事件は，むろん例外的だが，テュニジアの農村社会に起こりつつある変化を象徴する意味はもっている。

イスラムの教えに対する若者たちの受けとり方は，どうなのか。私が1年近くを一緒に暮した病院の放射線技師，ブガンミィ（Bouganmi）は自分自身を指して，" croyant mais non pratiquant "（信者なれど実践

せず）といっている。恐らく彼の言葉はテュニジアの大多数の若者の本音を代弁しているのだろう。彼らはアラーという唯一神の存在，この神が地上に遣わしたマホメッドという最後にして最大の予言者のことを信じている。けれども毎日の礼拝，ラマダン（断食），喜捨など信者に求められている行動は，程度の差はあれ，怠りがちである。

彼らのいい分は，信仰が実践しにくいような環境を政府が作っておいて，よきMusulmanたれ，と命じられても，無理だということに尽きる。ブドウ酒をはじめ，アルコール類は手に入り放題，ヨーロッパ人を沢山お客として迎え入れて，彼らの「頽廃文化」を若者たちが浴びるに任せている。それでお祈りだ，ラマダンだ，といわれても，馬鹿馬鹿しくて付き合っていられない，というのだ。

神と人間を，キリストのような仲介なしに直接一対一で邂逅せしめた時，そこに生まれる衝迫感といったもの――これがイスラムの宗教感情の一大源泉をなしているように，私には思える。その見地に立てば，この若者たちのいいわけは，単なる責任転嫁・甘えにすぎないことになる。今イランのzealotたちが進めつつあるイスラムの精神革命などに照らしたら，観光化されたテュニジアの青年たちが陥っている「堕落」は深いとさえいえるだろう。

しかし逆には，私は彼らが知らず知らず身につけてしまっている精神の受容力，撓やかさに感心せずにはいられない。この若者たちは，文化的な二面性（ambivalence）を，身をもって生きているのだ。

彼らはオム・カルトウムとかアブダラ・ハリムといった，アラブ世界の偉大な歌手の歌をほとんど暗唱できるほどに聞き惚れ，涙をさえ流す。他方ではトラヴォルタ，ビージーズなどというディスコミュージックの英雄たちのリズムに肉体と魂のすべてを委ねる。どちらに陶酔しているときの彼らも本物なのだ。

話のついでに，ラマダンとか，犠牲祭といったイスラム教の重要な行事について，少し書いておきたい。世俗化（laïcisation）の進行ということは，こうした宗教行事をも容赦なく巻き込みつつあるというのが私のもった印象である。1カ月にわたる断食月（日の出から日没までの飲食が一切禁じられる）を，きちんと守り通す者は，若い世代では今や少数派であろう。これ見よがしに他人の前で食物，水を口に運ぶことはさし控えるが，ひとたび家に帰れば断食は終わりである。ラマダン中も夜は平気で酒をのむ若者も

少なからずある。

犠牲祭（l'Aïd El Idha）についていうと，これも旧約聖書のアブラハムの行跡に起源をもつ，本来，敬虔な行事のはずだが，近年は形骸化の危険を帯びてきている。何よりも犠牲に捧げる動物（とくに羊）が年々高くなる一方なのだ。羊を飼育する農・牧民と一般消費者の間に流通のエイジェントがからんで，その彼らが値をどんどんつり上げていくらしい。普通の労働者の賃金はまだ月に70～80ディナールだというのに，3，4歳のよく肥えた羊は50～60ディナールという売り値がつく。おいそれとは手が出せないのである。77年11月19日（犠牲祭の前々日）付の当地の新聞Le Tempsの切り抜きを読み直してみると，中産階級以下の人々（売り手の農・牧民，買い手の労働者を含めて）の嘆息がよく伝わってくる。

たとえばサラー・タハリイ（Salah Tahari）という日雇の男はインタビューに，こう答えている。

"L'Aïd, c'est pour les enfants. Si ce'était pour moi, je m'en serai passé. Le malheur, c'est que beaucoup de gens aisés ne suffisent pas d'une seule bête. Ils en achètent plusieurs uniquement pour 'se montrer'."

（大体犠牲祭というのはガキのためのものよ。俺のためというなら，そんなもんなしですませるな。しゃくに触るのは，金のある連中が1匹羊を買うだけでは満足しないことだ。奴らは何匹も買う。それも，ただ羽振りを聞かせるためだけにだぜ。）

いったいに，ラマダンや犠牲祭の最中は生鮮食料品は高騰し，飲料水，ジュースなどは非常な品不足に陥る。犠牲祭の前後は結婚式が集中する。外国などへ働きに行っている者も帰郷するし，一族再会のまたとないチャンスだ。ついでに結婚式もやってしまおうという心理が働くことは否定できない。物が沢山買いだめされる。流通業者はそれを知ってストックを出ししぶる。値段が騰貴するのは当り前だろう。政府もいろいろ監視・警告を試みているようだが，余り効果は生んでいない。

商品経済の中に呑み込まれてしまった宗教行事という否定的側面を強調しすぎたが，もちろん犠牲祭の楽しさ，にぎやかさは，また格別のものだ。それについては，既に以前の報告書で言及しているから，ここは先を急ぐことにする。

「若者たち」というこの章で，私は観光に象徴される西欧化の波と，イス

ラムの伝統的な価値観とのせめぎあいの中で自己を形成していく彼らをみてきた。この青年たちのイメージはどちらかというと享楽的なものだったかもしれない。それは一つの傾向としてはあたっている。ただし，彼らにも悩みの種がないわけではない。その最たるものが徴兵制度である。

テュニジアでは20から30歳までの青年男子には1カ年の兵役が義務づけられている。これをすませていないと，様々な市民権の制限を甘受しなければならない。たとえば海外へ渡航する自由は，兵役未完了の者には原則としてない。

そうかといって，進んで軍隊のキャンプに1年間身を投じてみようと考える青年は稀だといってよい。手当はただ同然だし，拘束が多すぎる。兵役中に特殊な技能を覚えられる可能性はあまりないし，終えてから何らかの見返りがシャバで待っているわけでもない。単に1年間のブランクが出来るだけだと彼らはみなしている。

だから彼らはなんとかして徴兵から免れようと策をつくす。コネ（piston）を頼る者，兵役不適格者としての診断書を医者から得ようとする者，あるいは一家の支え手（男の子一人の家庭，既に結婚している）としての立場を切り札にする者など，いろいろある。

一昨年の1月の流血事件以来，徴兵制度を梃子とする政府の若い世代に対する管理体制は一段と強化された。兵役適格人口に比し，軍隊の収容能力が半分くらいしかないということで，これまでの徴兵にはお目こぼしが大分あったらしい。例の暴動事件が政府の態度を一変させた。仕事もなく，街にあぶれている無数の若者たちが，ある日，体制にとっていかに危険な存在へと変わりつつあるかを思い知らされたのである。以来，警察や国土防衛隊（Garde Nationale）を中心とする若者狩り（rafle）が，町のカフェで，ホテルのディスコテックで，路上で，バスの中で，執拗に続けられている。身分証明書をもたない者はもちろん，兵役のすんでいない者も，発見されるとすぐ拘束され，警察でとり調べを受ける。きちんとした職場をもたない若者は，そのまま軍隊なり公共土木事業（travaux publiques）の現場 ── 道路，工場建設など ── へ送られる。官庁，病院など公的機関に働いている青年たちは，これほど手荒な扱いを受けないですむが，彼らの場合も選択は二つに限られる。

自発的に兵役に赴くか，あるいは現在の職場に留るかわり，まる1年間給料は月60ディナールを残して，すべて国家に吸い上げられる（この制度は

今年から施行の予定だという）。私の同宿人のブガンニイの場合，月給は夜勤手当も入れて130ディナールになるようだから，半分以上をもっていかれてしまうわけだ。

20代のいつかに避け難く待ち伏せしている，この1年間の兵役は，物質的な面でもさることながら，精神的な意味でチュニジアの若者たちには大きな重荷なのだろう。いつ引っぱられるかわからないという不安。長期的な人生の計画を立てても，途中で頓挫させられてしまう恐れ。外国へ出て働いたり，高等教育を受けたり，異文化に接したりする機会を断念せざるをえないことなど……。

「日本には徴兵の制度はないのだよ，幸にもね（heureusement !）」と私が説明すると，彼らの誰もが，信じられない，といった面持で羨望の念をあらわにする。

チュニジアをめぐる国際環境の困難さからいっても，国内の治安対策の面からみても，徴兵という桎梏から若者たちが近い将来解き放たれる望みは，まず，ほとんどないだろう。

V　途上国の医療を考える

さて，この稿も第5章になって，ようやく私の本業の医療について語るべき段となった。

ジェルバ島で2年間，小児科医として働いて体験した具体的なことどもは，既に，これまでの四つのレポートで，大方，まとめられている。

この章で試みたいのは，より一般的な考察，第三世界が抱える様々な医療・保健上の問題を，先進国側のいわゆる「援助」との関連で見なおしてみることである。

新聞報道などによると，最近のWHOの会議や報告書では，医療援助というものの有効性自体が非常に疑われはじめている。そもそも先進国は途上国に対して医療の面で「協力する」ことなど，できるのだろうか？

この設問は，ちょっと聞きにはナンセンスに響くかもしれない。うなるほど金があり，医療も高度に発達している先進国が，「遅れた」国々を助けられないはずがあろうか，というわけだ。ところが，ことは，それほど単純ではないらしいのである。援助の名で，国際資本を含む先進国グループは，途上諸国が医療基盤の自立に向けるべき，なけなしの財源をまきあげてしまっているのではないか。また途上国の疫学や衛生上の特殊事情が，

ある医療政策の実施を必要とする場合も，それが先進国側，とくに外国籍製薬資本の商業的利益と衝突するとなると，様々な手段で妨害が企てられる。そういった事例が，いくつも明るみに出されてきたのである。

具体的には，現在ＷＨＯなどの国際機関で論争の的になっているテーマは，大きく分けて二つある。

その１は，いわゆる「西欧医学」のアプローチが，途上国の現在抱えている医療・保健上の数々の深刻な問題を解決するのに，どれだけ有効なのか？もし答えが否定的ならば（それが大勢の判断なのだが），その原因はどこにあり，新しい途上国の医療はどう形づくられていくべきなのか？

その２は，国際製薬資本が途上諸国で行っている営利活動は，民衆の健康，福祉増進という意味では否定的な役割を果たすことの方が多くなかったか？　そうだとすれば，この悪しき傾向を是正するために，何がなされねばならないか？

最初のテーマを考えていくには，まず「西欧医学的なアプローチ」というものの内容を，ある程度知る必要がある。西欧医学といっても，そのリーダーシップは，今や完全にアメリカへ移ってしまい，西欧や日本は北米からすさまじい量とスピードで流されてくる医学の情報に遅れないよう努めているのが現状だろう。そのアメリカ医学も原型（prototype）は西欧にもっているのだから，全体をひっくるめて西欧医学(Médecine occidentale)という言葉が使えると思う。

現代の西欧医学とは，一口で言えば，金がかかるということの別名である。それは診断や治療の精巧化ということを，ほとんど自己目的にまで崇拝している医学のことである、これは，ある程度やむをえない趨勢なのかもしれない。大抵の伝染病や栄養失調などが克服されてしまったあと，人間が罹り，それで死ぬ病気というものも複雑化（sophisticate）していく。８万人に一人生まれるかもしれぬ酵素欠損症の子を未然に防ぎ，あるいは生まれた場合，特殊な治療を早期に開始できるよう，妊婦のお腹から羊水を引っぱってきて酵素値を測ったり，８万人全体に対して mass－screening という名の検査を行ったりする。これらの検査を実施するための費用と，しないで一人の不幸な子供をつくってしまった時，社会がその子を一生世話していく費用との比較が，経済効用の立場で論じられる。

心筋梗塞や狭心症の治療として，つまった心冠の血管を，患者自身の足から取ってきた静脈で移しかえてやる技術が確立された。この手術と薬による

従来の治療とを，どう使いわけるかということが，患者の病型，延命率，さらには手術に必要とされる膨大な費用との相関で，厳しい論争をアメリカの医学界に巻きおこす。

西欧医学は，パイオニアとしての輝しい業績の数々で飾られている半面，診断や治療行為そのものが生み出す不可解で困難な病気に悩み，裕福な欧米や日本のような国々にも堪え難いほどの財政的負担をつくりつつある。

旧植民地主義宗主国からの独立ということでスタートを切った第三世界のほとんどの国々は，西欧医学をモデルにして，自国の医学を形成していく以外方法がなかった。ところが，これらの国々には西欧医学をそのまま受け入れるのに必要な人的，あるいは経済的基盤がない。

疫病学（epidemiology）の構造はといえば，下痢，栄養失調，伝染病が主体で，現代の西欧医学のアプローチにはなじまない。独立後20年近くを経，立派な大学病院・研究所をもち，自前の医学部から毎年200人をこえる医者を送り出しているような途上国でさえ，民衆の基本的な医療のニーズが満たされたというには，ほど遠い状態に低迷している。David Marley のPediatic priorities in developing world（発展途上世界における小児医学の優先項目）の仏語版に寄せた，M. Manciaux 教授の序文によると，第三世界では国家の保健・医療予算の80％までを大学病院・研究所が食い，これらの施設は住民全体の5％以下にしか医療のサービスを提供していないのだという。西欧医学への追随がどういう「付け」を後でまわしてくるかを，この数字は端的に示している。

莫大な国費を傾けて養成される医者はというと，先進国でもその傾向は強いが，第三世界では一般に医者ほどスポイルされた人種はないだろう。彼らは民衆志向，辺地志向ではなく，都会で安楽な生活を送ることを望む。チュニジアでも最近，少しずつ状況は変わりつつあるとはいえ，チュニス，スファックスなどの大都会にはチュニジア人医師が集中し，農村・過疎地域の医療は外国人医師の手で担われているというパターンが基本的である。

前掲の Marley の本は，途上国の医師の生態をユーモラスに絵解きしている。（注：都合により割愛）

要するに，農村部で働くと患者が多すぎる（全人口の75％を占める）。病院の設備は貧しい。仕事は押しつぶされるほどある。子供の教育や家族の気晴らしのための施設，手段を欠く。そこで都会へ逃げ出す。

ところが人口の4分の1を占めるだけの都市部には過半数の医者がひしめ

いている。仕事がなく，充分な実入りを得られない。やむをえず飛行機に乗って旧宗主国のある西欧へと脱出する。農村→都会→西欧という，この全体の動きは，「医学上の頭脳流出」と形容されている。その中でも農村から都市への医師の l'exode が最も深刻だという。

西欧医学のもっている技術的な優秀さは否定できないとしても，その第三世界での適応性は疑問視されるにいたったのである。少なくとも，西欧医学一辺倒という，これまでの途上国医学の姿勢は見なおされるべき段階にきている。WHOなどが途上諸国に勧めている医療の体制づくりは，地方分権化（décentralisation）の方向で描かれている。いわく，農村に伝統的に存在する医療の下部構造を国家的な規模の公衆衛生活動の中へ組み入れること。具体的には祈とう師，薬草商人，産婆などに近代的な医学の初歩を教え，彼らを通じて村の中に衛生思想を普及させていく。農村地域の医療の充足，自立のためには，金のかかる医師に代えて，看護夫，「はだしの医者」といった存在を中核に据えるようにする。

この新しい途上国医学のイメージは，"Soins de santé primaires"（基本的な健康の保護）という言葉で要約されている。全体の考え方は，Schumacher著"Small is beautiful"の有名な「中間技術論」の医療版という響きをもっているだろう。実行の面ではまだ沢山の障害を抱えている（既得権の侵害を恐れる医師の反対，村の伝統的な施療者たちの西欧医学に対する抵抗感など）としても，貧乏な国が，それなりに医療・保健活動を発展させていくためには，こうした方向への模索は必然的といえるだろう。

ちなみに，テュニジアにおいても，近年は下部構造，なかんずく無料診療所（dispensaire）の質的充実ということが最重点項目の一つにあげられている。医療機構の中では最も末端に位置するこの診療所は，全国に400～500という数のものが，ばら撒かれている（ジェルバ島には11存在する）。ここで行われる活動は実に多様である。

1) 週1，2回の内科・小児科・産科医などによる巡回診療。
2) 妊産婦検診（助産婦による）。
3) 家族計画の指導と避妊薬の配布。
4) 予防注射の実施。
5) 包帯交換，血清注射（サソリ，破傷風など），その他の応急処置。

現在はまだすべての診療所に看護夫（婦）を常駐させて医療・保健活動に当たらせるには至っていないが，ゆくゆくは病院治療から診療所での啓蒙・

予防・初歩治療活動へと，医療の重心が移されていくものと思われる。

第三世界の医療をめぐって，現在，国際機関で論争の的になっている二つ目のテーマ，「国際製薬資本」について，次に考えてみよう。

79年1月3日付のル・モンドの特集記事"le Tiers－Monde et les medicaments"（第三世界と薬剤）によると，アメリカ，スイス，英国，フランス，西独，日本の6カ国で世界の薬剤輸出市場の71％を独占（1975年）しているという。貧乏な途上国では，自前で製薬工業をもつことが難しいか，ほとんど不可能である。メキシコ，インド，ブラジルのように相当数の薬剤を生産している国々でも，多国籍企業の系列会社が資本やノー・ハウをがっちり握っているのだから，「自前」（autonomie）というには，ほど遠い。発展途上43カ国では，薬品の原末ないし原液を先進国から輸入して，これを製品化（錠剤，カプセルなど）することで甘んじている。他の45カ国では製薬工業と呼んでいいものは全く存在しない……。

貧しい途上国が保健・医療に割く，なけなしの予算のうち半分が薬代に食われてしまう（先進国の場合，この割合は10～20％という）。 1974年だけで途上諸国は全体として20億ドルの薬剤を輸入している。これは同年に世界中で輸出された薬の3分の1に相当する。第三世界の薬剤輸入による負債総額は74年までに15億ドルにのぼっている。赤字は年々増えていく一方だ。

大抵の薬は，先進国と同じか，それよりも，むしろ高い値段で途上国では売られている。患者の収入・購買力が，彼我では5倍，10倍も違うのだが，薬価は為替レートに並行するだけだ。従って，薬は，保険で給付されるのでなければ，途上国の普通の人々には高嶺の花となる。労働者の平均賃金が1カ月ようやく70～80ディナールのチュニジアで，半合成ペニシリン，アンピシリンは1本（1g）1ディナールしている。1日3本，10日間注射すると，30ディナール。保険証で入院治療を受けられる場合を除き，貧乏人には，この類の薬は手が届かない。

国際製薬資本に対する途上国側の批判は，以上述べたようなことどもを背景にもっている。これらの大会社には，途上国を単なる市場としてしか見なしていないところがないか。効果が疑わしかったり，他にもっと廉価で同じくらいよく効く薬もあるのに，新薬というだけで，どっと第三世界の市場にばら撒かれる。国の保健財政，個人の購買力はいよいよ逼迫する。途上国側が，一般の外来，病院治療に必要な基本的薬剤200余りを選択し，それ以

外のものの輸入を制限しようとすると，製薬資本側は様々の手段を用いて，その実現を図もうとする。

78年6月5日付の Le Matin de Paris 紙には，スイスの外国籍企業6社（うち私の知るだけでも Nestlé，Ciba－Geigy，Sondoz という医薬品，乳製品のメーカーが三つ含まれる）が，国連の経済社会委員会（ECOSOC）に自分の利権代表を送りこんで，海外での販売活動を規制する決議などが同委員会でなされることのないよう陰謀を企んだ，といったニュースが報道されている。

これらの多国籍企業が，途上国で，どんなに，我がもの顔でビジネスをしているかを示すために，私はネッスル社をちょっと例にとりたい。私の調べた限りでも，この世界一の乳業メーカーは，テュニジア国内で5指にあまるほどのベビー用粉ミルクを売っている。人乳化（humanisé）をうたい文句にしている製品，脂肪分を半分に落として，生後4カ月までの赤ん坊に勧めている製品など，いろいろあるが，要するに，それらの間でとくに甲乙をつけるべき理由はない。なぜ一つのミルクを売るだけでは満足できないのか？栄養学的，医学的な見地？　冗談ではない。その見地からすれば，ネッスルがふりまいているのは混乱と害悪だけである。早くいえば，市場を独占したいという衝動が，すべてに優先しているのである。ことがタバコやウイスキーに関るることならば，いくつの製品が出まわったところで大した問題にはなるまい。どれを取るかは，本人の好みということで済むからだ。けれども，ことが赤ん坊のミルクとなると，途上国の薬局の戸棚をのぞいて，20にも達する製品がずらっと並んでいるのを発見することは，驚きを通りこして，グロテスクである。

私が2年前テュニジアにむけて日本をたつ頃は，ベビー用のミルクというものは5，6種類しかなかった。母親の教育程度が，この国よりずっと進んでいる日本でさえ，これくらいの数に制限されている。婦人の文盲率が9割に近いテュニジアの農村部で，20のミルクを氾濫させることが賢明かどうかは，すぐお察しいただけよう。母乳栄養に対する意欲の低下，ミルクを何種類も買い替えて飽き足らない心理――いずれも粉ミルクの大盤振舞いと無関係ではあるまい。しかも人工栄養児に高い確率で発生する慢性の下痢症に対して，私たちは有効な手だてを打てないままでいる。

アメリカの大学生たちが Nestlé 社を，途上国の子供に「死を売る商人」だ，として弾劾のデモをしているのを，去年 Times紙で読んだことがある。

この会社が，今紹介したような，あくどい商売を発展途上諸国で続けている限り，学生たちの批判をかわすことは難しいだろう。

多国籍企業を眼の仇にするようなことばかり書いてきたが，一方では，マラリア，フィラリア症，住血吸虫症など，世界中で何億人という人々が苦しんでいる病気を征服するためには，優秀な研究施設とスタッフをもつ，これらの企業の協力が不可欠なのだ。

問題は結局，国際製薬資本，乳業資本といったものに対して，受け入れ側の途上国政府が自立的な態度で臨むという以外に，解決されないのだろう。自立的とは，自国の保健・公衆衛生活動の必要に応じて薬品，乳製品類の輸入，管理を行うということだ。市場管理だけに任された，現在のような無政府的な販売合戦は，途上国の蓄えの貧しさからいっても，薬物，ミルクといった製品の特殊な性質上からいっても，許されないと思う。

これまで書いてきたことで，この章のはじめに提出された根本的な疑問，「途上国を医療援助することが，先進国にとって可能か？」の意味するところが，ある程度明らかにされただろう。援助は潜在的には可能かもしれないが，これまでのところは，その名を借りた経済収奪に終わることが多かったこと，それは，途上国援助というものが，たとえ医療に関する場合でも，先進国側の利益導入の視点で常に貫かれてしまっていること，のためといえるだろう。

それでは，新しい医療援助の方向は，どこに見出されるべきなのか。まず，最尖端の医療技術をもっていってやることが，一番途上国のためになるという固定観念を捨てることが出発点かと思う。

たとえば，途上国のある地域で毎年200人の子供がリウマチ熱にかかるとする。急性期の治療や長期的な予防処置が満足に行われないため，このうちの半分100人が，程度の差はあれ，心臓弁膜症まで進むとする。100人のうち，さらに重症の4，5人が最終的には首都の大学病院へ連れてこられ，僧帽弁の交連切開術とか，弁そのものの置換術を受ける。経済的な見地からいって，この4，5回の大手術にかかる費用は，200人の子供全員に月1回ずつ Benzathin Peniciline の注射をしてやるよりも，ずっと高くつくと考えられる。しかも，この比較的手間のかからない溶連菌感染予防策が90人以上の患者を弁膜症から救い，手術そのものの必要性をゼロ近くまで引き下げてしまう。これまでの先進国の医療援助，とりわけ日本のそれは，溶連菌感染→リウマチ熱→弁膜症→手術という過程の終わりの方だけをいじくろ

うとする傾向が強くなかったろうか？　これは，もちろん一つの喩えとして話しているだけである。

従来の医療援助というものも，どちらかというと，日本の大学病院の医局を丸抱えにして，心臓外科，脳外科など技術的に高度のものを途上国へ移植させるといった試みが中心的だったと思う。テ＝ニジアへくるまでは，私自身，こうしたいき方に疑問を抱くことはなかった。けれども，2年のうちに得た個人的な体験や活字を通じての知識は，私の判断を改めさせた。

せっかく日本の金と技術と人を注ぎ込んで立派な専門病院をつくっても，この施設の恩恵を蒙ることのできる途上国の病人は，馬鹿馬鹿しくなるほど少ないのである。保健・医療関係の国家歳出の80％を食いつぶす大学病院が，全患者のうち5％以下にしかサービスを与えていないという前出の数字は，この間の事情を端的に物語る。

先進国顔負けの超近代的病院が首都に置かれている一方で，都市のスラムや農村では，下痢，栄養失調，予防可能な感染症（はしか，百日咳など）のために，乳幼児が沢山死んでいく。二つの対象的な事態が，お互に知らん顔で進行していく様は，見事というべきだろう。

忘れてならないことは他にもある。こうした大じかけで高度な技術を途上国にもち込むことは，単に経済的な効率の面で疑わしいだけではない。この技術を一定のレベルで機能させ続けることは非常にむずかしいのである。たとえば，私は小児科医としてジェルバ島に来て，新生児治療というものを始めてみた。それほど大げさなものでなく，哺育器を1台日本政府に買ってもらって，未熟児，新生児黄疸，感染症，肺硝子膜症，低血糖症といった，ありふれた問題を手がけようとしただけだ。人口8万人，病院の分娩件数だけで年間1,500，家庭分娩を含めると5～7,000の出産はあると想像されるジェルバで，これくらいの試みは，そう法外なものではないと思う。けれども，実現したことといえば，小児科医と哺育器だけのある新生児医療だった。病児をケアしてくれる専任の看護婦がいない，新生児室がない，衛生・感染予防の策が満足に取れない，の「ないない」づくしで，自己嫌悪を覚えずに，この仕事が出来たことは稀だった。個々には，交換輸血が成功したベビー，自分自身の糞と尿にまみれながら，体重1,100gから2,000gまで育って無事退院していった未熟児など，報われる思いをした場合もあるが，通算すると私は10人の新生児を「人口哺育箱」に入れて，3人生きたまま取り出せたかどうか自信がない。去年4，5人のベビーがたて続けに死んだ折，あ

る看護夫が哺育器を指して"Ça c'est un véritable porte-malheur!"（こいつはまったくの厄病箱だ！）と評したのには，頭を隠す穴でも探したい思いだった。たかが哺育器1台でも，それを機能させるだけのベースがない医療施設にもってくれば，英語の諺に言う，「白い象」になってしまうのだ。いわんや，心臓外科の複雑な設備，機材などを途上国に提供して，何年かの後，日本人の医療チームが引きあげた後を想像すると，心細くなるのは当たり前だろう。

医療協力といったことが国際的にやかましくいわれ出して，まだ15年くらいのものなのだろうが，膨大な金をつぎ込んだ割には見るべき成果はあげていない。ことにマラリア，住血吸虫症，フィラリア症など，第三世界の住民を億の単位でおびやかす病気に対する戦いでは，人類の側が，この10年でますます劣勢に立たされている。ル・モンド78年9月6～8日号に掲載されたLe désert médical du tiers-monde，-La léthargie de l'occident（第三世界の医療砂漠，西欧（医学）の麻痺）に，この状況は詳しく述べられている。

こうした風土病，流行病に対するキャンペーンも含め，今，第三世界の諸国が医療の面で突き当たっている一番本質的な問題は，栄養，衛生状態の改善ということに尽きるのだろう。ただし，衛生の概念には文盲克服，衛生教育といった，幅広いテーマも入ってくる。栄養といい，衛生といい，発展途上諸国におけるそれらの憂うべき現状は，もっと一般的には貧困のもたらす問題だ。貧困が一掃されるまでは，栄養や衛生は，今のまま，なおざりにされて置いてよいか。そうではあるまい。ごく限られた保健関係の予算でも，衛生教育や栄養指導について，やれることは沢山あるはずだ。

西欧をモデルにした産業国家を一日も早く築こうといった志向は，第三世界の政治的指導者たちの頭をまだ強く支配している。「シ■ー・ウインドー」的な医療施設をもちたいという彼らの考え方の基礎にあるのも，これと同じ志向だろう。けれども，そのゆき方が全体としては失敗であったことを既にみた。

中国の経験は，二つの意味で途上国医療の改善に取りくむ者に教訓的だろう。一つには，「はだしの医者」で象徴される地域医療の自主的な充足の試みが，第三世界の国々やWHOなどの国際機関に大きなインスピレーシ■ンを与えたこと。二つには中国自身が途上国で展開している医療協力が相当の実りをあげていることである。

「はだしの医者をすべての第三世界に」（Des médecins aux pieds nus pour tout le tiers－monde）は，WHOの新しいスローガンとなりつつあるようだ。それは具体的には，短期間に少ない経費で養成できる看護夫（婦），ケース・ワーカーや農村に伝統的に存在する施療者グループを基礎的な医療の充実のために活用すること。この問題は西欧医学のアプローチとの比較で既に触れた。

第二点の中国の医療協力についていうと，私は，人の話をまた聞きにしている程度で，詳しい援助の実体は知らない。テュニジアでは，ジャンドゥーバ（Jandouba），ケイロワン（Kairouan）などの町に中国人の医療団が入って活動している。

今，北イエメンのタイズ（Taiz）で，国連のボランティアとして働いている友人の栗田君も，急性肝炎に罹った折，中国人の経営する病院で入院治療を受けたそうである。このように何気なしに耳にした情報にもとづいていうと，彼らのやり方は，

1) 医師，パラメディカルのスタッフを含め，10～20人の大きな単位で送ること。
2) 従って，一つの地域の医療を包括的に担う姿勢であること。
3) 2年ぐらいの任期でスタッフを交代させ，長期にわたる援助をめざしていること。
4) 寄宿舎的な施設に集団で暮していること。

などに要約される。

これもまた伝聞でいっているだけだが，中国人医療団の活動は全体として非常に高く評価されているようである。鍼治療など含め彼らは西欧医学ばかりでなく，中国の伝統的な医学の遺産も使えるものはどんどん使っているらしい。彼ら自身「はだしの医者」で，第三世界に先鞭をつけたくらいだから，農村医療の組織化ということについては，独自の方法論ももっているに違いない。

医師の国家管理が可能な中国のような国と，日本とでは，同日の比較はむずかしいが，底辺の，最も医療を必要としている人々に対する貢献ということでは，より少ない金しか費やしていない中国の方が，私たち日本人よりも遙かに上手なのである。

国内の無医村対策もまだ完全というにはほど遠い日本で，医師の組織的な途上国への派遣というのは夢物語だろう。けれども最近の新聞や医学雑誌を

読んでいると，フランスや英国では，この先10年くらいのうちには，医師の失業問題が現実化してくる恐れのあることなどが報道されている。日本でも医科大学の急造で，将来は同じような悩みを抱えることになるだろう。少なくとも，医師だけが甘い汁を吸えた時代は，そろそろ終わりつつある。余った医者を第三世界に追っ払うというと聞こえが悪いが，日本の国際医療協力の大きなヴィジョンとの重ね合わせの中で，医療労働者が海外で働ける機会や条件を，もう少し広げていってもよいのではないか。

医学そのものについていうと，植民地経営の体験が短く，地域的にも限られていた日本では，西欧諸国に比べて熱帯医学，発展途上国の医療といったものに対して関心が低い。これが英，仏などの旧宗主国の場合だと，植民地独立後も経済的，文化的に強い影響力をとどめているだけあって，第三世界の医療の問題に対する関わりも深い。そこには利己的な目的も働いているのだろうが，熱帯医学というと，自国の旅行者が熱帯病をもらって帰国したときだけ大騒ぎする日本の医学界や一般世論とは，対応の仕方がまるで違うように思う。

たとえばフランスの小児科学の教科書では「途上国の小児医学」といった一章が特別に設けられている。熱帯医学の本を繙くと，第三世界特有の社会・経済的な諸条件が国連の資料などを駆使して詳説されている。病気や保健衛生上の問題の背後にある因子を読者に理解させようとする姿勢がはっきりしている。7年間医学部にいて私は，Tropical medicine というものについて，1時間の講義もうけることなく過ごした。公衆衛生学の教科書にも，こうした地域に対する言及が1ページでもなされていた記憶はない。小児科関係の医学雑誌も，アメリカ医学の焼直しと，日本の小児に固有の問題にきゅうきゅうとしている感じである。こうした傾向は，長期的には改めていかなければならないだろう。

新しい途上国医学の方向といったテーマで長々と考えているうちに，私は焦点を失ってしまったようだ。それほど簡単に，いい解決策が浮かぶものなら，今までこの領域でがんばってきた人々は，もっと大きな成果をあげていたはずだ。経験から離れて，よい知恵が生まれるわけがない。私の2年間の浅い途上国体験では，ここまで筆をすすめてくるのがやっとだ。従って，「途上国の医療を考える」と題するこの章は，ひとまず，ここで打ち切ることにする。

Ⅵ　おわりに

半分は野次馬根性，残り半分は地につかないヒューマニズムに促されて，北アフリカの小さな国テュニジアに2年間滞すこととなった。ともかく元気なうちにこの仕事を終えることが出来たことを幸いに思っている。小児科医としては様々な障害にぶつかり，へまをしながらも，地域の人々に一応は納得してもらえる活動をしたといえるだろう。病院の仲間たちとも実に気持ちよくつきあえた。「衛生学的にはオレはこういうことには反対なのだがね」と断わりをしつつも，彼らと共に一つ皿から手づかみでシャクシューカを食い，一つの杯でテュニジア茶をまわしのみした。「日本人の医者」という彼らにとっては，パンダとも火星から降ってきた珍生物ともいえる私が，いつかテュニジア人よりテュニジア人らしいという世辞を呈されるまでになった。これは一つには私の人格がふにゃふにゃで，言葉の悪い意味で融通無碍なためか。今，日本ではやっているモラトリアム人間というのは，私のような者を指すのかもしれない。それでも大和魂だけで洗練されて，最後は腹を切って死ぬなどという生き方よりは，まだしもと思っている。

医者として私は，日本では既に不可能といえるような見聞もしたが，そうした個々の体験は，さほど重要とは，今のところみえない。こういう発展途上国の一つの地域で小児科医として働くことの本質的なメリットは，医療や衛生に関する政策実行の「末端の責任者」（cadres locaux）として振舞えるということである。日本ならば，小児科医は小児科の患者だけをみて，他に多くの問題をおもんばかることはない。この土地では，むろん病児をなおすことは私たちに与えられた一番大切な役目だが，それにとどまらずジェルバという比較的独立した行政単位における医療・衛生のレベルを向上させるという全体の仕事に自分が参画しているということを生々しく感じるのだ。テュニジアの小児科医，保健省関係者をまじえた全国会議に招かれれば，ジェルバにおける小児医療の責任者として，そこでつき当たっている問題について紹介すること，改善策を述べること，を求められる。ジェルバ島市庁が昨年暮主催した，「島民の健康を考える懇談会」でも，責任の一端をもつ者として意見を徴される。私の貧弱なフランス語の表現力でも，参加者はそれなりに耳を傾け，よいアイデアはとりあげようという姿勢を常にもってくれる。こういう点で，私が受けた刺戟というのは，容易に消しがたい跡を残すだろう。

さて，日本に帰って，どんなふうに生活をはじめていくのか。2，3年は

頭の中味をつめかえることにいそしんだ方がよいのかもしれない。その後，また外へ出たいという気が起きるだろうか。私の隣人にドイツ人の家族がいる。且那はホテル学校の校長をしている。3，4度話しただけの浅い付き合いだったが，この家族は見ていて実に感じがよい。ヨーロッパの技術協力者（coopérant）は一体に，チュニジアの普通の人たちと交わることを好まない。ところが，このドイツ人は，少なくとも子供の教育に関しては完全な放任主義だ。3人の子供のうち一番下の4，5歳の男の子は 1日中裸足でアラブのガキどもと遊びまわっている。私などを見かけると，石は投げる，「アスマ（おい！）」とアラビア語で呼びかけざま唾をひっかけるといった，とんでもない小僧だ。右隣の薬局店主ジラド氏は，フランス人の奥さんとの間に，やはり3児をもうけているが，この子たちは近所の汚ないガキどもとは遊ばせてもらえない。いつも門の鉄格子ごしに，通りの子供たちの喧嘩や立ちまわりをおどおどと眺めている。こういう二つの対象的な光景を眼のあたりにすると，子供の健全な発達を促すのは，きれいなオベベで着飾ることではなく，同輩にもまれることなのだ，ということがよくわかる。

このドイツ人氏は，アフガニスタン，セイロンなどで足かけ10年くらいホテル学校の教師として働いていたのだそうだ。チュニジアにも既に3年近くの滞在となり，この夏，任期を終えて帰国の予定だという。ある日私が，ドイツに戻って，それからどうされるのですか，と尋ねると，「2，3カ月休んで，また海外へ出ます。今度はまちがいなくブラック・アフリカの国でしょうね」とすずしい眼で答えた。これだけの長い外地生活をしていると，日本人なら，へんな祖国コンプレックスが身についてしまうところだろうが，この人には，そういう気負いや堅苦しさが全くない。何かサラリと自分の人生上の境遇を受け入れている感じである。それが本当に素晴らしいと思った。

「人間至る所に青山あり」という禅の言葉は，私の理想とする境地だが，このドイツ人氏は，それに近い心持ちで生きているようにみえる。国際協力も，こういう人がやるなら本物といえるだろう。私もいつか，彼のレベルまで到達したいものだ。

このレポートもそろそろおしまいにすべき時がきたようだ。2年間は短かったが，何事かを学ぶのに足りないほどの時間ではなかった。貧乏は貧乏なりに，日々の生活を明るくしていく工夫を怠らないチュニジア人。私は，まず，彼らに大きな感謝と友愛の念を捧げる。次にジェルバで2年間苦楽を共にした西村さんと山口さんの親切にも，ありがとうをいいたい。

協力隊の仲間たち，駐在員・調整員，日本大使館の方々からも，いろいろなお蔭を蒙った。本当にありがとうございました。それでは御気嬢よう。皆様の一層の御活躍を祈って。

〔付〕 ジャンドゥーバ病院訪問記

4月10日，田村テュニジア駐在日本大使のお口添えで，ジャンドゥーバ地方病院（Hôpital Régional de Jendouba）に中国人医療団を訪れる機会を得た。

ジャンドゥーバは，テュニジア北部に展開する穀倉地帯が，アルジェリア国境と接する部分に位置している。人口15,000の県庁所在地（chef－lieu de gouvernorat）で，県全体の人口は30万を数える。県民の8，9割は，農業とその関連部門によって暮しを立てている。ジャンドゥーバ自体も，この地域の穀物集散地として名高い。

ジャンドゥーバ県の医療のヒエラルキーは，以下の通りである。

名　　称	数
地方病院（Hôpital Régional）	1
地域病院（Hôpital de circonscription）（Bou Salem，Aïn Drahamなど）	4
無料診療所（Dispensaires）	28
母子保健センター（Centre de PMI）	5

ジャンドゥーバ地方病院は総ベッド数162，医師数15名。エジプト人の歯科医，ブルガリア人の結核専門医（phtisiologue）の各1名ずつを除く13名は，すべて中国人医師である。内訳は，外科4，一般内科2，小児科1，産婦人科1，眼科1，耳鼻科1，鍼1，放射線1，麻酔1。これに生化学検査技師1，機械担当看護夫（infirmier instrumentiste）1も加え，中国人医療団は計15名となる。その他通訳1，調理師1の存在も忘れてはならない。

中国のジャンドゥーバ病院への医療協力は1973年にスタートを切った。2年毎にスタッフを総入れ替えするので，現在働いている人たちは3代目とい

うことになる。

彼らの生活の条件はというと，全員が単身扶任，宿舎は病院が提供する。同一の建物内に8つのapartmentを取っているというから二人ずつが共同で暮していることになるのだろう。テュニジア側の負担はこれだけで，その他の一切の費用は中国側がもつという。ただし，機材類に関しては，鍼治療具など特殊なものを除き，中国から入れているものはないとのことである。

以上のように，この病院は医師補充の面では，中国側に完全に依存していることになる。

病院長ベシール・ナフリイ（Béchir Nakhli）氏との会見や，見学中に付き添ってくれた監督長（Serveillant général）の話からも明らかだが，この医療協力に対してテュニジア側は外交辞令ぬきで感謝している。

ジャンドゥーバ市内には歯科医一人を除き，テュニジア人の開業医は全然いないという事実からも，中国人医療団がこの地域でどれほど重きをなしているかわかるだろう。内科の外来は毎日200名，小児科のそれは80名前後というから，両科の医師総数3からみて，ほとんど限界に近い仕事を強いられていることになる。

院長から病院の概略について説明を受けた後，私は通訳の湯健（Tang Tsieu）氏の案内で病院内を見てまわった。「もと兵舎（caserne）だった建物で，病棟として使うには不便が多いのですが……」と，彼は断わっていた。しかし内部は非常に清潔で，看護夫(婦)や助手たちがきびきびと立ち働いている。スタッフの面でも，ジェルバの病院よりはずっと恵まれている印象を受けた。各科をまわって中国人の医師たちと挨拶を交わす。事前に日本人医師の訪問がある旨伝えられてあったらしく，皆が私を暖かく迎えてくれた。外科の医長が50代にみえた他は，30から40代のはじめにかけた人が多い。驚いたことには，湯健氏を除き，彼らのほとんどすべてが，アラビア語もフランス語も片言程度以上には喋れないのである。医学上の話も交わしたかったが，そういう事情で断念せざるをえない。

ただし彼らの医療内容は相当高度のようである。例を外科にとると，体外循環を用いないですむ心臓手術，即ち僧帽弁の交連切開術まで彼らは手がけている。腹腔鏡による卵管結紮（不妊手術）も盛んに行われている。

病院の建物からは少し離れた場所に置かれている鍼治療所，一般内科診療所，母子保健センターにも連れていかれたが，どこも大変な数の患者である。アラビア語もフランス語もほとんど理解しない医者が，どうやって，これだ

けの患者をこなすのか。診察の場にゆっくり立ち会っている暇はなかったが，介助につく看護夫（婦）と中国人医師は簡単なやりとりをフランス語でしているようである。私の経験からいっても，病気に関係する50～100程度の単語を覚えれば，日常の診療活動には大きな支障をきたさない。

その代わり，医師を煩わさなくてもすむことは，テュニジア人のスタッフがどんどんやってしまうようである（小児科の場合，体重・身長・頭囲の計測，栄養指導，ワクチンの接種時期に関する説明など）。

中国側の援助の姿勢に応えるという意味も相当あってのことだろうが，テュニジア側は現在，5階建て，ベッド数400の総合病院を町のはずれに建設中である。この工事は，サウジアラビアの資金援助によっているとのことである。骨格はほとんど出来上がり，1年先には病院の施設はこちらに移転する予定だという。旧兵舎を利用してつくられた現在の病院でさえ，私の働いたジェルバ病院に比べればずっとましなのである。テュニジア＝中国間の医療協力の実績といったものを見せつけられる思いである。

新しい母子保健センターの工事もほとんど完成し，この1カ月くらいのうちに引っ越すらしい。正面の大きなロビーに待合室が設けられ，それをとり囲んで職員の控室も含む20余りの部屋が機能的に割りふりされている。内部の設備もすこぶるよい。わずか3部屋のＰＭＩで，妊産婦検診，小児科外来，家族計画，予防接種などをこなしているジェルバの現状が，うそのようだ。

見学の後，湯健氏に昼食に招待され，中国人医師の住むアパートへ赴く。彼の apartment は３ＤＫ。フィリップスの小さな蓄音機があるくらいで，生活はごく質素である。湯健さんは上海の出身。故国には奥さんと二人の幼児を残してきている。机の上には家族の小さな白黒写真が飾ってある。

「ずいぶん会いたいでしょう？（Votre famille vous manque beaucoup, n´est ce pas？」と尋ねると，

「それはね。でも，もう半年で終わりですから」と淡々と答える。

昼食は本格的な中国料理。6品くらい出されたか。もちろん味の点も申し分ない。材料の多く（支那竹，茸，海藻など）は中国から直接送ってもらうのだそうである。

食事中，経済顧問といった人も湯健氏のアパートを訪れ，4人くらいでなごやかに話をする。中国人と日本人が北アフリカの地で同文同種としての仲を確かめあうというのは，奇遇というよりは，時代の流れというべきか。旧

字体はこう，新字体はこう，といった説明も，少ししてくれた。私が自分の名前を漢字で書くと，彼らがホウと感に堪えたような顔をするのも可笑しい。

わずか3時間ほどの訪問。それに医師たちと突っこんだ話が出来たわけでもない。それでも私はこういう機会に恵まれたことを感謝している。事前に予想していたように，ジャンドゥーバでの中国人医療団の活動は立派なものである。仕事熱心なこと，与えられた条件下でよく適応し，最大限の効果を引き出そうとする姿勢などは，短時間の観察でも強く印象づけられた。どちらかというと仕事を組織化する能力とか，奉仕的な精神に欠けるうらみのあるテュニジア人にとって，中国人から学ぶことは多いだろう。

彼らについて，もし私が何か疑問めいたものを覚えるとすれば，それは中国式の医療協力の中味に対してではない。資本主義の国にはとうてい真似のできない活躍を彼らはしている。そのことは素晴らしいと思うし，讃辞を惜しまない。中国の協力専門家たちの日常の生活についてとなると，私にはよくわからなくなる。仕事場以外では，彼らは現地の人々と私的に交流することがほとんどないらしい。交流を禁じられているのか，それとも自主的に控えているのか。

せっかく2年間テュニジアで働いても，フランス語もアラビア語も身につかない。友人もつくれない。料理から着物，言葉に至るまでセットになった「ミニ中国人社会」を，故国からそのまま途上国に運んできて，その境内での生活をかたくなまでに守ろうとする。それがいい，悪い，といった価値判断を私は避けたい。中国社会主義のイデオロギーを守ろうとすることだけが，彼らのいくらか自閉的な生活を規定していると言い切ることはできないだろう。

赤い中国以前に，たとえば華僑たちは，過去何百年もの間，同じようなmodus vivendi（生活処方）を維持してきたのではないか。だから，ことは漢民族が2～3,000年かかってつくりあげた内面的な価値の体系に，より深く根づいているのだろう。

それにしても，私には，湯健さんのようなおだやかで親切な中国人の背後に隠されている，本当の希求といったものが見抜けない。テュニジアならば，テュニジアという国に協力に来て何年か働いたのち，彼らは個人の精神のレベルでは，どんな収穫を得て帰国の途につくのか。

医者の場合は，多くの患者を治療することで相応の感謝をされるだろう。

その喜びが小さくないことは同業者としてよく理解できる。ただ，それだけの付き合いで終わらせてしまうには惜しいほど，豊富で異質な文化をチュニジアの社会は内包している。そういうものに接していくルートが彼らにも，もう少し開けていたらなあ，といった，幾分おせっかいな願望を私は抱いてしまう。

とまれ私は，彼ら中国人たちの献身的な努力に脱帽して，この印象記を終わりたい。

日本に帰って考えること

本田　徹

前出の報告書は，私が任地のジェルバ島を離れる直前の79年3月から4月にかけて書きました。私は小児科医としてこの地を踏んだのですが，2年というわずかな時の間にも，医療はもちろんのこと，「テュニジア的な生」の多面的な姿に触れる幸運を得ました。現代テュニジア人の生活を一言で括れば混淆主義（syncretism）ということになるのでしょうが，それはイスラムという背骨が一本通ったシンクレティズムなのでした。

彼の地の若い友人たちとブドウ酒やテュニジア茶をくみかわしながら話したこと，フランス語の訓練のつもりで読みはじめたル・モンド，「若いアフリカ」（Jeune Afrique），ル・タン（Le Temps）などの新聞・雑誌類が，現代テュニジア社会をめぐる様々の問題に対して私の眼を開いてくれました。そんな体験は私に，テュニジア人を単なる異邦人というより「現代史の中でめぐりあった同時代人」といった，共感的（sympathetic）な視点で捉えるようにさせました。彼らの弱点も，彼らの民族的な誇りも，等しく私には他人事と思われなくなったのです。

この報告書をまとめた時点からすでに1年近くがたち，現実の世界はテュニジアも巻き込んで大きく揺れ動いています。エジプトをボイコットした後アラブ連盟の本部はテュニスに移され，その事務局長にテュニジアを代表する文化人シエドリィ・クリイビイ氏が就いたこと，去年11月の国民議会選挙においてテュニジア独立後はじめて複数候補が認められ，国民の政治的選択の幅が多少は広げられたこと，イラン革命の影響を受けたイスラム正統主義の運動が，大衆的な支持を集めて反政府の一大勢力に育とうとしていること，最近のガフサへのゲリラ襲撃事件によって，隣国リビアとの関係が一層険悪になったことなど，枚挙すれば，きりがありません。こうしたいろいろな社会変動を陽気で誠実なテュニジアの友人たちはどんなふうに受けとめているのか，私は無関心ではいられないのです。

そんなわけで，本報告書中，とくに第2章「テュニジアと国際社会」，第3

章「国内問題」などについては補足，追記が必要なのですが，それはまた別の機会に譲ることにします。1年前における判断は，それなりに現在の事実関係を照し出す働きもあると信じるからです。

医療に関して言いますと，たとえば私が「基本的な健康の保護」と訳していた Soins de santé primaires が，日本においてもプライマリー・ケア，第一線医療といった言葉で定着しはじめていることを，帰国後に知りました。現在私が勤務している佐久病院の若月俊一先生の話などを伺うと，プライマリー・ケアの確立は，途上国・先進国を問わず全世界の医療にとって「明日の必然」となったようです。プライマリー・ケアの理論的な定義は，78年のWHO主催アルマ・アータ会議における宣言によってもある程度明らかですが，それをどう実践し，肉づけしてゆくかは，今後の私たち医療従事者の課題なのです。

最後に，私はキリスト者ではありませんが，テュニジアが私に教えてくれた最大のものをそっくり，そして誰よりも雄弁に語ってくれている内村鑑三の次の一節を引いて，この文章を終りたいと思います。

「余はある真理は知ることができるという余自身への信仰と，余はすべての真理を知ることができないという余自身への不信仰とが，真の基督教的寛大の基礎であり，あらゆる善意とすべての人間に対する平和的関係との源泉であるのである」。

本田隊員の報告書を読んで

小　原　　博

本田医師の報告文はこれから協力隊員として海外で医療活動に従事しようとする人たちにはもちろん，ボランティア活動に関心のある者すべてに一読してもらいたいくらい優れた内容である。チュニジア共和国の紹介から入り，国際的観点からみた今日のチュニジアの立場，国内問題，若者たちの姿へと文章をすすめている。正しい現状把握と鋭い批判は読む者にチュニジアの真の姿を伝え，興味をもたせ，今後真剣に考えていかなければならない様々な問題を提起する。この文章から彼の2年間の生活がいかに充実したものであり，協力隊活動の精神を貫き通したものであるかがうかがわれる。

チュニジアはアフリカの一部ではあるが，日本人がもつ一般のアフリカのイメージとはかなり異なる。気候は温暖で，ヨーロッパから多くの観光客が訪れる美しい国である。古代ローマ時代からカルタゴを中心に文明が栄え，現在でも各地にその遺跡を残している。白壁とブルーの窓枠，アラブ人の文化，アラブ人の国だ。近年アラブ諸国に対する日本人の関心は石油を通じて少しずつ高まってはいるが，やはり認識の乏しい国の一つと言ってもよいだろう。チュニジアを紹介する本は日本でも幾つか手に入れることはできるが，チュニジアでの2年間のボランティア活動を通してとらえた医師の立場からみたチュニジアの姿は，本屋では買うことのできない貴重な内容を数多く含んでおり，しかも政治，経済，文化にわたるまで内容が及んでいるので，単なる報告文ではなく，チュニジアを紹介する文章としても優れたものであろう。

チュニジアの医療は他のアフリカ諸国に比べれば恵まれた状態にあると言えるだろう。他の分野でもそうだが，医療に関しては決して後進国ではなく，中進国あるいはそれ以上というのが適当かもしれない。けれどもチュニジアに対する医療援助にも様々な問題がある。本田医師はチュニジアでの経験をもとに途上国一般の医療援助について鋭い批判を述べている。後半の医療の項の中で強く指摘しているように西欧医学のアプローチが発展途上国の医療にどれだけ効果的に貢献しているか考え直してみる必要がある。今日の西欧医学は高度な

医療技術，高価な医療器具へと向かっている。それはたいへんすばらしいことである。しかし，それは裏を返せば金がかかるということになるだろう。多くの発展途上国では栄養不良，伝染病，風土病に悩んでいる。ひじょうに貧しい。このような国々に対して最も効果的な医療援助は最新の西欧医学をそのままその国へ持って行くことではない。同じだけ金を使うにしてももっと有効な援助の方法があるであろう。これから発展途上国に対する医療援助はどんどん進められていかなければならない。しかし，結局一番大切なものは，金でも高価な設備を与えることでもなく，人を送ることにあると思う。熱意と意欲に燃えた人が途上国へ行って医療に従事する。これほどすばらしく有効な援助の仕方があるだろうか。熱意，意欲，ボランティア精神というと最もふさわしいのは協力隊員かもしれない。多くの隊員が医療協力の先頭に立って第一線で活躍してもらいたい。

私は今年の1月の中旬，4日間程チュニジアに滞在して各地を見てまわった。ジェルバ島にも2日間滞在し，各所を見学した。青い海と空，一面ヤシの木で被われた平坦な平和な島である。本田医師が仕事をしていたという病院も見学した。小じんまりした清潔な感じのする病院である。院長をはじめ医師の方々が暖く迎えてくれた。本田医師がジェルバを去ってから1年経ったそうだが，ジェルバの病院の人たちは本田医師の話をもちだすと皆とても懐しがっているようだった。本田医師の現地での評判はひじょうによいようだった。2年間チュニジアの医療のために尽くした日本人ということで尊敬の気持ちさえ抱いているように思えた。「日本人の医者は優秀だ。」"M'edecin Japonais est excellent." 「日本の医療器具はすばらしい。」"Les appareils Japonais sont très bons." という声がきかれた。「ジェルバにもう一度日本人の医師が来てほしい。」"Nous voulons le médecin Japonais qui va venir à Djerba." と願っていた。このような言葉を耳にすることは外国を訪れた日本人にとって実に嬉しいものであるが，こういう言葉をきくことができたのも本田医師の熱意，ひたむきなボランティア精神が，2年間の診療活動を通じて土地の人にわかってもらえたためだろう。協力隊員志願者の中で医師はきわめて少い。しかし，医療協力はボランティア活動の中でも最も要請の強いものと言ってよいだろう。第二，第三の本田医師が出現してくれることを願いたい。（青年海外協力隊顧問医師）

ジェルバ地方病院の産科業務と分娩統計

最終報告書（５４年１月～５４年３月）
５４年３月２１日記
派遣国　テュニジア　５１年２次前期組
職　種　助　産　婦
氏　名　西村　勝美
配属先　Hôpital Régional de Jerba

西村隊員の略歴
氏　名：西村勝美
生年月日：昭和17年12月30日
出身県：大阪府
職　種：助産婦
派遣期間：52年２月－54年２月

I　マタニティーにおける活動

1. はじめに

ジェルバの公立地方病院（Hôpital Régional de Jerba）のマタニティー（Service de la Maternité＝産科）は，テュニジアの私の2年間の任地であった。常に多くの問題があるといわれる，このマタニティーに，外人の1助産婦（私）がボランティアとして入ったということは，はたして問題解決の上で，多少でも有益であったか，または無かったか。それらはどのような点においてか。次に，マタニティーの分娩の状況を数値で見ると，どういう結果が出るか等について，任期を終えた今，ひとまとめしてみる。

2. 派遣の背景及び任務の内容

ジェルバ島の気候及び人々の生活については，初回で報告したので，省略する。

人口：7～8万人。

産業：ジェルバは，観光と避暑用の島で，工場などはない。外人観光客を相手に，サービス業（ホテル，みやげ物店などを経営）を行っている人や，タッピー（じゅうたん）を織って売っている人，オリーブ畑を持っている人などは，大収益をあげているが，それはきわめて少数で，大部分の家は子供が5，6人いて，全般に貧しく，男達はリビアやフランスなどに出稼ぎに行っている。

宗教：イスラム教。

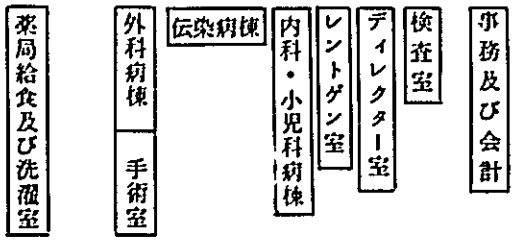
ジェルバには他に，ユダヤ人が約7,000人ほど住んでおり，その人達はユダヤ教である。

病院：種々のクリニックはあるが，公立病院は，このジェルバ地方病院が一つだけである。

1） 医療機関の配置

A

本　　院



B　P. M. I. マタニティー　……A（本院）から約５００m離れている。

C　眼　　科　……Aから約1㎞離れている。

D　無　科　診　療　所　……各町村に点在している。

E　保　　健　　所　……Aから６００m離れている。

2） ジェルバ地方病院のベッド数と診療科目

ベッド数　１１０床

- 内科４０床　（小児科と混合）
- 外科４２床　（産婦人科手術用ベッド含む）
- 産科１２床　（実際は１０床）
- 眼科　6床
- 伝染病棟１０床

診療科目

- 内　　科
- 外　　科
- 小 児 科
- 産婦人科
- 眼　　科

小児科は，同期の本田医員（小児科医）が来てから独立した。それまでは，内科医が一緒に診察を受け持っていた。

3） マタニティー（Service de la Maternité）の設備と内容

分娩件数：平均１１０件／月

設　　備：病　室　2室（ベッド数１０床）

看護婦室兼夜勤室　1室

分娩室　1室

トイレ　2

洗面所　2

医療器具：分娩台　2台

分娩用トレイ　2組（コッヘル2本，ハサミ1本）

縫合用トレイ　1組（持針器1本，ハサミ1本，短ピンセット1本，針1本）

O_2ボンベ　5,000ℓ1本（アンビュー新生児用マスク付）

人工妊娠中絶セット　3組

鉗子分娩用鉗子　2組

手動式吸引分娩用吸引器　1台（現在故障中）

超音波ドプラー胎児心音聴診器　1台（携行機材）

聴診器及びトラウベ悍状聴診器　各1本

産婦人科医及び看護要員：

産婦人科医　1名（チェコスロバキア人）

助　産　婦　3名（私を含めて）

看　護　婦　3名

看護助手　4名（2名は夜勤者）

勤務時間帯：

助産婦－1名ずつ，8時～翌朝8時までの２４時間勤務をする。

看護婦－朝勤務　2名→　7時～１３時

午後勤務１名→１１時３０分～１８時

看護助手－昼勤務　2名→　7時～１２時

１５時～１８時

夜　勤　2名→１８時～翌朝7時までを2名が一晩ずつ交代で勤務する。

看護婦は，夜勤をしないので，夜間（１８時～翌朝7時）は，助産

婦1名と，看護助手1名の勤務となる。

日　課：

6時30分　検温及び体温をカルテに記入。
　　検査用の検体採取（血液，尿など）。
7時　　朝勤務看護婦及び看護助手来院。
　　シーツ交換（シーツが無い時はやらない）。
　　朝食（カフェオーレのみ）。
8時　　助産婦交代（申し送り）。
　　産婦診察（分娩進行中の産婦）。
　　薬品の点検。
8時30分　ドクターの回診。
9時　　退院の手続き（処方箋書きと指示）。
　　薬品及び衛生材料の請求（薬局へ）。
11時　　昼　食。
11時30分　午後勤務看護婦来院→（時間どおりにくる看護婦はいない。12時頃にくる）。
12時　　職員昼食。
13時30分～15時　面会時間。
16時～16時30分　検温及び体温をカルテに記入。
17時　　夕　食。
18時　　夜勤看護助手来院。

業務内容：

助産婦－妊産婦の診察と処置（定期検診は，週1回，P.M.I.＝Protection Maternelle et Infentile の助産婦が行うので，それ以外の異常者及び分娩進行者のみ行う），分娩介助，陣痛誘発及び促進を含む分娩前の看護，分娩介助時の局部麻酔，会陰切開術及び縫合，薬品の管理。

看護婦－ベッドメーキング，定期注射，悪露交換（傷がある

人だけ），医療器具の洗浄と消毒，薬品請求と管理，新生児及び褥婦の看護（名目上といえよう），衛生材料つくり（ガーゼたたみ，分娩用パットつくり）。

看護助手 ― 病室，看護婦室及びトイレの清掃，医療器具の洗浄と消毒（看護婦と共に），夜勤者は検査用の検体採取。

助産婦は，分娩介助が主である。1ヵ月に平均１１０件の分娩があるが，助産婦は1日に一人しか勤務出来ないので（２４時間勤務），分娩までの看護と分娩介助に追われている。ベッド数は１０床だけだから，産婦は分娩後２４時間以内に退院することになり，産後の指導といったものは，ほとんど出来ない。

3. マタニティーにおける問題点

マタニティーがかかえている問題の中で，大きなものをあげると，次のようになる。

1） 助産婦がジェルバに定着せず，マタニティーは常に助産婦不足の状態である。

2） 社会的に見て病院の権力（特に，病院長であるディレクターの権力）が強い地方には，助産婦も看護婦も配属されやすいが，ジェルバはその牽引力が弱い。

3） 病院の中ではマタニティーは，内科や外科に比べると弱い立場に置かれている。

4） 新しい治療法や看護法等に対して，看護要員の中に抵抗がある。

5） 職員が公私の区別をせずに薬品や衛生材料を使うので，それらの不足が度々おきる（これは，マタニティーに限ったことではない）。

6） 清潔，不潔の観念に乏しい看護要員が多い。

１）については，第二回目の報告書で，病院側やテュニジア人の助産婦の考え方，家族構成に対する考え方等について書いたので重複をさけるが，助産婦も看護婦も，都市部や．ある限られた地方では充足したり人員が余っている所もあるようだ（ここでは，日本のように2，3交代勤務で複数夜勤をして，それでも看護要員が余っているという意味ではない。テュニジアの多くの病院で行われている勤務体制をとっていて人が余っている，という意味である）。反対に，ある地方では助産婦一人と看護婦が数人だけしかいない病院もあったりで，人員配置のアンバランスがはなはだしい。保健省が助産婦の配属先を決定するから，その前に必要助産婦を要求し，

余っている病院から転勤させてもらえば問題は解決しそうだが，現実には，２）にあげたような権力がからむので，難しいようだ。多くの人員が獲得出来る病院ということは，そのまま病院の権力の大きさをあらわすことになる。もっとも，助産婦の意志や家族との関係から，転勤の辞令が出ても拒否し，１年ほども無給無断欠勤を続ける助産婦がいるので（保健省からの辞令を拒否すると，１年間くらいは働きたくても働けないことが多い），人を動かすのも時間がかかる。

３）についてみると，マタニティーは内科や外科とは明らかに違う弱い立場に置かれている。例を出せば，マタニティーの場所が頻繁に変わること（引っ越しばかりしている），必要物品の購入がスムースにいかない等がある。私が知っているだけのマタニティーの引っ越し回数を並べてみても，以下のようになる。

① 眼科と一緒の病棟
② 外科と一緒の病棟
③ P.M.I.と一緒（１９７７年４月に私が着任～８月末）
④ 外科と一緒の病棟（１９７７年８月～１９７８年４月）
⑤ 元伝染病棟であった病棟に引っ越し（１９７８年４月～９月中旬）
⑥ P.M.I.と一緒（１９７８年９月～現在）

現在の場所は，１９７８年９月に病室を増築したが，１１月に１カ月近く降った雨で雨もりがして一部屋は漏電し，病室の天井には一面に黒カビ・茶カビがはえ，トイレは排水不良で使用出来ず，またまた引っ越さなければならないが，場所がないのだそうだ。修理しても3日ともたない。

マタニティーの立場が弱い第一の理由は，産婦人科医がテュニジア人ではないからである。内科も外科も，それぞれディレクターでさえ頭が上がらないほどの権力を持った医者が医長であるが，マタニティーには外国人の医者が一人しかいない。現在テュニジア人の産婦人科医が一人，病院に籍を置いているが，午前中2時間ほどの勤務契約だそうで，いないに等しい。テュニジア人の産婦人科医は（一般的に）病院で働くよりも，自分でクリニックを持ち分娩や人工妊娠中絶等を扱えば，おもしろいほどの大金が入るので，病院のマタニティーなどに力を入れようとする人をさがすのは，まず難しいだろう。ちなみに分娩料を一例にすると，マタニティーで分娩すれば２０ディナールぐらいですむのが，クリニックでは５０～６０ディナールも払わなければならないので金持ちや外人の患者が対象になる

（1ディナールは約500円。看護婦の給料は60～80ディナール）。

また異常があったり高い分娩料が払えない人達は，紹介状を持たせて病院のマタニティーに送ってくるので，甘い汁だけがクリニックに残ることになる。

今の，外人の産婦人科医は非常によく働き，腕もたち，信頼もされているが，それでも医療器械の請求や修理の依頼などでは，これがテュニジア人の医者だったら，即刻解決するだろうと思われるようなことにも，ずいぶん時間がかかる。医者が足りないから大切にしなければならないというのではないが，明らかな差別を見た時には，やはり良い気がしない。

しかし，現地人の気持ちもわかるようだ。ここの人達は，病院でテュニジア人の医者に働いてもらいたいと思うのに（たぶん），いつも2，3年契約の外人ばかりが入って来て，やっと慣れたところで別の人に変わるといった状態のくり返しでは，無理もなかろう。外人の医者はいらない，と言える立場でもなく，仮に言ったことが通ったとしてもテュニジア人の医者をひっぱってこられるのでもない人々の，やり場のない反動のような気がする。

4）と6）については，未熟児の看護という点で，争いが絶えなかった。「どのように取り扱うか」ではなく，「どこが担当するか」が問題になるのだ。

今までマタニティーでは，未熟児が生まれると，ベビーの顔だけ出して全身を綿でくるみ，その上を布でくるんで保温をし，ミルクを与えて，生死はアラーの神様まかせ（天命）にしていた。ところが，本田隊員（小児科医）が来てからは，病院に放置されていた1台の旧式の保育器を使い，点滴注射による栄養補給などが行われるようになったので，看護が複雑になった。注射の管理，オムツ交換，授乳，保育器の管理等が，時間で決められてくると，手のかかる未熟児はじゃま者扱いにされて，「これは，小児科医がいる内科病棟でみるべきだ」，「いや，マタニティーで生まれたのだから，そっちでみるべきだ」と，双方で争いが絶えなかった。

また授乳前後にオムツを見ること，哺乳量を記入すること等，種々の指示事項があっても，しょっちゅう抜けていたり，チェックだけしてミルクを飲ませていなかったり（偶然にわかったことだが）で，どこまで信用出来るのかわからないので，私が勤務に当たった日は，つい自分でやってしまうと，今度は私がいると他の看護婦は全然手を出さなくなった。そのため

に私が勤務していなくてもベビーをみないというようなことが出てきて，2日後の朝，勤務に出てみると，ベビーがクベース（保育器）の中で便や尿にまみれて泣いているといったことが度々あった。誰が手を抜いたかを追求し，授乳時間を改めて指示し（小児科医の指示を再度言う），出来るだけ看護婦にやってもらうようにしなければならない。皆は，要するに楽をしたいから，クベースを使うことで変化をさせて，仕事の量をふやしたくないのだ。現在未熟児は，夜間二人勤務になっているマタニティーでみることになったが，小児科医が任期を終えると，どうなることだろうかと思う。未熟児はアラーの神様にまかせるのが一番よいと思っている人達が，自発的にクベースを使用することはほとんどない，と言えるような気がする。産婦人科医が力を入れてやってくれれば別だが。

5）の薬品や衛生材料の不足については，中間報告書で少しふれた。職員が病院の物品を私用に使うのはジェルバのマタニティーだけではなく，恐らくテュニジア全体の病院で，それも管理者から掃除夫（婦）に至るまでやっていることはほぼ間違いない。私が「病院の物は患者用だから，自分で使いたいのなら，自分で買わなければならない」と言ったら，「なぜ，患者だけの物なのか？病院の物は患者の物だが，働いている職員の物でもある」と答えた。この考え方がほとんどの人達にあるようなので，私はそれ以来，不足時のために患者用に物品や薬品をストックするようになった。薬品や衛生材料や酸素などでも，無い時は「無い」で通用する世界であるが，私はそのために妊産婦が一命を落とすということは絶対にさけたいと思った。職員の中には，私が職員を皆と同じように優遇しない，と言って腹を立てたり「考え方がおかしい，バカだ」などと言う人もいたが，職員の公私混同を助けるつもりは，私にはなかった。

4. ボランティアは問題解決上，多少でも役立ったか。または役立たなかったか。

前の報告書にも書いたが，テュニジアが日本に，助産婦や看護婦を要請するのは，看護要員の不足を補うためであり，ＪＯＣＶで聞いた「隊員は，現地人の中に入って，技術指導を云々……」といったようなことが，当てはまらないケースだろう。人々が欲しがっているのは指導者ではなく，労働力としての人材だからである。ボランティアの受け止め方にしても，最初，多くの人達は私を"安い給料で働いてくれる外人"と思っていたようだ。テュニジア人の医者は助産婦以上に地方へは出たがらないので，そ

れを穴埋めするために，個人で労働契約を結んだ多くの外国人の医者が地方に配属されている（フランス人，ドイツ人，ブルガリア人，パレスチナ人，エジプト人，ポーランド人，チェコスロバキア人などが働いている）。そして彼らは，テュニジア人の医師以上の高給をもらっている。助産婦とはいえ外人である私も，テュニジア政府と契約を交わし，テュニジア政府から給料をもらっているとみられたらしい。

もっとも私達が受け取る住宅手当を，テュニジア政府は給料とみなしているとの噂を聞いたことがあるが。テュニジア人の私の友人達がボランティアの意味をどのように受け止めているか知らないけれど，日本においても「ボランティアとは？」がいろいろな解釈になり，曖昧な表現が多いので，いたしかたがないと思う。彼女達が納得したのは，日本政府がジェルバ病院によこした医者と助産婦と看護婦は，月々もらう金額（海外手当）が同じで（医者も同額ということは，驚異に値いするらしかった），3人共，他の外国人のように金持ちではないが，自分達とも少し違う，ということだろうか。

では，ボランティアの意味するものが何であれ，外人の助産婦が一人配属された結果はどうであろう。「3.マタニティーにおける問題点」の1）に関して，マタニティーの助産婦不足を補うためになされたことで，事務レベルにおいては助産婦数が定数になり空白欄が埋まったのだから，一時的にせよ問題が解決したことになる。

助産婦の側からみても同様，人数がそろえば，今まで負担していた一人分の助産婦業務が返上出来て，正規の勤務時間にもどれる。従って，私が来たことは病院にとっては有益で，問題は一件落着したかにみえるが，実際は急場をしのいだだけである。根本問題は，ジェルバ病院にいかにして助産婦を定着させるかであり，それが出来ない場合，助産婦不足をどうして補うかの具体策が立てられない限り，解決にはならない。

私は，ボランティアが入ったばかりに，テュニジア人の助産婦が配属になるスペースをいたずらに横取りしているのではないかと考えたことがある。彼女達が地方へ出たがらないことは，何度も書いた。しかし保健省から辞令が出れば，本人の意志とは関係なく任地に行かなければならない。極端な言い方をすれば，放置すれば最低限度のテュニジア人助産婦を得られる状態だから，ジェルバにはボランティアが入らない方が，現地の妊産婦にとってはよいのではないかと思ったのである。不本意ながらも，ジェ

ルバにやって来たチュニジア人助産婦は，1，2年すると転勤してしまう。次の交代助産婦がくるまでの間，マタニティーは助産婦不足にみまわれる。ボランティアにしても同様。私の後続隊員がジェルバに配属される保証はない。保健省のサジ加減一つである。とすると，同じ入れかわるにしても，外人のボランティアが切れ切れにやってくるよりも（くるかどうかは知らない），最初からチュニジア人ばかりで交代した方がより能率的で，有益だと思う。

もし仮に，ジェルバのマタニティーに定期的に助産婦隊員を送れるのであれば，助産婦を定着させるという面で話は変わってくる。マタニティーの問題解決の一端を担うのであるから。この場合，保健省を動かさなければ確かなルートはつくれない。「問題点2）」であげたように，ディレクターの権力によって看護要員の配属状態が違ってくるからである。

現状において，ジェルバ病院のマタニティーに1助産婦がボランティアとして入ったことは，当座の問題解決には役立っているけれど，将来性を考えると．日本からの隊員の継続派遣が出来ない場合は，チュニジア人助産婦に任せておく方がよいと思う。それが可能な国だ，と私はみた。

5. おわりに

ジェルバでの最後の勤務は，嬉しいような淋しいような気持ちが入り乱れ，感無量のうちに終えた。今，こうして書いていると，日本に帰ってしばらくすると．そのうちにまた，今度はもっと未開発の国に行って助産婦業をやりたくなるのではなかろうか，という気がする。いろいろな物がありあまっている日本から，何もかも節約しながら使用しなければならない仕事場に移って教えられたことは多かった。距離をおいて日本をみられるようになる，と，誰かが言っていたが，チュニジアは私にもそれを与えてくれたような気がする。

Ⅱ ジェルバ地方病院（Hôpital Régional de Jerba）のマタニティー（Service de la Maternité）の分娩に関する統計

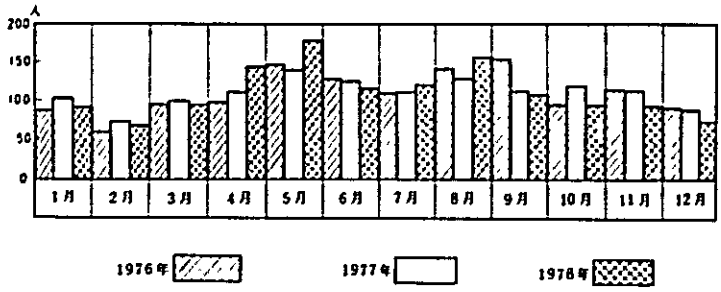
1. はじめに

アフリカでは，全般に人口再生産率が非常に高いと聞いていたが，実際，チュニジアのジェルバ地方病院で分娩にたずさわってみると，5，6回目の分娩をする人がかなりいるように思われた。中には十数回目という人も

いた。日本で3人以上の子供を持つと珍しがられるのとは反対に，テュニジアでは「一人っ子」は両親に何か欠陥があるための結果ではないかと思われるくらいである。ジェルバはテュニスやスファックスなどの都市部に比較して「子だくさん」の家が多いので，単純にどれくらいまで分娩回数がのびるのかを知りたいと思ったのがきっかけで，この統計にかかった。また，その他の項目については，2年間の任期を終えるにあたり，ジェルバのマタニティーの分娩の状況を数値にしてまとめておく意味でとったものである。

1976年～1977年3月までは，私の着任以前の件数であるが，分娩状況を知る上では件数が多い方が有効であると思い，3年分として一緒に含めた。

2. 月別分娩件数



〔表1a〕

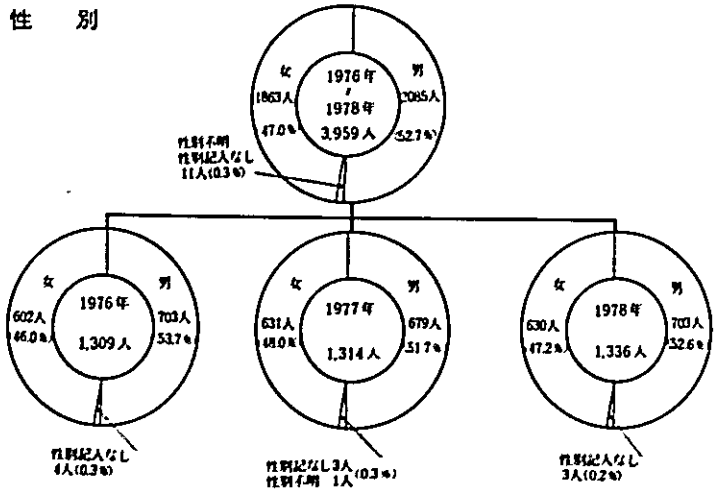
年＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	月平均
1976	84	63	99	98	145	128	108	139	155	91	111	88	1309	109.0
1977	101	74	96	113	138	126	109	128	117	120	112	80	1314	109.5
1978	78	70	96	143	176	117	120	158	110	97	97	74	1336	111.3

〔表1b〕

表1a，表1b，でわかるように，分娩件数が月によって極端に異なるのは，ジェルバにも日本のように結婚シーズンがあるため，出産時期にもかたよりが出てきたのだろうと考えられる。ただし，ジェルバの結婚式は3日～1週間も続き，毎夜歌ったり踊ったりするので，寒い冬の間はさけて，

ほとんどの人が夏に挙式をし，翌年の夏にはたいていの人が第一子を分娩する。

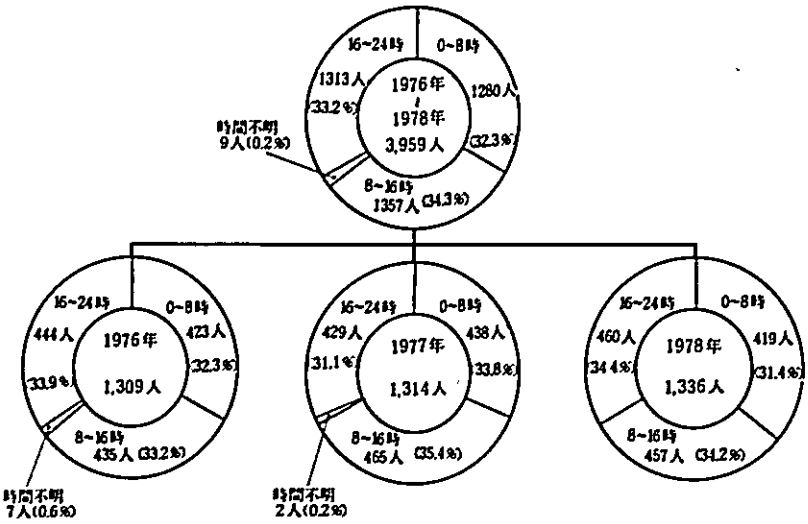
3. 性　別



〔図1〕

各年次共に，男児の出生率がわずかに女児を上回っているのは日本の統計と同様である。「性別記入無し」の理由は，帝王切開術の場合，マタニティーから５００ｍばかり離れた本院の手術室に行くので（同じ敷地内ではない），他に産婦がいると，助産婦は手術に立ち合えない（１日に一人しか勤務しないから）。手術後はカルテも患者もベビーも外科病棟の管理になり，マタニティーとは連絡がないので，その時こちらで聞き返さない限り，分娩台帳の方は空白になる。また聞き返してもカルテがその場にない時もある。もう一つは死産の場合で，死産児は日本のように郷重には扱われず，一つの物体として布にくるんで分娩室の隅に置いたり，トイレの横に置く。保存用の冷蔵庫などはない。分娩台帳も，生下時体重や性別が記入されていないことがある（カルテには記入されているが，事務員は，３年ほど前のカルテなど，熱心にさがしてくれない）。性別不明一人は，「疑半陰陽」で，ジェルバでは精密検査が出来ないために，後日テュニスの国立病院で検査をすることになり，家人は一応「女」として出生届を出した。

4. 時間帯別分娩件数



（図2）

助産婦は毎日一人しか勤務していないので，よほどのことがない限り，点滴注射などによる陣痛の誘発はしない。管理が充分に出来ないからである。従って，自然にまかせた分娩がほとんどである。また3～5回経産の人が多いので，入院してすぐに分娩をしたというケースもかなりあった。が，こうしてみると，昼間と夜間にほぼ均等に分娩があることになる。

5. 分娩回数

ジェルバのマタニティーで仕事を始めて，まず最初に調べてみたいと思ったのが，この「分娩回数」についてであった。人々がゴロゴロと子供を産むのを見てびっりしたからである。1家庭に5，6人はいるように思えた。

表2が示すとおり，総分娩数の約$\frac{1}{3}$を初産婦が占めているが，第二位は3，4回経産で23.4％と，全体の約$\frac{1}{4}$近くにもなる。また5，6回経産も14.5％と非常に高い割合いになっている。この3，4回目と5，6回目を合わせると，37.8％と初産婦の占める30.7％を上回ってしまい，ジェルバの人達の出産数に対する重心がこのあたりに置かれていることがわかる。7回目以上の占める割合いも高く，14.1％にもなる。

11回経産以上の中ではマタニティーでの最高分娩回数は18回目（1名）であったが，自宅分娩直後に入院した経産婦は23回目であった。11回

			0　50　100%
1976年～1978年 3959人	初 産	1214(19)	30.7%
	2回目	673(10)	17.0
	3～ 4	925(19)	23.4
	5～ 6	573(13)	14.5
	7～ 8	346(5)	8.7
	9～10	160(4)	4.0
	11回以上	51	1.3
	不 明	17	0.4

( )内は双胎数　　〔表2〕

経産以上のうちわけは，以下のとおりであった。

11回目 →	28人	12回目 →	12人
13回目 →	7人	14回目 →	1人
15回目 →	1人	16回目 →	1人
18回目 →	1人		

テュニジアでは，家族計画の普及に力を入れており（人口抑制政策），避妊器具が無料で配布され，子供が4人以上いる人には人工妊娠中絶や避妊手術などがほぼ無条件で行われている。都市部では次第に分娩回数が減少していく傾向だというが，それでも1家庭に3，4人の子供がいる。避妊薬のピルも無料で配布されるが，しかし女児ばかり続けて産んでいる人の中には，男児を出産するまで産み続けるというような人もいて，こればかりは政府の計画どおりにはいかない。「分娩回数不明」というのは，もちろん多産者であるが，生産，死産，乳幼児期に死亡した子供等の数が計算出来なくて，自分が今までに何回分娩したかがわからない，という人である。

6. 生下時体重

		人	0 50 100%
	～990 g	13	0.3%
	1000～1490	42	1.1
1976年	1500～1990	64	1.6
/	2000～2490	212	5.3
1978年	2500～2990	620	15.7
	3000～3490	1499	37.9
3959人	3500～3990	1032	26.1
	4000～4490	298	7.5
	4500～4990	45	1.1
	5000～	17	0.4
	記入なし	117	3.0

〔表3〕

テュニジアは多産国だから，生下時体重が日本よりも少ないベビーが多く，未熟児の頻度が高いのではないかと推測していたのがはずれた。彼女達は，平均してりっぱなベビーを出産し，未熟児の頻度も8.4%と日本の文献と変わりはない。ただし，栄養のバランスのとれた母胎から出生したベビーであるかどうかは疑わしい。人々は一般に，穀類や砂糖を多くとり，蛋白質系の食品はあまり摂取しないようなので（経済的理由が大きい），必然的に太って，ベビーも日本と同じくらいの生下時体重で出生する。もっともジェルバの理想的な女性像（体型）は，太っているほどよいとされ，体重が８０～９０kgがよいなどと言われたりするから，これも多少は関係しているのかも知れない。次に，巨大児についてみると，4,０００g以上が9.1%（３６０人）ある。巨大児の中でも，5,０００g以上が，毎年7，8人あり，１９７８年には6,０００g以上のベビーが二人もいた（6,０５０g→一人，6,４００g→一人）。

4,５００g以上のベビーを分娩した母親は，血糖値（空腹時のみ）を測定するが，過去のほとんどが正常範囲内であった。ジェルバ病院の検査室では，血糖の負荷試験が出来ないので，血糖値が正常といっても潜在的な

糖尿病までは把握出来ないのだから，問題は残る。

7. その他について

表4は3年間の総分娩中で，妊産婦とベビーに関して，いわゆる「普通のお産」と呼ばれる「前方後頭位分娩（出生）」以外のものをひろいあげたものである（ただし，妊娠中毒症，弛緩出血，遷延分娩は除く）。

分娩をとりまいて出現する症状や疾患，または処置などは，世界中どこでも似かよっていると思われる。問題は，その中には妊産婦にほんの少しの分娩に関する知識と注意力があれば，当然母子共に順調な経過をたどったと考えられるケースが少なくない割合いで含まれていることである。

帝王切開術の適応は，前回帝王切開術を受けた人，前置胎盤，子癇，子宮破裂，額位，臍帯脱出，高年初産婦などであるが，適応の記録が無い場合も比較的多かったので，数値は出せなかった。

E.V.R.（Enfant Vivant Reanimé =蘇生児）からD.C.D.（Enfant Décédé =死亡児）になったベビーについても，記入されていないことが多く，従ってE.V.R.の中には生後1時間以内くらいに死亡したベビーも含まれている。

新生児死亡については，母子共に産後24時間以内にほとんど退院してしまうので，統計的数値として有効な新生児死亡率は出せなかった。単にマタニティーでの死産児と，胎児娩出後数十分以内に蘇生出来なかったベビーを，死産として出しただけである（たとえば，ベビーが生後3日目に家で死亡していても把握は出来ない）。産婦が入院した時点で予診をとってみると，多産婦で死亡児がいないという人は極くわずかで，多い人になると分娩回数の半数が死亡児であったりする（原因は，下痢や肺炎などが多かった）。従って，新生児及び乳児死亡率は30～40%になるのではないかと推測している。

子宮破裂，胎位異常（顔面位，額位，横位等）も比較的高い数値を占めている。子宮破裂は0.1%と，日本の文献の約2倍はあるが，一番多い原因は前回帝王切開術を受けた後，1年余りで再度出産になるというケースである。産婦が来院時に，すでに破裂していたり，陣痛が増強したとたんに破裂したというケースが多かった。帝王切開後の人には，ドクターが避妊の必要性を説明し，指導を受けに来院するように言うが，ベビーが死産児であったり，乳児期に死亡した場合は，子供欲しさで避妊など考えず，すぐにまた妊娠するから，最悪の事態が生じる。

臍帯脱出は0.6％で，日本の文献よりもやや少ないが，臍帯脱出後の生産と死産の比率は現在のところ５：５（５０％ずつ）くらいである。

以上の他に，重要視される妊娠中毒症，弛緩出血，遅延分娩について数値を出したかったが，資料不足で出来なかった。

8. おわりに

ジェルバのマタニティーでの２年間の任期中に，私は約６００人のベビーを取りあげた（分娩介助をした）。帝王切開術や鉗子分娩などの間接分娩介助も合わせると約７００人になる。日本で分娩にたずさわる数の３倍くらいにあたるが，多くの分娩に接したということは，それだけ多くの異常にも対処してきたということであって，私自身非常によい勉強になった。

肺炎で長い間クベース（保育器）に入れていたベビーが，私が帰国する頃には，鼻水をたらした普通の子供に育っており，抱こうとしても人見知りをして，母親にしがみつくのを見ると，ほんとによかった，という気持ちでいっぱいになった。

項　目		1976年	1977年	1978年	計	比率	
Prématuré	(早　産)	11人	36人	44人	91人	2.3%	
Gumeaux	(双　胎)	22	25	20	67	1.7	
O.S.	(後方後頭位)	10	9	20	39	1.0	
P. du siège	(骨盤位)	36	45	62	143	3.6	
P. du front	(額　位)	4	4	5	13	0.3	→0.32%
P. de la face	(顔面位)	2	5	3	10	0.3	→0.25
P. transversale	(横　位)	3	7	1	11	0.3	→0.27
Césarienne	(帝王切開術)	61	55	42	158	4.0	
Forceps	(鉗子分娩)	43	56	52	156	3.9	
Ventouse	(吸引分娩)		15	33	48	1.2	
E.V.R.	(蘇生児)	55	57	84	196	5.0	
Mort-né(e)	(死産児)	93	84	74	251	6.3	
D.C.D.	(死亡児)	7	1	11	19	0.5	
D.A. + R.U.	(胎盤用手剥離)	33	16	20	69	1.7	
Ancienne cesarisée	(前回帝王切開)	9	4	1	14	0.4	
B.G.R.	(狭骨盤)	4	4	0	8	0.2	
P. proevia	(前置胎盤)	6	10	7	23	0.6	→0.58
P. du cordon	(臍帯脱出)	9	7	6	22	0.6	→0.55
Rétro-placentaire	(常位胎盤早期剥離)	7	7	3	3	0.07	
Rupture-utérine	(子宮破裂)	1	1	2	4	0.1	
Eclampsie	(子　癇)	1	2	2	5	0.1	

(表4)

帰国して思うこと

西　村　勝　美

私が，青年海外協力隊員としてチュニジアで2年間を終えた話をする時，必ずといってよいほど受ける質問がある。それは「協力隊に入った動機は何か」と，「隊員として行ってきてよかったか」の二つである。後の質問には「よかった」と即座に返答しているが，最初の問いかけには，どう答えたものかとちょっと言葉を選んでしまう。質問者があまりにも明快な答を要求する時，自分の中で，動機づけとしては不明確であっても重要であった部分（私はそれを，ボランティアのモラルのようなものだと思っている）とずれてしまうからである。従って，私は必然的に第三者に対する返答を準備しなければならなくなり一瞬のとまどいが生じているようだ。しかし，まるっきり本心とかけ離れた答はしたくないので，自分が協力隊を志願し参加した動機について，隊員の任期を終えてから，改めて分析をするはめになったのはおもしろいことだ。

報告書では，任務上の問題点としてジェルバ病院のマタニティー（産科）について書いたが（「マタニティーにおける問題点」）では，個人的な問題にはどんなことがあり，自分の動機づけと情報と現実の違いはどうであったかについて，少しふれてみたいと思う。

まず，1. 言葉が十分に話せない，2. 助産婦業務が日本の場合と違う，3. 環境の変化が体調の変化につながる，などが問題であるが，これらはすべて，日本を出発する前に予測していたことばかりで，問題が私個人に限られたものではない。いわば，全隊員が大なり小なり持っていたに違いないことばかりである。それにもかかわらず，なぜ問題にするかといえば，私が以上のことを納得して赴任したはずなのに，失敗したからである。

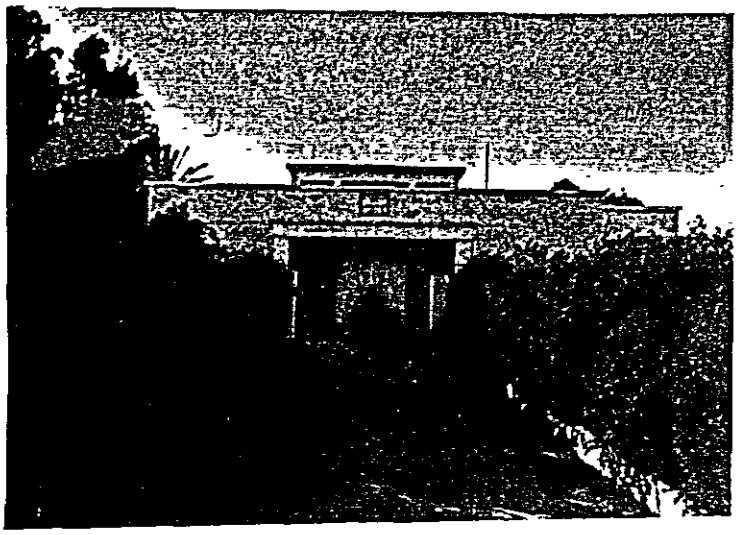
チュニジアに赴任して，最初の約6カ月間で，何が一番つらかったかといえば，言葉が話せないことだった。現地人の同僚は，私がフランス語がペラペラの状態でやって来たと思っていたし，アラビア語しか話せない多くの妊産婦と直接にコミュニケーションを持つには，アラビア語を覚えなければならない。その他，助産婦業務では，日本の医者の範囲になるような医療行為が含まれて

いること（妊娠中毒症患者への投薬や注射の指示，局所麻酔や縫合等）。また，環境と食物の変化に慣れるまでは，下痢をしたり生理不順になったりで，私はひどいスランプに陥った。いま考えると，異常と思えるような状態であったが，その時，ふと気がついたのは，自分が，マタニティーの問題や個人的な問題を<たし算>にして受け取っていたことである。さまざまな問題が一度におしよせてきた時，相乗作用を及ぼし，予想以上のストレスに変ることが計算に入っていなかったからである。

私がスランプ状態の時に，協力隊を志望した動機が，どんな部分で役立ったかといえば正直なところわからない。現実と結びつけて考えてみるゆとりがなかったような気がする。

ただ，その時に私は，2年間は絶対に日本に帰らないぞと決心して出てきたことだけが，よりどころになっていたように思う。チャンスが二度と訪れることはないと考えていたのかも知れない。

協力隊に入った動機が何かという質問が向けられるたびに，私は，自分が不明確なままで出て行った部分について考えてしまう。後悔してもはじまらないが，取り逃した魚があるような気がするのである。



ジェルバ病院のマタニティー。左の入口がP.M.I.，右の入口が産科

ジェルバ病院，マタニティーの分娩室

西村隊員の報告書を読んで

山崎　トヨ

率直に申して隊員の方々の実践レポートを拝読するたびに，筆舌に表現しかねているだろう彼女達の苦悩が伺われ，ぐったりと疲労感を覚えるのが実感である。隊員の方々の昼夜を問わずの努力は並たいていのものではないと思う。若い彼女達は日本においては科学的予測にもとづいた分娩現象を学び，大勢の先輩や同僚の中でチームの一員としてお互いに助け合っていたことと思う。そして数年間の体験を頼りに，風俗，習慣，言語等の異る発展途上国へ向い，その地に入り自己の助産業務に挑戦することに私は恐れを抱いてしまう。

生命が対象である助産婦の業務は，体験すればする程後ずさりしたくなる程の不安感を抱くものである。時々就寝中も赤ちゃんの泣き声が聞えてくるような錯覚で飛び起きてしまうという体験は，この仕事に就いている者は誰でも味わうことではないだろうか。しかし，母親を励ましながら，あの生命誕生の神秘的瞬間を援助できることは敬保を覚える程の感激でもある。

西村隊員は着任後現地の風土や生活様式，また産科の位置づけや分娩数，助産婦の受け入れ体制や社会的地位，および業務内容や隊員の受け入れ体制など現地の国民性からみた報告書を書いていた。そして今回2年間の任務の中から帰国にあたり産科的データーや，現地の産科や助産婦の位置づけの問題点を提示し客観的に自己分析も含めて整理していた。「マタニティーにおける問題点」は問題を6項目に整理している。この問題点は日本人の私達の感覚からすると到底理解しかねる問題であるし，生命対象の業務に携わる者として立腹を禁じ得ない。私達が理解しかねる現地人の思考過程はその国の国民性に由来するものであろうし，その根底をなすものは社会的環境や宗教的要素や，長い歴史のなかから培われた生活の知恵であるかも知れない。いずれにせよその国独自の倫理性は保たれていると思う。テュニジアの人達は日本女性西村隊員に対して不可解さを抱いていただろう。どこまでも平行線を辿るお互の思考過程は歯ぎしりする程不可解なものであったと思われる。その場に臨んだ西村隊員は多くの問題点に真正面から対処しても解決できずに終えた点が沢山あったと思う。

「ジェルバ地方病院のマタニティーの分娩に関する統計」の中で，月別分娩件数，性別，時間帯別分娩件数，分娩回数，生下時体重等について記録されていた。現地において十分なカルテや記録の整理もなされていないなかで統計処理をし，日本の周産期の統計と対比し適切に分析されていたと思う。この統計からみて日本の現状とあまり変化のないことに興味を覚える。ただし，分娩回数や新生児，乳幼児の死亡率は高く，今後改善されなければならない。

また西村隊員は「ボランティアは問題解決上，多少でも役立ったか，または役立たなかったか」と厳しく自問自答しておられるが，任期を終えた今どのような解答が出たであろうか。私は躊躇することなく十分その役割を果した，と信じている。ボランティアの意味の解釈は様々あるが，西村隊員がチュニジアの母親にとり，また家族，社会にとり，一人の尊い子供の出産に貢献したことは事実である。2年間で７００人の出産に携わった人として，チュニジアの母親達にとり，いつまでも忘れられない人となっていることであろう。またチュニジアの助産婦達は彼女達の社会的地位を自覚し，より高い地位の向上に邁進していくものと信じている。

今後チュニジアの地にも世界の波が押し寄せてくるものと思う。そして「教育」の影響により人々の思考に多様性をもたらし，社会構造に様々な変化をもたらすことと思う。そしてチュニジアの国民の健康意識の向上により広い意味での母子保健の推進がうたわれ，実現されていくと思う。西村隊員が着任当初トラウベだけで児心音を聴取していたが，今ではドプラーが備えられ，未熟児にはクーベの環境が整備されつつある昨今である。日本は今でこそ先進文明国といわれているが，明治時代までの母親達は妊娠，分娩に対しての予備知識もなく，出産に臨んでいたのである。そして今のチュニジアの母親達のように多産多死の苦しみや悲しみを味わっていたのである。今後チュニジア国民の要求する生産人口に従い母親達は積極的に家族計画をたてていくと思う。

今後西村隊員にチュニジアの女性史をふまえた分娩の変遷や，風俗習慣からみた妊娠，分娩，産後の摂生など分析していただきたい。きっと世界中の母親達に共通する母性愛が落んでいるのではないであろうか。

西村隊員には，何ものにも替え難い2年間の貴重な体験をもとに，今後日本の母子保健の発展により一層努力していただきたいと思う。（青年海外協力隊技術専門委員＝助産婦）

テュニジアでのバレーボール普及活動

最終報告書（52年4月～54年8月）
54年8月18日記

派遣国　テュニジア　51年2次後期組
職　種　バレーボール
氏　名　大島　晃
配属先　Ministère de la Jeunesse et des Sports,
Fédération Tunisienne de Volley-Ball, Tunis

大島隊員の略歴

氏　名：大島　晃
生年月日：昭和28年11月30日
出身県：埼玉県
職　種：バレーボール
派遣期間：52年4月～54年7月

1　2年4カ月の隊員生活から

ラストスパートから一気にゴールに駆け込もうとしている今は，自分の仕事の成否にかかわらず，ほっと胸を撫でおろす清々しさがある。職種は違ってもいろいろな隊員の奮戦努力する姿を見ては，励まされつつ，最後の日を迎えようとしている。

これまでの仕事の反省や，続く隊員のために2年間の跡をたどってみる。

テュニスの空港に着いた時は，小雨がぱらつく肌寒い夕暮れ時であった。心細く弱気になりそうな自分と，「さあ，ひとつやったろか」という自分が，微妙に交錯していたのを覚えている。

テュニジアのバレーボール人口は約1万人と推定できる。これは，競技人口が約4,000人，それにレクリエーションバレー愛好者をプラスした数字である。テュニジアの人口は600万人。約300万人がフットボール愛好者とすれば，バレーボールに興味を持っている人達は微々たるものだ。

競技人口は都市部に集中し，トップクラスを形成する人間は50人前後である。まずは，その50人前後のバレーボーラーへのアタックが始まったのである。

ここで，ある同職種隊員の話を引用させていただく。彼は，地方の協会で12歳～18歳の男子を担当している。中・高校でのバレーボール授業のアシスタントを務めるとともに，地区のクラブチーム，4チームをアシスタントコーチしている。

彼は，彼のテリトリーのバレーボール普及活動の一環として，日本から送ってもらったバレーボールフィルム3巻をかつぎ，青年の家や高校を借りて上映会を行なった。

都市部では，モダンなユニフォームやシューズで練習している選手たちだが，地方の彼らはボールが1チームに一つか二つ。まともなシューズをはいて練習している選手が何人いるか。素足の人もいる。

彼らに見せたフィルムには，立派な明るい体育館で数十個のボールをふんだんに使い練習している人々が登場してくる。隊員は，上映後の反省を私に話してくれた。日本では合理的に組み立てられた良いフィルムであるが，さて，地方のコーチや選手にとっては他の遠い世界のものに映りはし

なかったであろうか。

小石のころがるオープンコート，一つか二つのボール，穴のあいたネット，という現実が，すぐ隣にある。

確かに近代バレーというものを見た。しかし，そのフィルムから彼らは何を学び取ったのであろうか。何をどうしたらよいのか，せっかくの仕事を徒労に終わらせたくないだけに，辛苦も大きい。

ナショナルチームや，1部リーグ上位チームを除いては，都市部でも状況に大差はない。

比較的に地方より，よいスポーツ環境にある首都テュニスである。テュニスで仕事をする私にとっては，地方の協会で働く隊員に頭の下がる思いをすることもよくある。

こんな話からも，地方での一般のスポーツに対する理解度がわかるであろう。

その事件は，地方のチームが隣の地区のチームと対戦し1対1で迎えた第3セット目に起こった。当日は，両チームとも一つずつしかボールを持って来ていない。一つ目のボールは，1セット目にパンクした。二つ目のボールは，第3セット目にコートの向いにある八百屋の店に飛び込んでしまったのだ。選手が取りに行ったが，返してくれない。仕方がないから監督自ら談判に行くはめになった。八百屋の親父さんは「毎回，2，3個のボールが店に飛び込み商売の邪魔になってしょうがない。客が減った」という。困ったものだ。今度は審判が行った。やはりだめであった。テュニジアのスポーツの試合場には，いつも警官が来るのがきまりになっているので，その警官に話し合いをお願いしたが，親父も頑固。明日返す，という。警官も大したもので，すぐ了解してしまったのだ。

結局，試合は，ボールがないから続けられず，次の日曜日に再試合となった。嘘のような本当の話である。

私はテュニジアのバレーボール隊員としては第2番目に着任した。第1次隊員はテュニジアの首都テュニスに次ぐ大きな都市スファックスで活躍し，昭和53年の8月に帰国された。

私の到着時には，テュニジアバレーボール協会は，私に第1次隊員同様，地方のバレーボールの普及に貢献してほしいとのことで，北部の中心都市ビゼルタを予定していた。しかし，私の到着は時期的にバレーシーズンの終わり頃であったので，約4ケ月の事前研修をテュニスとスファックスで

行ない，テュニジアバレーボール界のあらましを勉強することにした。そこで出した結論は，地方のバレーボール普及活動も非常に大事なことであるが，やや時期尚早。テュニスのクラブチームを担当しながらナショナルチーム関係にも積極的に関与，指導していくことが，テュニジア全体のバレーボール普及，そして今後続く日本人コーチが働きやすいポジションの下地づくりができるということであった。

バレーボール協会との話し合いの後，協会は私に快くテュニスのクラブチーム「Zitouna Sport」の監督と，ナショナルチームのアシスタントコーチの仕事を任してくれた。その後体育専門大学での仕事が加わったわけである。そして2年目からは，ナショナルチームジュニア，テュニスチームを担当した。

Ⅱ　テュニジアのバレーボールと協力隊員

テュニジアナショナルチームは，アフリカNo.1のポジションを取ったことがあり，常にエジプトとともに上位にランクされる実力がある。

もちろん，アフリカのレベルを知っている人にとっては，テュニジアの実力などと一笑に付されてしまうかもしれないが。しかし，テュニジア人コーチは，アフリカ圏内ということでは，誇りを持っている。時々それが災いしてか，本気になって高いレベルのバレーボールを学び取ろうという謙虚な姿勢が，もうひとつ感じられないのは，私だけの実感であろうか。

ナショナルチーム，クラブチームと，それぞれのレベルに合わせて行なってきた練習であるが，基本的には，日本の練習方法をベースにテュニジア人の体質，気質，技量に合わせてトレーニングを処方してきた。

具体的には，筋力，バランスなどの体力トレーニングを多く試みた。テュニジア人は柔軟体操がよく普及していないことや，遺伝的な体質で関節を動かす筋肉が硬く，レシーブ，アタックなどの基礎技術に悪影響を与えている。また，気質は非常に陽性であるが，逆境の時に，あっさりと弱さをさらけ出してしまいがちだ。

スポーツでの三つのファクターとして，よく使われることばが「心・技・体」である。心・体の充実は，技術の向上に大いにかかわってくることを忘れないでほしいものだ。

任期後半に出会った新しいバレーボーラーから，明るい材料を拾ってみたい。

昭和５３年の９月から，ナショナルチームジュニアのテュニス地区選抜チームを担当した。

選手は１５～１８歳の有望新人で，テュニス地区にあるクラブチームから選ばれた１５名である。彼らの一部は多くの素晴らしい素質を見せてくれた。従来のナショナルチームに見られなかった大型選手が3人も選ばれている。１９１cm，１９２cm，１９８cmのそれぞれ１８，１７，１７歳の選手である。とくにラリディ・ファイサルという選手は，身長は１９８cm，体重８１kg，サージェントジャンプ８８cm，ランニングジャンプ９３cm，指高２ｍ５９cm，最高到達点３ｍ５２cmと，国際級選手になりうる逸材である。

体力的に改善されつつあるナショナルチームである。あとは，練習の質と量，スポーツに対する心構えさえしっかりしていれば，本当に楽しみになるアフリカの星たちである。

バレーボール協会も，よい傾向を見せている。それは積極的に良いバレーボールを学ぼうとしていることだ。続けてほしい姿勢である。

今夏のコーチ講習会，ナショナルチームの強化合宿に，ソ連の強豪クラブチーム，ディナモ・モスクワの元監督，サルキソーブ氏の指導を仰いだ。

トップスタッフが強力にナショナルチームを牽引すれば，その波紋は次々と広がってゆく。この夏からナショナルチームの責任者が変わり，新しいコーチ陣と新しい指導理念でチームが運営されている。

コーチ陣の人選は最良であろう。秋の地中海選手権，初冬のアフリカ選手権に期待したい。

テュニスのナショナルチームジュニアの担当は，私の後続隊員の石渡氏が引き継ぐ予定である。第4次隊員の吉田氏は，9月の新シーズンからテュニジア中央部のケロワンから海岸沿のスース地区へ移動し，スース市のチームを指導する予定である。

北部のビゼルタから移った石渡氏に就いてナショナルチームジュニアが新しい力強いバレーボールを展開することを願っている。

以上のようなバレーボール環境を考えれば，求められる隊員コーチ像が浮かんでくる。コーチの許容人数は最高4人である。北部，首都，中部，そして南部をそれぞれのテリトリーと考えたい。首都以外は全てオープンコート。ボールなどの用具の不備，バレーボール選手志願者不足，時間に対して極端にルーズな点などは，4地区，テュニジア人に共通の問題であり，

バレーボール技術云々以前の事柄であるので注意されたい。

それでは，隊員コーチとは，どのような人間が理想かというと，首都以外の地区では通常ナショナルチームに関与することは難しい。4地区に4人の日本人コーチがいると仮定すれば，3人のコーチは地方で地道な活動をすることになる。したがって，地方でも首都でも行動力，実践力があること。よく言われる言葉であるが，ここでも強調したい。与えられた仕事が少なかったり，レベルが極端に低い場合でも，全体的な視野で，その地区では，または，この国では今何が必要なのか，不足なのか，深い洞察力をもってほしい。そこから，果敢にやるべき仕事を捜すこと。そして，2年間，良いと思われる仕事を常に捜し実践しつづけることが大事である。仕事は待っていても決してこない。それぞれがシェフであることを忘れてほしくない。

次にコーチは，日本での選手経験が十分にあり，良いデモストレーションのできること。大学出たてであれば，大学のバレーボール部の実力が全国ベスト16以上であるのが一応の目安になる。テュニジアのナショナルチームの実力がその程度であると思える。

日本人コーチは若い人の方がテュニジアの実情に合っている。もちろん，国際的な視野のある熟した経験をもったコーチを送るにこしたことはないであろうが，協力隊の年齢の枠や，受け入れ側の向学心や資力に問題も多い。たとえ乏しい語学力でも，精神的に彼らを引っぱっていける魅力ある青年，こんなコーチ像が浮かんでくる。

現場での技術論や方法論は，私のメモ帳の段階に留めさせていただき，折あるごとに後続隊員と話し合い活用していくことにする。後半のレポートは2年間行なってきた体力トレーニング方法を仏文に訳したものである。この体力トレーニング方法は，元全日本トレーナー斉藤勝氏の方法論の多くを活用，応用した（省略）。

なお，この場を借りて，在テュニジア駐在員柳井さん，同調整員塩谷さん，そして元調整員恵原さんはじめ，機材の面で多大なバックアップをしてくださった東京事務局の担当者の方々，さらに在テュニジア日本大使はじめ同大使館員の方々に感謝します。

最後に，同じバレーボール隊員の石渡氏，吉田氏，新隊員の斉藤氏の活躍を祈って「いやさか」!!

報告書への補記

大島　晃

① パノラマ

テュニジアを紹介した記事には，必ず白と青の町並の描写がある。家々の壁は白く，窓わくは青い。建物の色は，テュニジアの観光条例で決まっている。観光シーズンの夏は，ほとんど雨が降らない。否応なしに眩しい白い家と紺碧の空が目に飛び込む。それにしても青インクを流したような地中海は，輝いた美しさだ。鮮かなカラー写真が良く似合う。モスケの尖塔も初めて見る人の印象に深い。テュニジアはヨーロッパのリゾートゾーンとして毎年多くの観光客を集めている。

サハラ砂漠に下半身をすっぽり覆われ東側のリビア，西側のアルジェリアにはさまれたアフリカ大陸最北端に位置する。国土は，日本の約$\frac{1}{3}$，人口580万人，セム民アラブ人のイスラム教国だ。地中海の温暖な気候がテュニジア人の気質を特徴づけたかのように，からっとして屈託がない。

子供たちは，ジャポネ（日本人），シノワ（中国人），カラテ，と声をかけてくる。裏道へはいると，どこでもサッカーだ。サッカーは，老若男女が楽しむ国民スポーツである。彼らは，スポーツ好きだ。ウインタースポーツと野球以外は，ほとんどの種目がある。

② アラブ，アフリカ，ヨーロッパの交差点

マグレブ（日の沈む地の意）…モロッコ，アルジェリア，テュニジアは，古くから，ヨーロッパと深い関係を持っている。特にテュニジアは，古代ローマ時代，北のローマ，南のカルタゴ（テュニス郊外の古代港）として地中海文化の双璧を成し，栄えに栄えた。6世紀に，アラブ人がアラビア半島やエジプトから移住し，イスラム文化が開花する。近代では，フランスの保護領となり，ヨーロッパ近代文明が押し寄せている。地理的には，アフリカの一部で，黒人の住民もいる。

１９５６年のテュニジア独立以後は，ブルギバを大統領とする新デイストゥール党の一党政治。社会民主主義と名づけられるブルギバ主義は，アラブ諸国

の中でも比較的西ヨーロッパのイデオロギーに強く影響を受けている。

教育の充実は，国の重点政策のひとつだ。公用語はアラビア語だが，文化的必然性から，ほとんどの人はフランス語を話せる。

③　ことば

アッサラーム（今日は），サヴァ（元気ですか）。こんな挨拶をよくする。

テュニジアの国語は，アラビアフランス語だ。もちろんこんな言語はないのだが，アラビア語では，表現力に限界があるという。日常，フランス語で物事を考えるテュニジア人も多い。専門技術用語は，フランス語がほとんどだ。主語をアラビア語，目的語をフランス語で，という場合もある。

日本人の私が出席するコーチ間の会合では，フランス語で話合いを始めてくれる。15分もたたないうち，今度は，アラビア語が入ってくる。フランス語でも難解なのにアラビア語が入ってくれば，馬耳東風にならざるを得ない。しかし，大事なところには，自分の意志を反映させなければならないと思い，神経をピリピリさせる。30分の会議でもぐったり疲れる。

私の練習には，フランス語を主に簡単なアラビア語も使う。ある記事に「スポーツ指導は，手振り身振りが使えるから，他の職種より，ことばの苦労は少ない」とあった。確かに，黒板を使っての授業形式の練習は，あまりない。教室型が，作文能力を求められるなら，スポーツは，話す能力を要求される。人の心に訴える表現ができなければいけない。無心，根性など，スポーツに欠かせない発想をどう訳し教えるのか。彼らのもつ合理的な考え方，創造力，個性尊重の精神を伸ばしながら，日本人のもつ，互いに助け合う連携プレーの精神を教えられなかったら日本人コーチの存在価値はない。該意はことばによって伝達される。ひとつでも多くの表現，巾広い語りを身に付けることがスポーツ協力の大事な点だ。毎日，15分でもよいから必ず本を開く習慣をつけたい。

「ことばは，人々に励ましを，実践は人々に勇気を与える。」著名なスポーツマンの名言だ。

④　スポーツ環境

今ほど，世界的にスポーツが大衆化していなかった19世紀初頭の英国では，スポーツは，中産階級の所有物であった。余暇を楽しむためにはじめられ，陸上競技，球技，ボートなどが主な種目であった。スポーツは，豊かさのシンボルであった。国民の生活レベルが向上するに従い，時間的，経済的な余裕を持ち合わせた者が増え，スポーツの大衆化現象となってきた。スポーツの普及は，豊かさのバロメーターだと言えないだろうか。

直接的な生産性のないスポーツを，遊びのひとつと考えれば，豊かさに支えられた遊びは，厳しさを追求してくる。本気になってスポーツに取り組める社会は，豊かさの証しであろう。

テュニジアのスポーツは，大衆化の初期の段階だ。バレーボール選手は，協会登録数で約3,000人，スポーツ施設や用具の不備，さらに，国民のスポーツの理解が十分でない中で，ナショナルチームは，1979年11月のアフリカ選手権で優勝しモスクワ・オリンピックの出場権を得た。エジプトが参加していないとはいえ，よくやった。拍手を送る。実力を確かなものにするには，底辺を拡大しバレー人口をふやし，練習の質もアップさせる。ただし，短期的な効果を志向し，勝つことだけに固執するのは，空虚なことだ。スポーツの本質，意義を忘れず，厳しさを追求してもらいたい。

「スポーツは，自主性を尊重し，セルフコントロールは創造性を高め，人間性を開発する。」スポーツ社会学者梅村清弘氏は言う。

西ドイツのサッカー指導者，デットルマン・クラーマー氏は言う。「サッカー（スポーツ）は，子供を大人にし，大人を紳士にする。」心に刻んでおくことばだ。

多くの選手は，スポーツに対する葛藤がある。豊かさ，安定性を求めるのは人のつねだ。スポーツをしていて良い就職，良い収入を期待するのは，非常に難しいと思いがちだ。雇用状態，条件が先進国ほどよくないテュニジアでは，選手を現実主義者にする。なんのための，だれのための練習かをわからせないと，選手はついてこない。

⑤ 宗教

国民性と宗教思想の関係は深い。ほとんど全ての試合が割りとあっさりけりがついてしまうのは，インシャアラーの考えからなのか，技術が未熟なのか。周知のようにインシャアラーとは，全てのでき事は，全知全能の神アラーの思し召しであるというイスラム教の教えである。ひとつの目標である勝利を目ざすとき，負けそうになると運命と考えて力をぬき，勝てそうであればこれも運命として120％の力を出す。こんな見方をしているのは，私ひとりであろうか。ラマダン（断食）は，貧者の苦しみを分つためにと，毎年約1ケ月間，日の出から日の入りまで水すらのどを通してはいけないというイスラム教の行事である。

スポーツマンにとっては，大問題である。だが，テュニジア現代っ子は，あまり熱心な信者でないらしい。本当に断食している選手だけ注意して練習させ

れば，さして気にすることはないと思う。

⑥　コーチとして

感情的な無思慮なコーチは批判の憂き目に会うのは，どこでも同じだ。コーチと選手の人間関係，異民族間で互いに信頼関係を持つことは，成熟した人間どうしでさえ，たやすいものではない。かえって子供どうしの方が簡単かもしれない。

テュニジアの選手と同居した経験から，ものの見方や考え方は，だいぶ違う。彼はお互いの価値観の共通項をできるだけ多く持ち，お互いが良いと思っていることを，こちらが率先するところから仕事が始まると思う。

チームがアタック練習だけに力を入れていれば，それを批判して，つらいレシーブ練習をさせるのではなく，アタック練習をさらにやりやすいように内容をおもしろくし，加えてレシーブ練習をさせるようにする。練習に創造性，新鮮さがあれば，コーチは無駄な妥協をしなくてすむと思う。

⑦　システムの違い

スポーツクラブ制度はヨーロッパから輸入したいろいろなシステムのひとつだ。日本とアメリカぐらいだろうか，各学校，大学単位のクラブが学生スポーツの主流を成しているのは。企業クラブ間の日本リーグ戦など，諸外国のスポーツクラブ制度からみたら珍しいであろう。いつでも高度なスポーツを楽しめる地域スポーツクラブが生活のそばにあるのは素晴しい。日本では水泳クラブぐらいが一線級の選手を育てられる町のクラブであろう。

テュニジアのスポーツクラブは，地域住民のための組織で，原則的に家の近くにあるクラブを自由に選ぶことになる。選手は，小学生から登録でき，年齢別に，Ecole（小学校低学年）Minime（同高学年）Cadet（中学生）Junior（高校生）Senior（大学生，社会人）の5ランクで，一環した選手教育をする。同クラブにバレーボール，バスケットボール，ハンドボール，サッカー，陸上競技，水泳など，複数の種目がある。クラブのコーチには，学校の教師が多い。放課後を利用して練習を行ないコーチ料を副収入とするセミプロである。

クラブには，国の援助があり，選手にユニフォーム，シューズなどの他，交通費まで出す。政府は，スポーツ教育に積極的だ。外人コーチの要請も多種多様にわたっている。外人コーチは，日本をはじめ，韓国，中国から来ている。ヨーロッパ人はあまりいない。

⑧　テュニジア・バレーボール協会（ＦＴＶＢ）

スポーツ隊員は，青年スポーツ省と1年ごとの契約をかわし，それぞれの協会に派遣される。ポジションは，種目によって異なるが，柔道のように，着任と同時にナショナルチームの総監督になるようなことは，他の競技では，まずない。バレーボールの場合複数のコーチが入れ代わり滞在しているが，日本人どうしの共同作業は，ほとんどなく，中央と地方で，それぞれのテリトリーを持つことになる。

任地の決定は協会がするが，派遣されたそれぞれのコーチの適性や要望を考慮してもらうため，責任者と納得ゆくまで話し合いをし，前任者の意見を参考にしつつ，任地を決定すればよい。

バレーボール協会の普及強化の責任者は，ムカウワル・ブァティイ氏で１９７６年から普及強化部長を任されている。ルーマニアでバレーボールを勉強し，体育大学（ＩＮＥＰＳ）で教鞭を取っている。日本人コーチの要請は，彼が始めたもので，精力的に仕事をする行動派だ。弱冠３０歳。協会の幹部には，ＩＦの理事をしているズイテン氏がいる。首相ヘディ・ニィイラの親戚で実力者だ。

⑨　アフリカのバレーボール

全アフリカ大会で優勝の経験があるのは，エジプトとチュニジア。アフリカ大陸のバレーボールは，極端な北高南低だ。北アフリカを制するものはアフリカを制すると言われるように，ブラックアフリカとのレベルの差は大きい。

政治の介入は，モスクワ五輪で大問題となっている。アフリカアラブ圏では，１９７９年3月のエジプト ― イスラエル平和条約調印以降，エジプトは，アラブ圏で政治，外交，経済面で孤立してしまった。１９７９年11月のアフリカ選手権で，チュニジアが楽勝したのは，エジプトの参加が認められなかったからだ。

比較的レベルが高い北アフリカでも，エジプトとチュニジアを除く，リビア，アルジェリア，モロッコのナショナルチームは，日本の実業団リーグに入るのも難しいかもしれない。１９７８年の世界選手権でエジプトは，チュニジアに勝っただけで，あとは全敗に終っている。

アフリカのレベルアップのためにも，エジプトの復帰が待たれる。世界に通じるチュニジアのナショナルチームをつくるためにも，良きライバルは必要である。

⑩　チュニジアの国内試合

１０月から6月までの1シーズンに，各リーグ内総当りのリーグ戦とチュニ

ジアカップのトーナメント戦の２大会がほぼ毎週末に行なわれる。

国内リーグは，男子が１部・２部１０チームずつ，３部が１２チームの３部リーグ制。女子が１部・２部６チームずつの２部リーグ制である。Senior（１８歳以上の社会人，学生）以下同様。

国内で本格的プレーができる体育館は二つしかなく，総試合数の８０％は屋外。クラブが集中する首都テュニスと南部の中心都市スファックスで多くの試合が開催される。

⑪　筆者の略歴

バレー歴１１年，学生時代は関東２部リーグでプレーしていた。テュニジアでは，ナショナルチームのコーチ，ナショナルチームジュニア（テュニス選抜）とクラブチーム「ズィトナ」の監督，ＩＮＥＰＳ体育大学のバレーボールクラスのアシスタントであった。

⑫　これからのナショナルチーム

平均身長１８３.５cmの現在のナショナルチームでは，世界のバレーにとうてい太刀打ちできない小型チームだ。一昨年の世界選手権で得セット０の汚名もいたしかたない。１９７８年度からジュニア対策に力を入れ始め，次代のナショナルチームをになう選手たちの養成が大目標になった。私のコーチしたナショナルチームジュニアのテュニス選抜チームにも有望新人が集まった。

ラリディ・ファイザル　１８歳，身長１９８cm，体重８５kg，サージェントジャンプ８８cmを筆頭に，３人の１９０cm代選手がいる。ラリディは世界に通じる素質を持っている。アフリカでこれだけの逸材は，近年見たことも聞いたこともない。彼の自覚次第でナショナルチームの今後が楽しみだ。

⑬　求められるコーチ像

テュニジアには日本の県にあたる郡がある。その内の７郡には，バレーボール協会の連絡事務所である地方協会が設置されている。バレーボール協会はそれぞれの郡にコーチを派遣したい意向だ。現在まで，ビゼルタ，ベジャ，ケロワン，スースの４地区に隊員がはいっている。一様に仕事の絶対数が少ないという。地方発展の足がかりとしての意義はあるが，まずテュニス，スファックスの２大都市のチームの強化を目標とすべきだ。テュニス１名，スファックス１名，さらに北部と中部に１名ずつが理想であろう。テュニス，スファックスではナショナルチームの選抜チームの強化に参画する。

隊員が，実績のある老練なコーチでない以上，ナショナルチームを任されることは，まずない。ナショナルチームの関係者は，アフリカ代表チームとし

て，世界選手権や，オリンピックに何度も出場している。実力的に話にならなくとも，アラブ・アフリカのリーダーの自負がある。チーム運営にも，ナシ゠ナリズムは反映している。隊員は，ナシ゠ナルチームでは，アシスタントコーチだ。仕事の内容は，コンビネーシ゠ン速攻バレーの理論と実践，模範プレー，体力トレーニングなどである。

また，ナシ゠ナルチームジ゠ニアは，隊員のバレーボール理論，実践，語学力，人間性などの実力によって，任される。いずれにしても，方法論や心構えを日本と比較することによって，効果の上がりそうな課題を選び，創造し，教えることだ。

地方のコーチング活動は，どのチームの技術水準もかなり低く，基礎技術の反復練習がテーマとなる地道で根気のいる仕事である。

現地では，バレーボール協会と相談して任地を決めるが，仕事は与えられるものではなく，自分でつくり出すものだ。良いと思ったことはすぐ実践する行動力がないと，任期は，矢のごとくに通り過ぎるだけだ。

テ゠ニジアのバレーボールの実状と要望から次のようなコーチ像が浮かんでくる。

実業団か全国レベルの大学で選手経験が十分あり，模範プレーがナシ゠ナルチームに通じ，体力トレーニングや戦術理論に精通している人が理想だ。

各大学や，実業団，クラブチームなどに積極的にアッピールし，潜在隊員候補生を捜す努力，宣伝を十分にしてもらえれば，良い人材は集まると思う。

⑭ 携行機材は必要最低限に

途上国では管理能力が低く，業務上の横領が平然と行なわれる危険がある。どうしても必要なもの，個人で使うものをしっかり区別して携行すべきだ。

宛先や，税金の問題を確認し，その機材がどういう目的で，だれによって使われるのかを明文化し証明書を作っておくと，後のトラブルは避けられる。

⑮ スポーツ協力の見直しを!!

途上国がスポーツ隊員に期待しているものは大きい。一国単位だけに，どんどん大きな課題を投げかけてくる。スポーツ隊員の責任は重大だ。

日本のナシ゠ナルチームが低迷している時期だけに，なおさら信頼のおけるコーチ派遣であってほしい。

現在バレーボールコーチを送り出す機関は，三つある。日本バレーボール協会，国際交流基金，そして協力隊だ。前2団体は，上級コーチ資格が要求されるため，派遣コーチ数は限られている。

協力隊に負うところは大きいと思う。スポーツ隊員の応募者は毎回多いとは言えない。これをどうにか引き上げられないだろうか。実業団，大学への呼びかけをはじめ，現役スポーツ教師やスポーツセンターのコーチなどへ，さらに宣伝，アッピールしてもらいたいものだ。次に，事前研修制度の充実。従来のように，どこかの団体へ行って見てレポートを提出させるだけでなく，一定の期間カリキュラムを組んで，総合的にバレーボールを研修することを義務づけ，終了者に資格を与えるシステムにしてはどうだろうか。

さらに，相手国のコーチや有力選手の受け入れ研修制度を改善すべきだと思う。

現在の各県に委託している電気や自動車の技術研修制度は，最低９ヶ月の期間と決められている。

初級コーチや選手が，コーチ法やプレー技術習得のためなら９ヶ月は必要かもしれない。途上国とはいえ，上級コーチや有力選手の研修であれば，２週間から２ヶ月で十分なはずだ。

スポーツを日本で学びたいという熱心な途上国の人々に，もう少し門を広く開けてもらえないだろうか。

⑯　あとがき

啓発課からのご依頼でチュニジア隊員任期中の最終報告書を大巾に補稿させていただき追記と致しました。

私の表現力の不足はどうしようもなく，未熟な文章で本意が通じるかどうか心配です。

たかが２年４ヶ月の隊員経験をもとに，とりとめもない生意気なことばかり書いたことを反省しております。

しかし，これからスポーツ隊員をめざしておられる方々に少しでも参考になればと思って書かせていただいた次第です。

どんな分野でも同じですが，スポーツ協力も一朝一夕のものではなく，１０年，２０年という長い間に徐々に効果が表われてくるものと思います。次から次へと出て行かれるスポーツ隊員の方々が，なるべく同じような苦い経験をしないで，先の隊員を踏台にしてよりよい活動が出来ることを願っております。

近い将来のテュニジアバレー界を背負う新人１９５cmトリオ。いずれも，１５，１６歳の若さ，このカワイイ子分たちをどうにか，一人前の選手にと考えている

ジュニアナショナルチーム。７８年夏の合宿

大島隊員の報告書を読んで

吉　村　恒　男

私は，日本バレーボール協会指導普及委員会より，技術専門委員を要請され，長年にわたってこの業務を担当してきましたが，その間数多い隊員からの報告書を読ませていただきました。これまでの報告書に対する所懐の一端を述べさせていただき，今後の参考にしていただければと思っております。

まず，受け入れ各国の希望調査表から，バレーボールの施設用具が不足しているにもかかわらず，バレーボールに対する理想は高く，高度な技術と優秀な指導力を求めていることで，それだけに派遣されている隊員の方々の悩みや苦労は言い尽くせないものがあると思います。恵まれた物質文明の社会で育った若い日本人が，一旦外国で不自由な立場に立たされた時の驚きと不安は大変なものがあっただろうと想像します。しかし日本でも昭和１０～２０年代にそのような悩みはあったのです。皮に靴修理用の糸を通し，ワセリンをぬり，チューブをノリで貼り，１個のボールを大切に使った時代があったのです。でも，バレーボールに対する情熱は今も昔も変わりありません。恵まれない地域での指導は単なるバレーボール技術の提供者ではなく，地域におけるバレーボール愛好者と広く心を通わせ，情熱をもって適切な指導助言をお願いいたします。若さと情熱をもって頑張って下さい。

バレーボールは，どこの国も普及活動と選手強化を２本の柱とし，車の両輪のようにバランスをとりながら発展につとめております。派遣国のスポーツ省やバレーボール協会の組織機構をよく理解し，密接な連絡をとり，組織の中での普及活動と選手強化の方針を把握し，２年間で実施する指導計画をすみやかに立案することが必要です。

普及活動については，地域社会の人々と友好を深めながら，バレーボールを構成する技術構造や技術教程を理解していただき，特に初心者には，ボールになれさせるための練習から入り，基本技術に移行して行く段階的指導が必要です。導入の段階でチュニジア派遣の大島晃君は，技術映画を使いバレーボールに対する理解を深めるよう努力されたようですが，これなどは絶好の教材です。

基本的には，バレーボールの技術構造として，ボールを打つ動作。サーブ，スパイク，ボールを受け渡す動作。パス，トス，レシーブ，打つ・受け渡す両方を備えているものが，ブロック技術ですから，その基本を正確に指導し，各項毎にリードアップゲームなどで楽しみながらボールに親しませる心がけが大切でしょう。普及の目的は，地域の人々とボールを通じて楽しみながら，強い体力を養い，相互扶助や協同の精神を育てることにあるので，その目的意識をはっきりと持たせることが大切です。

選手強化については，世界におけるバレーボールの現状をみると，日進月歩の躍進を続けております。ルールの改正や取扱いの変更はもとより，新しい技術やフォーメーションが開発されつつあります。その現況をつぶさに分析し，普及活動の中から体力的・能力的に恵まれている選手の発掘に努力し，バレーボールの競技力を向上させるための，技術・体力・チームワーク・経験度・指導力の5要素を基本に専門的な見地に立って選手強化に努め，国内大会の充実と，隣国との親善試合，国際大会などに積極的に参加し，選手個人またチームの持っているあらゆる能力と可能性を追求し，好成績をあげるよう推進してゆくことです。そのためには，過去の体験中心的な指導法や練習法から脱皮して，科学的かつ合理的な指導や練習を展開し，国際的視野に立って独創的なものを作り出すよう研究を重ねてゆくことです。

普及活動で底辺が拡大すれば，選手強化では頂点が高くなり，優秀な選手が誕生すれば，その選手にあこがれをもち，バレーボールに親しむ人も多くなり，ますます充実して所期の目的が達成されてゆくと思います。

バレーボール指導者として心がけなければならないことをあげてみましょう。バレーボールへの情熱と熱意を強く持っていること。研究熱心であること。人間性が豊かで政治力のあること。バレーボール指導者として信念と自信と誇りを持つこと。常に選手と接し，良い相談相手になること。謙虚で真面目であること。明朗快活である反面厳しいこと。信頼され魅力のある人柄であること。忍耐と根気のあること。創造力のあること。

日本のバレーボールの指導水準は，世界的に非常に高い。教えてやるという気持や押しつけの指導ではなく，日本の指導法を紹介するという気持で指導に当って欲しい。そして隊員の方々の努力により，開発途上国への援助をより心のかよったものにしていただくよう，お願いいたします。（青年海外協力隊技術専門委員＝バレーボール）

あ と が き

青年海外協力隊員の報告書集を発刊するに際し，数多い報告書を，どう分類し，いかに活用するか，いろいろ意見がありましたが，隊員の活動を広く紹介する観点から，今回は国別編とし，昭和５４年度，５５年度の２カ年で全派遣国編を完了させる予定とし，その後，順次，違った角度で報告書集の作成を継続する方針で臨みました。

国ごとに収録した報告書の数も，諸般の都合で数篇に限定せざるを得ませんでしたし，職種の配分などについても，それぞれの国における協力隊の特徴をカバーしているかなど，不充分な点もあろうかと思いますが，とりあえず発刊に踏み切りました。

ご活用下さる皆様がたのご意見，ご提言をいただきつつ，今後一層の充実をはかりたいと思います。

末筆ながら，この報告書のために，ご多忙中にもかかわらず，積極的にご協力いただき，報告書に対するコメントをご執筆下さった技術専門委員の方がた，ならびに報告書の収録を快諾され，「追記」の原稿を寄せられた帰国隊員の皆様に厚くお礼申し上げます。

なお，本報告書集のご活用にあたり，他への転載等を企画される場合は，青年海外協力隊事務局（啓発課）に必ずご相談下さるようお願い申しあげます。

昭和５５年３月

啓発課長　髙　橋　成　雄

海外協力の現場から――青年海外協力隊員の記録　<テュニジア編>
昭和５５年３月発行
編　者　国際協力事業団青年海外協力隊事務局
発行所　国際協力事業団青年海外協力隊事務局
〒150　東京都渋谷区広尾4－2－24
電話（03）400－7261(代)
印刷所　日 青 工 業 株 式 会 社
〔非売品〕

LIB